

川柳塔

平成十二年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷八七五号



日川協加盟

No. 875

四月号

第15回 国民文化祭・ひろしま2000

— 瀬戸内の風 そこにうたがある —

応募受付期間 4月1日(土)～6月30日(金)

宿題・選者 (各題2句・未発表作品に限る)

事前投句

「和紙」

「にっこり」

大野 風柳選

「おみやげ」

「元氣」

奥田 みつ子選

「生まれる」

「橋」

川島 諷云児選

「酒」

「不思議」

定井 路也選

「広い」

「磯野いさむ」

藤本 岳豊選

「野谷」

「竹路」

塩原 幻四郎選

「今川」

「乱魚」

柏原 岳豊選

「吉岡」

「龍城」

塩原 幻四郎選

「仲川たけし」

「瓢太郎」

草映 選

「小・中・高校生は無料」

「所用紙を使用のこと」

本見 草映選

「1000円」

「広島県大竹市小方1-11-1」

塩原 幻四郎選

「第15回国民文化祭大竹市実行委員会」

「事務局」

塩原 幻四郎選

「TEL 0827517111」

「FAX 0827517124」

塩原 幻四郎選

「大竹会館講堂(アゼリアホール)」

「11月4日(土)10時30分～15時30分」

塩原 幻四郎選

「問い合せ及び募集要項請求先」

「〒730-8511 広島市中区基町10-52」

塩原 幻四郎選

「賞 文部大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・他」

「入選発表大会」

塩原 幻四郎選

「〒730-8511 広島市中区基町10-52」

「TEL 08212281211」

塩原 幻四郎選

「主催者 文化庁・広島県・他」

「全日本川柳協会」

塩原 幻四郎選

「事務局」

「〒730-8511 広島市中区基町10-52」

塩原 幻四郎選

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版

教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8
TEL 06-6658-8741(代) FAX 06-6652-2928

川上富湖の句

橘高 薫風

本誌先月号のこの欄に「五十の晩年」と題して亡き川上富湖さんの事を書いた。重ねてもう一度書きたい。その理由は富湖さんの句がすばらしく、これからの川柳塔の句風に寄与すること大で、故人の将来の精進、更なる向上を私は期待していた。後々誰彼が見て習ってほしいと思うから、「二重奏」から引用する。

螺旋階段有頂天まであと少し

灯台など狭い所の階段に多い螺旋階段を、際限もないと思えるほどに登ると、誰しもうんざりする。しかし作者は格別「有頂天」という並みの者では考えられぬ語を据えるのだ。単調な階段がたちまちロマンの花街道にすり変わるのである。

探れば楷書も崩れ出すだらう

人形をくすぐることは一般でも出来る。楷書体を行書や草書にするのだ。字を撰

るなど発想の時点からの特異性を思う。

リセットボタン笑って押せるのは女
女はロマンチックだと言っても根は現実的で性根が据わっている。ここいとうとき容赦なくリセットボタンが押せるのだ。男はがっかりとして押すが、女はしつかりとした姿勢で押すのである。

男爵という名の羊を擗り潰す

函館ドックの川田男爵が明治時代に輸入して北海道に広めた薯で、この名がある。台所でのウイット、軽い句である。

ワレモノと家族写真に書いておく

このワレモノも前句と同じ作者の機知であるが、核家族という現実を引きずる故に深刻だ。それを宅急便扱いにする。

莢を出てサラリーマンになった豆

豌豆が莢を出て社会人になっていったが、やはり豆の子は豆であった。それでのみずみずしい門出の姿にほっとする。

骨拾う箸冷静な太さかな

この句は父上天矢十郎氏の骨上げの時の感懐を表したものと思われる。私は「冷静な」の一語に自然に出て揺るがぬ心理を読み取る。心乱れず拾い上げることの出来たのは箸の太さにも由来し、も

つと細ければ心を刺したかも知れない。

触れられて一気に咲いてしまいたいそう
富湖さんはバラであったか、牡丹であったか、時を経て大輪さんに聞いてみる。

茶わん蒸し宝探しを始めよう

昔は良かったと強いて言わないが、事茶碗蒸しに関しては昔がなつかしい。今は若者向きになったからか、百合根とか銀杏の実の入ったのは希だ。私も宝探しの思いで食べるが、どこも味は落ちた。

終焉はお見事でした流れ星

この句、富湖さんへの弔吟ではない。富湖さんご自身の句だから胸がつまる。ご親族の方には一層の思いが迫ろう。

句集「二重奏」やその後の句を辿ってまだまだ作意の出過ぎた句や、若さだけという作もあるが、これだから楽しみだった。富湖さんはその出来る人だった。

私は、ここで更に大輪さんを追い詰めようとする。川柳塔誌平成十年二月号の特集「おしどり同人」に掲載の大輪さんの句である。たった二年を経た句に対する思いにも、天国と地獄、川柳とはそういうものなのだ。人生がそうなのだから。

夫婦茶碗並べて語ることもなし 大輪



川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 川上富湖の句	橋高薫風	……	(1)
今年はどうな年だろう	西田柳宏子	……	(2)
川柳塔(同人吟)	橋高薫風選	……	(4)
この句 この人	橋高薫風	……	(50)
自選集	東野大八	……	(51)
川柳の群像 福岡阿彌三	河内天笑選	……	(56)
誹風柳多留二四篇研究 16	橋高薫風	……	(58)
水煙抄	中原諷人	……	(62)
大空のこころ (III)	大内朝子	……	(93)
秀句鑑賞 同人吟		……	(60)
水煙抄		……	(104)

今年はどうな年だろう

西田 柳宏子



相槌を打って私を

火の中に 川上富湖

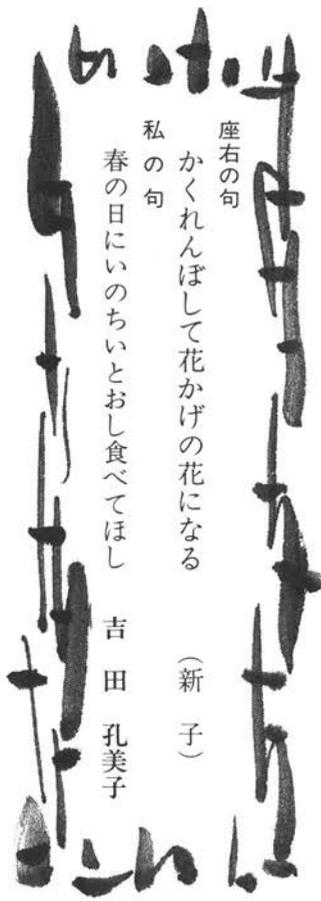
この句は富湖さんの辞世の句と承っている。一月の本社句会選をして頂くこと

になっていたが、ご欠席で代選が立てられていた。誰もが風邪だろう位に軽く話合っていたが、その時既に手遅れであったと大輪氏からお聞きして、大輪氏も心中句会どころではなかっただろうとお察しする。それから丁度二十日経て一月二十七日遂に訃報は私達の耳を貫いて驚かせた。一昨年のオール川柳の大会で特選の大賞を獲得され、爾後大輪氏共々各方面での入賞受章後を絶たず、わかやまの鴛鴦作家の名を響かせていた。

それにしても惜しい。世に謂う若くして徳を取り過ぎたとも謂うべきか、それにしても惜しい五十歳と言う若さが恨めしい。

富湖さんは新宮市熊野地で大矢十郎、まさ子夫妻の間にお産れになり、ご両親の川柳家族の一員として小さい時から川柳を耳にして居られた。今や十郎氏を知る人は本社でも数

愛染帖……………	波多野五樂庵選……………	(90)
茴香の花……………	宮西弥生選……………	(94)
「キッチン」……………	村上ミツ子選……………	(96)
一路集「鈴」……………	須郷井蛙選……………	(96)
「のびる」……………	岸本宏章選……………	(97)
初歩教室「はやい」……………	吐田公一……………	(98)
三月本社句会……………	野口節子……………	(102)
各地柳壇(佳句地十選/鷺見正子)……………	みつ子・楓楽……………	(126)
奥谷弘朗先生を偲ぶ……………	……………	(124)
柳界展望……………	……………	(123)
四月各地句会案内……………	……………	(122)
■編集後記……………	……………	(106)
……………	……………	(100)



座右の句
かくれんぼして花かげの花になる
春の日にいのちとおし食べてほし
吉田 孔美子
(新子)

人であろう。
昨年未から十二月一月で七人を超える川柳家の物語者を見る。川柳塔関係だけでも、松川杜的氏、辻白溪子氏、田中透太氏、北山悟郎氏……更に私個人の身内の葬儀を加えて自分自身あきれている。

陰気な目次下にして申訳がありません。一つ嬉しい話で締めくくり、ミレニアム二〇〇〇の年を明るく切り抜けたと思います。

それは昨年難病指定を受けた私の紫斑病が十一月以降投薬なしで月一回検診に通院することになり、十二月、一月、二月と通院採血検査を受け、心配される血小板も一向に減ることなく、常に二十万台をキープして主治医の先生も驚くやら、あされるやらですが、もう少し様子を見ようと月一回の検診は続けられそうです。早く快気祝いの美酒で乾盃したいと思っています。

何はともあれ川柳塔社も高齢者が増え、何となく頭許り重たいのでなく、新進気鋭の若手中堅作家の進出を期待する次第です。

川柳界自体全般に解散、休会の川柳会が出ています。川柳塔の若手の作家の皆さん方にお願います。どうかあなたが今の川柳界の旗手として高らかに羽搏いて下さい。

今年はどうな年だろう……。それは會員の皆さん一人一人が川柳塔への積極的な若さの注入が決めてくれると思います。



橘 高 薫 風 選

大阪市 西 出 楓 楽

不機嫌な街で流行色は黒

コンピューター自由自在は異星人

よく笑う人に一目置いておく

節分の豆食べに来る鬼もいる

自信ない親でおもちやを買いすぎる

冬続く駈々堂の消えた街

和歌山市 川 上 大 輪

点滴五本マリオネットの妻である

病院の廊下で闇とすれ違ふ

闘いに勝って優しい顔になる

デュエットはこれからなのにお母さん

どうしよう富湖おなかが空いてきた

ごめんよ富湖今日も涙が出てきたよ

川西市 松 本 ただし

鬼の目を盗んだ筈の花名刺

春告げる鳥より早い沈丁花

流木のひとつひとつに違う傷
残る矢も一本だけの余生かな

辛辣な言葉を避ける牡丹雪

二十世紀の収支決算書いている

和歌山市 牛 尾 緑 良

雪乱舞 訃報が僕の真うしろに

風を聞く私の中にある季節

疑いも少し 注射をされながら

躊躇をドミノ倒しが押し潰す

冬眠が終つて残る皮下脂肪

大安も時々巡る夫婦の譜

鳥取市 武 田 帆 雀

赫赫と一札をして初手合い

ポランテア出勤旦那お洗濯

投球のモーシヨン猫を追つ払う

鏡に咎め立てせぬ雪二尺

上流の顔で痩せ蟹買いなさる

とんどの残り火撮って記者が去に

松江市

川本 畔

好きな人にはつい背伸びしてしまふ

聴いている仕草で眠くなっている

噴水がおどけてみせる花の中

わたくしの読み深すぎて孤独です

深呼吸霧がぐるぐる巻きにする

とんど焼き古い手足を焼いている

鳥取県

岩崎 みさ江

空の下われは小さき宇宙人

薄墨をたつぷり含む春の筆

風になりたや母の萼へ吹く風に

哀しみを連ねて美しい数珠に

茫茫と鏡の中にある月日

背を向けた人も輪になるとんど焼き

広島県

藤解 静風

折り返し地点にしたい二〇〇〇年

毅然として老人福祉の世話になる

星の降る夜もいくさをしとるのか

ピーポーに往きの元気のない戻り

忠告が裏目 返事をしてくれぬ

忘れられそうときどき咳をする

島根県

松本文子

荒海やみんな忘れた訳じゃない

お久し振り 亡夫の名前で飲んでいる

コーヒーとパンなんかには負けないぞ

殿さまに食べさせず魚の骨をとり

二〇〇〇年最後の力出す会だ

あと一つ最後の一つ埋まらない

箱の隅に北を忘れた磁石あり

日の丸は折目正しく箱の底

箱書を見てから茶碗急に褒め

寒月に召されしか雪うさぎ消え

前例がないと院長首ひねる

どしや降りの中で小さなくい違い

西宮市

亀岡 哲子

風花の京は京らしにしん蕎麦

出発の時は軽々担いだ荷

慶びに欠席とあり姉老いぬ

父の忌もまた母の忌も小雪舞う

逆鱗に触れてはみたが静かなり

暖房の部屋で開かぬ福寿草

羽曳野市

徳山 みつこ

梅の枝春たしかめて灯をともし

おでんぐつぐつ海外の子をふと思

春へ蔓のばす私も豌豆も

時計から逃れてのたりのたりかな

金砂子ぜいたくに撒き海の日

核ボタンもう逃げ場所はありません

豊中市 田中正坊

低金利対策 元金をくずす

人生も予備役おわり後備役

閑だから永六輔と対話する

忙と閑その中ほどがむずかしい

まどろんで見る父のゆめ兄の夢

いくつもの訃報がとどき春となる

和歌山市 堀畑靖子

豊かさがイコール幸せとも言えず

ふるさとに習わしがある花暦

パソコンと戯れていた冬ごもり

春だ春 化ける小道具買いに出る

化けるにも時間のかかる古ダヌキ

人生いろいろ波の間に散る椿あり

弘前市 一戸ツネ

明日へ渡る橋が欲しくてひとり酒

橋の上のぞけば春の水速し

梅匂う土橋にそよと風渡る

シャンソンに津軽の詩の橋を架け

手をあげて又にしますと戻り橋

奪衣婆の吟味が続く橋の上

松山市 宮尾みのり

鏡の中のわたしがふっと他人めく

誰にでもやさしく妻の気に入らず

搔き分けるほど友がおり金も要り

檜山で五七五をするつもり

残照に映える女でいたいから

愛しくてかなしく生きた道がある

出雲市 岸桂子

冬木立渴いた音で春を呼ぶ

コーヒーにむせる話を聞かされる

悔い一つ畳んで落ちてゆく眠り

難題を抱えたままに春が来る

打ち明けて友の丸みに丸くなる

友情も時に路傍の石になる

兵庫県 大谷幸次郎

二日酔勝手に禁酒誓う男

煮炊きする事は不得手な嫁がくる

やわらかく豆煮る話雪の夜に

不況列島春一番を待っている

のびのびと育ち家風に収まらぬ

春雷がのびた鼓膜を縮ませる

豊中市 井上直次

身辺整理往事沸ふつ抄らす

赤い爪写経の墨をすっている

知りすぎて人生わびしと笑むお人

知恵蔵を遅れまいとてまたも買う

無職ですだけど予定は詰まってる

差出人不明の賀状へ消去法

砂川市 大橋 政良

追従の笑い定年から消える

晩酌の相手を猫もしてくれぬ

磨いても光らぬ時がありました

砂の上歩きよろこぶ足の裏

ゴミ箱で笑い袋が笑い出す

弘前市 高瀬 霜石

生き上手きちんきちんと歳をとる

杖となる声を探している白夜

東京に住んでる可哀想な虫

側に居て欲しい娘と息子の差

仏壇の前は居心地悪すぎる

弘前市 小寺 花峯

指先が俺に似ている孫の顔

日本の春だ日の丸掲げてみよう

初孫を抱きあげ腰が上がらない

流行に乗り遅れないでいる案山子

二次会の味を電話で知らされる

弘前市 中山 雅城

ジャズを聞くシャガレた声にシビれます

シャッポから春の兆しが見えてくる

コ罗拉に行きたいような今日の月

ラムネ玉音沙汰なしで夏が行く

ロケットのように飛び出すスケーター

弘前市 櫻庭 順風

目の限り昼を欺くネオン街

仲秋も置いてけぼりにされる月

おぞましきどかんと鎮座するカジノ

コーヒーを飲みつつゲームする夫婦

スロットマシンにちよつとが夜明けまで凝らす

弘前市 岡本 花匠

治験薬の話に乗って生かされる

雪解風和解の話持つて来る

頑なさつけて醇風萌す春

無になれぬ心淋しく積る欲

駄目を押し愚夫と愚妻のふたり旅

弘前市 福士 慕情

大寒のガムはバリツと音をたて

そこからは見えぬバナナの深い疵

銀行の監視カメラと合う視線

チャルメラがテープに乗って通り過ぎ

サウナ風呂ポタポタ落ちる砂時計

弘前市 小枝 ふさゑ

古い二人世紀の狭間を生きている

除雪車の音で目ざめる雪の朝

真冬日も衣料売場は春の色

騙された振りして平和四月馬鹿

飽食の胃袋母の味を恋う

弘前市 高橋 岳水

無題の絵ばかりが溜まる北の冬

北国の雪待つところ倦むころ

義理チョコの数を味方と信じたし

地ビールを飲めばその地が好きになる

サバイバルへ隠忍自重くりかえす

十和田市 阿部 進

三味線の音透き通る北の冬

リストラのストレスいやす独り酒

女心好きと言われて揺れ動く

倅せに過ぎて出るのは愚痴ばかり

叶うなら新婚旅行宇宙まで

黒石市 相馬 一花

疑いを抱くと君もきな臭い

湯煙があなたを美女にしてくれる

りんご剥く女はなるほど美しい

冷や飯も慣れると乙な味がする

キャッシュより付けのお客がよくもてる

青森県 西谷 大吾

地吹雪に耳を澄ませば世去れ節

ほかほかと人間になるジャツパ汁

幼子のこぶしのように露のとっ

雪解けの森の息吹に血が滾る

コンビニで献立表を聞く携帯

仙台市 川村 映輝

若い血を入れ人間もリサイクル

物忘れ注意をされて憤慨す

紳士面しても男は狼よ

不孝者嫁とはうまくやっている

天気予報当てにしないで予定組む

大宮市 八田 敏

孫という演歌を孫に歌わせる

孫だとして遠慮はしない蟹の鍋

生活のため生かされてると思う日も

車椅子乗るより押す身有難し

花の世話介護も家事も皆忘れ

東京都 後藤 早智

冬越しの心に映る花便り

おしゃべりも佳境に入る梅見膳

北の旅朝日の富士に見送られ

白濁の涙を分け入る草津の湯

梅一枝懐石膳に春を添え

町田市 竹内 紫鏑

古き良き旅 軍服で母を連れ

子と孫を見送る羽田詠みし亡母

皇紀の碑 陰に上等兵の墓

青春のつづき入れ歯で協和音

深夜ラジオ啓蟄に似てペン探す

八王子市 播本充子

横浜市 山下省子

肩組んで大阪弁が上手くなる
アイディアが次々浮ぶ快復期

丁重な挨拶状を出す保身

パパと行くトイレ男を意識する

教会は百恵と同じとこがい

横浜市 菊地政勝

そこだけに春が来ていた梅の咲く

散髪時間が惜しい春うらら

陽の当る場所に割り込み妻と居る

白髪を茶色に変えた妻の乱

携帯に心のすき間癒される

横浜市 菱田満秋

いたいいたい言うてるうちは大丈夫

明日手術するから時価のうにを食べ

神ほとけよりも頼むは執刀医

口笛も出そう術後のストレッチャー

立春へ土筆探して写される

横浜市 清水潮華

牡丹雪生命をのばす義理を欠く

他人事の雪は景色として見られ

怠けたい散歩を犬に見抜かれる

向い合う座席に眠ることにする

不本意な病憤懣妻に向け

人間が好きで疲れることもある

スカートの丈は長めに春のウツ

セールスを無下に断わり省みる

ジャジャうまの私を我慢するあなた

残された不満のつづき口の中

川崎市 和泉あかり

通学路風に声あり笑いあり

セールスも客もチャイムは同じ数

歯ぎしりをしたまま届く祝い鯛

百円シヨップ主婦を忘れていく時間

ためらってばかりもおれぬ回る寿司

富士宮市 渥美弧秀

富士へ日輪今日の幸せが始まる

新聞を隅々まで読む年金者

思い出の一つに回るフラフープ

リハビリの柳友の瞳に生きる詩

世の汚れかき消す淨い雪積もる

静岡県 蘭田 猿 杵

朝もやを全部吸い込む深呼吸

枯蔓のからす瓜庭師が残す

双方の勘ちがいこそ平和なり

キルト服焚火の埃浴びて来る

ふくらみに紅白の梅見分けたり

愛知県 早川盛夫

定年の電車定刻通りくる

好きだけ食べろくるくる回る寿司

あけすけな人の隣でホツとする

スキー帽とれば白髪も混ざる顔

リフトから北アルプスを恣

富山市 舟渡杏花

ここぞの時捻子巻いてくれたのは他人

対岸の火事へ快速マチャリー

幕おろす時の言葉を練り直す

空咳の合図がずれた運の尽き

なれの果てと言われたくない背広

富山市 酒井輝

コンビニに慣れ被介護を先送る

ふる里で何方ですかにされてくる

用の無い便りがこころ温ませる

眠れずに明けたと言わぬ思い遣り

生と死を分ける注射を持つ孤独

富山市 島ひかる

ミネリアム暗いはなしはもう止そ

古本の一つ一つにある泉

あちこちにもみじの手形おいてゆく

私をじつと見つめるパスポート

亡き父母の写真を胸に空の旅

富山県 増田紗弓

挑戦を受けているのはどっちだろ

覇者の夢 小者の夢も眠る森

ふるさとに夢と遊んだ跡がある

サウンドが聴こえてきそう露のとう

人間へ武装しているサングラス

京都市 都倉求芽

春近し明日は南の風晴れと

春風に包まれたくて丘の道

何事ぞ花見る人の迷彩服

人込みの中で自分の春探す

結論は急がず春を楽しまん

京都市 山海友熙

やがて散る桜を惜しむ桜餅

母の声聞きたくなつた桜餅

まだ桜咲いたと便り来ぬ亡夫

まだ桜咲いております北の国

言い訳は桜が散ってからしよう

京都市 小西未佐子

人の面付けた悪魔の記事を読む

ほうらくもただでは割らぬお寺さん

住む町が繁華街だと夜気づく

庇うてはもらえぬ温い手の女

お花見の序でに来てとわが墓石

亀岡市 井上 森生

葦原が燃える昔が煙るように
香港の孫よ第一声は日本語で
行く道は目の前の母九十五
天地のところが滲みる春の雨
これからを生きる庵に洗い米(寓居完成)

大阪市 井上 白峰

老いてなお背伸びしている影法師
ブライドが重荷となった老いの坂
合理化の波にしきたり逆らえず
輪の中へ温和な仮面つけていく
発言の指名促す咳払い

大阪市 川原 章久

浜茹での蟹の赤さが映える雪
風船が仏の顔で春の空
涙して冷たい姉の頬を撫で
むかつくなあ尻におむつをせぬ鳩め
バーゲンは安い分だけ無駄遣い

大阪市 神夏磯 典子

喧嘩しても一日笑ってもいちにち
くすりにも毒にもなって姑の役
吃水線知らずに妻が翔んでいる
板さんがつかめば鰻逃げ出せぬ
青テント忘れはしない桜咲く

宝くじより確実な福袋

バーゲン満開Y2Kの後遺症
お悔みの言葉誰もが通るみち
土下座する父体面を重んじる
三日見ぬ桜携帯せわしない

大阪市 津守 柳伸

大阪市 川久保 睦子

歎異抄座右にしている父が病む
寒風に耐えた分だけ梅香る
たくらんでいるかも知れぬ小石蹴る
雪の朝想い叶えよ百度石
虹が出るどんな飾りも色あせる

大阪市 鈴木 トヨ子

姑逝って心の奥を知りました
政治家さん出発点を忘れずに
定年後悠悠々自適は夢の夢
熱愛が年齢の差をふつとばす
頂上の仏に会える開眼日

大阪市 河井 庸佑

悔しさを親身に聞いてくれた友
突き放す親の気持ちが見切れず
かたくなに定石守る父の主義
一步退きじつくり様子見る余裕
平凡に過ぎて感謝の日記帳

大阪市 本間 満津子

零歳と会話が出来る愛一途
宗教の総ては愛と聞いているが
満年齢今日なら一つだけ若い
七日の休暇母のもとでと四万キロ
ほんなら又ね外へ送って出ぬ握手

大阪市 榊 本 落 児

寒椿画家の心をよろこばず
全裸ですこれが仏のみ姿か
信州の山はいいなあ描きたいな
沖繩の夕陽はきれいだ優しいな
猫だって情はあるわさじやれてみせ

大阪市 板 東 倫 子

老梅は威厳と風情失わず
厨房の手伝い好きな男の子
何気ない言葉が姑を拗ねさせる
小半日遊んでくれる電子辞書
やっかみも意地わるもある老人会

大阪市 川 端 一 歩

退職の日から手紙の字も丸い
乗客の苦情も書いてある日誌
古寺巡礼ネクタイ選ぶ夜が楽し
福助の目線の位置で酒を飲む
ささやかに妻の還暦祝う夜

大阪市 小林 周 信

雪国に旅の目当ての地酒酌む
懐が大きく笑顔絶やさない
熱唱の江差追分首を振る
野暮用が多くて足腰よく動く
骨箱の軽さよ父は無位無冠

大阪市 辻 川 慶 子

坂道の途中にちようどよい眺め
バレンタイン仏さまにもリボン掛け
腰痛の歩幅小さくなるばかり
風花へ診察券がひとつ増え
臘梅の香に亡母想うご命日

大阪市 清 水 絹 子

息抜きにめがね忘れた松竹座
家事多忙めがねはずせば夕餉時
子と同居素直にきくも風邪の床
表札をローマ字にして子の新居
吸い殻のポイ捨てそれもハイヒール

大阪市 杉 澤 汀

うけて立つ身になってみてわかること
半跏思惟ロダンの人も考える
今日もまた金に成りたく歩の進む
あなたとも他生の縁かこんにちは
羽ばたきの夢シベリヤか水温む

大阪市 清水利武

コーヒーを飲みつつ春の息吹しる

待っていた春へ両手を高く上げ

嬉しきは孫にもらったチョコレート

万代池年々桜の客が増え

青春を日に一食で養われ

大阪市 北 勝 美

舌丸め呑み込み不能パークインソン

栄養剤首から点滴するチューブ

吸痰器音は病室かきまわし

生死の境さまよう妻の手を握り

名を呼べばかすかに口にあるふるえ

大阪市 玉 置 英 子

立話するには今日は寒すぎる

買物は楽しすべすべ冬大根

目分量不確かになり計る塩

立春の光を呼吸寒椿

鬼は外明日は鳩の餌になれ

大阪市 鶴 田 遠 野

友が逝くめつたに降らぬ雪の朝

軽い罪裁く調書の強い語句

記念日は亡妻の指輪と飲むワイン

煮え切らぬ気持見透かす雨しきり

恐い父孫には弱い爺になり

大阪市 田 中 節 子

豆腐屋のリン駆け抜けて春告げる

血管にたんと毒ぬる気前よさ

メカの波に人間の爪伸びてくる

忙中閑衰えてきたやる気力

春嵐鬱のわたしを駆け抜ける

大阪市 津 村 志 華 子

山茶花のもろさは老母の生き様か

母さんの風除けになる子に育ち

妻の愚痴聞けばあしたは雨になる

同居して三猿の教え守ってる

幼くて逝つた子の忌へ絵ろうそく

大阪市 川 内 叭 笑

挨拶も出来ぬ子供に英語塾

義理チョコも貰えぬような年やろか

椰子の葉に誓つた愛は永遠のもの

タレントの噂話が飯の種類

ロケットは数百億を空にまき

大阪市 岡 本 久 峰

棒上の株価横目に小商い

銀行の跡地豪華なパチンコ屋

介護法どこ吹く風とモンペ穿く

古里の休日時計止まってる

しようじょうと風吹き抜ける兵の塚

大阪市 小糸 昭子

ときめきをポケットに入れ持ち歩く

古写真セピアの中で亡父笑う

桜咲きプライドたっぷり持って散る

笑う箱持っているのを忘れてた

きらめきはアイスダンスの伸びる足

堺市 神原 文

十字星待っているから飛び発とう

昨日大寒今朝は大暑のエアポート

らんまんの陽へカラスも子等も羽ばたけり

異国にて妻の寝息を聞いてやり

また会えるさよならなのに振り向かず

堺市 志田 千代

飛び箱の前ですくんだ恋だった

好きという負い目が君を待つ時間

ハイネの詩讀んじた公園がある

公園を息せききって走ってる

舞姫もウォーキングシューズになりました

堺市 柿花 紀美女

中ぐらいの暮しと思う自尊心

関西に住んでめぐみの四季がある

関西に生れはんなり生きている

カタカナ語のブームに老いは惑わされ

きらめいた星のひとつは気丈な亡母

堺市 黒田 真砂

上達の友の書を見る展覧会

春を待つ心に寒波吹き荒れる

亡母眠る墓もうつすり雪化粧

知らなんだ夫宴会の隠し芸

日の丸をやっぱり立てる古里の母

堺市 見本 ちや子

春風に乗っておしやれをしてる花

心まで見えたらしいなこのメガネ

おみやげは無事でいいのよお父さん

神様の絵にまかせよう明日の僕

胸に炎抱いて私の道を行く

堺市 山本 半銭

逃げ足の疾い月日を愛おしむ

残された者の寒さよ伽羅を炷く

雑音をしりぞけ二人だけの天

放つとかれそうで忘れていられない

鬼を追う孫の声から春を待つ

高石市 浅野 房子

痛みから解かれ氷雨と逝く柩(透太様へ)

華やかに賞を両手の舞い納め(富湖様へ)

亡き姉に申し訳なく生きている

借金は無いがこの世に借りがある

妻子ある人に寄り添う俄雨

和泉市 岡井 やすお

入学式卒業出来ぬだろう子も

歓迎会済めば一転二等卒

フリーター彼氏彼女も大学出

四月から休め休めとみどりの日

大阪の春締め括る通り抜け

和泉市 西岡 洛 醉

古希を過ぎ今朝も戦へ乗る初発

鱗雲串刺しにしてジェット飛ぶ

二千年歳男と言う人生譜

一点を見つめ人形悪びれず

年輪に何時かは温い陽も射そう

泉佐野市 山本 蛙 城

地震速報次はそちらと言うような

テポドン嗤う隣のロケットこけるたび

紅梅白梅長幼序で咲く良い香り

最悪の仕付け何でも世界一

尻尾振る犬居るかぎり世は長閑

岸和田市 高須賀 金 太

午前五時四十六分目が覚めた(二月十七日)

また会おう約した旧友は棺の中

肩書きがいつばい旧友の葬儀

まぐれとは言わず努力と言うてんか

恋なんかとても似合わん顔やけど

岸和田市 原 さよ子

商店街あの手この手で景気づけ

秒針までは用のないわがくらし

長電話孫も恋しているらしい

よく遊ぶご褒美神がくれた風邪

長びく風邪脳みそまでが鈍り出す

岸和田市 岩佐 ダン吉

朝焼けにふつとでつかい夢を描く

負けつぶり格の違いを知らされる

掃き捨てた論に少うし光るもの

被告席さあどう出ますノックさん

どんくさい男が風に舞っている

岸和田市 井齋 一 齋

底無しの袋に詰める欲の皮

腹の虫治めきれないはしご酒

杖ついて村の噂を嗅ぎ回る

机上プラン無理な理屈をこねる人

美人より笑顔の多い人が好き

岸和田市 井伊 東 吉

今年風邪凡才順に引いていく

風邪治り次は花粉の大マスク

親ゆずり頑固さきつちり継いでます

老人のぜんざい会に酒も出る

カレンダー行楽予定が埋まり出す

岸和田市 原 苑子

ストレスをしゃべり飛ばして女連れ
百円シヨップ安い安いと二千円
裕福になつて家族はみんな留守
つましくて景気不景気変りなし
平凡な日々平凡の良さ知らず

八尾市 内海 幸生

賞め言葉今日は素直に戴こう
悪気などまるで無い孫よく遊ぶ
ためらつて盛りを過ぎた花を摘む
ゆずられた席有難いことながら
馴染みなき店のチラシが嵩高い

八尾市 高橋 夕花

封書ことごとくブルーなり寒の底
三寒四温ネコもわたしも愚痴ばかり
いたわりの冬の森から出られない
春の予感また煩惱が渦を巻く
いくたびのさくらよ私老いにけり

八尾市 宮崎 シマ子

げに怖いものだ年とつた妻は
もどり寒夫のパジャマ洗つてる
花芽でも出すぎは出すぎ叩かれる
寒い日には子供も孫も来ていらん
湯ドウフのトウフが踊る仲なおり

八尾市 宮西 弥生

おたふくの面とくらししてまるくいる
他人は他人 自分は自分ウォーキング
もう一度ときめく日待つ脚線美
仏にも鬼にもなつた豆の数
素うどんで今日もすませた風邪の昼

八尾市 高杉 千歩

ミネラルウォーター黙っていたら分らない
万歳三唱好きなお国の平和ほけ
夫置いて出かける旅はもう出来ぬ
車預けて銭湯へ寄る春日和
怪人二十面相パソコンに現れず

八尾市 吉村 一風

駄菓子やの空気のうまい孫の供
孫を呼ぶ電話は積る雪模様
来る度に不孝を詫びて墓洗う
わらべうた唄うと亡母の音がする
菜の花がひと足先に春をくれ

八尾市 生嶋 ますみ

携帯のルーズソックスよう笑う
行くところ妻の小言がついてくる
うわさ話しているらしい鳩の群
少しづつ角度をかえてやわらぐ陽
ポスターの笑顔当選するつもり

八尾市 村上剛治

梅が咲いたと吊り広告に誘われる

だんだんと妻の歩幅が広くなる

結局は息子も渡る父の橋

肩書と一緒にぱつと消えた虹

運なんか当てにしないで汗流す

八尾市 村上ミツ子

美人薄命その上やさしすぎました(川上富湖さん逝去 2句)

知り合えてともうれしかったのに

雪が降りわたしの心かきまわす

見て見ぬふりに気付かぬふりの顔がある

日脚が伸びて公園に子等の声

八尾市 長谷川春蘭

孤老黙し何考えるや日向ぼこ

今日生きる老いの願いや麗かに

紅梅や巫女より受くる長寿神酒

灯を消せば雛はやさしき闇に佇ち

合格を先ず母さんに知らす孝

八尾市 神原まさと

冬眠のまま干涸らびている亀よ

一月の訃報は心凍らせる

爺ちゃんにバイバイばかりしてくれる

信念がゆらぎときどき深呼吸

日記にも書けぬ本音を持っている

松原市 玉置重人

告別の遺影が若い男まえ

ぜんざいが甘い律儀な小正月

リストラに会うとも知らず乗ったバス

傘寿まだラストスパート早すぎる

足腰はおぼつかないが世帯主

松原市 小池しげお

二階から和英辞典を借りたまま

午後からは腹の立つ日で日が暮れず

始末書の原稿書いている冬日

真っ直ぐな男で匙が曲がらない

八行からア行で笑う年になる

藤井寺市 中島志洋

お彼岸の賑わい亀も寝てられず

不景気な話はよそう春うらら

支持率に民の怒りが込められる

道楽者の末路は彼がいい見本

困ってるようには見えぬ恵比須顔

藤井寺市 高田美代子

グビグビグビと一度は飲んでみたい酒

苦労かも知れぬがもう一人産もう

お茶室の湯気に背筋がのびてくる

ゆっくりと歩いて春は花まみれ

この先を松の浮き根にふと思う

人間に過失があつた温暖化

藤井寺市 太田 扶美代

日進月歩あつという間のひとりぼち

告白はきちんと終えた銀世界

スーパで春の下見をして帰る

自分史の中ほどで咲くバラの花

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

古い箱明るい場所に出たがらぬ

首かしげ鸚鵡媚びてるふうに見え

赤い実の色を見分けた小鳥の眼

お彼岸に元もと無口亡父と亡母

頰杖は空想ばかり冴えてくる

藤井寺市 楠 昭子

毒少し飲んで大人になりました

汚職など知らず生涯土に生き

小さなミスばかり見つけて姑達者

つまずいて石からもらう良いヒント

食卓鈴思い出いっぱい大家族

羽曳野市 吉川 寿美

上弦の月が無欲になれと言う

冬はもう終りだ弱音吐くまいぞ

春愁や見知らぬ街で献血す

一粒万倍曆の中にツキがある

豊かさが人を鍛えること忘れ

デュエットの美声句会でもう聞けぬ(富岡さんを偲んで)

冬將軍ころころころと気まぐれな

雪まつり飛び立ちそうな尾白鷺

お返し無しの隣組からお赤飯

夢半分叶えばこの世上の上

羽曳野市 西村 りつえ

枯野にも陽差しは春の匂いする

山桜景氣かいふくちらり見え

このチャンス逃がせばみんな水の泡

さざ波からうねりとなつて来た噂

スマートにさらりと躲す悪巧み

羽曳野市 酒井 一壺

おはようと私が先に声をかけ

挨拶の仕方でわかるお人柄

お見事に声まで変えてサングラス

古本屋若い主人で客変わる

色メガネあなたは何を見るつもり

羽曳野市 三好 専平

できるだけ偉い人には近づかず

欲捨てよ欲捨てるなとかましい

わたしにも欲しいと思う象の鼻

ハイという返事がよいとほめてやり

枯れ草に馴染みのできた散歩道

羽曳野市 安芸田 泰子

故里の夢見ているか浮寝鳥
号令を掛けた如くに鳥が立つ
お互いに笑顔で腹の探り合い
目を逸らし打つ相槌に実がない
真冬日に労り忘れ鉢枯らす

富田林市 藤田 泰子

人生のおまけのように寒ぼたん
誕生日貰うた薔がみな開く
御命日貴女の句集読んでいる
三月の風を集める桃の花
ほうれん草ポパイが好きで私です

富田林市 片岡 智恵子

癒えるなら万羽厭わぬ千羽鶴
水着商戦冬のさ中の裏話
千客万来憧れの人ただひとり
ポランティア楽しい出会いあるように
餅三日体重元に戻らない

富田林市 松本 今日子

神仏少し恨んで通夜の席
来年を笑う鬼だけ残しとこ
ラーメンの湯気の向こうは別天地
日本海飛行機頑固に雲の上
これからのシナリオ書かぬことにする

河内長野市 加島 由一

必勝の鉢巻き塾は関ヶ原
飽食の町公園の青テント
冬服の中で眠っていた手紙
内定の報せキューンとうまい酒
退職をしたいが妻に言い出せぬ

河内長野市 井上 喜醉

飢餓に耐え生きて来ました戦中派
人物が不在で迷う浮動票
朝刊で世界を眺めパン齧る
病む友へうまい言葉が見つからず
無造作な欠伸が妻は気に入らず

東大阪市 指宿 千枝子

ポケモンの飛行キで来たおばあちゃん
ふるさととは遠くて近し伊丹発
久びさに床を並べる三姉妹
ペン握るのも忘れ果て老ゆる父
原点に戻って迷い吹っ切れる

東大阪市 森下 愛論

飲みくらべ僕はゴールド免許証
熱爛のダブルで冬の使者迎え
旬の味無くとも気楽に老いの酒
浮雲とまた一年を歩こうと
煩惱をたたんで背筋ピンと張り

東大阪市 安永春

山茶花のいっぱい零れた留守の家

先達の姉は頼れるひとだった

泣かれると弱い夫で叱られる

逃げ足に肥えた警官追いつけず

渡く人のねばりが生きる質の良さ

東大阪市 北村賢子

影だけがトップの涙知っている

子育てにわれを忘れた束ね髪

うしろ髪ひかれる郷の老父ひとり

ゼロ一つ見落していたプレゼント

悲しみへ追いうちかける雪が舞う

茨木市 藤井正雄

野鳥会去年の子かと聞く巢箱

リングにもリング箱にも今昔

お隣の庭から届くふかし芋

もう少し待てば良かった結果論

リング剥く器用に見える左利き

茨木市 堀良江

凄んでる黒いめがねの小さな目

煎じぐすり香りの中の亡母の顔

起されて夢の行方が気にかかる

雪の日は窓辺の椅子で読書する

リズムカル机たたいている電話

高槻市 傍島克治

春風に浮かれ戻らぬブーメラン

フルコースこれまでですとメロン出る

日に二本バス停近しと分譲地

戦わず口下手の負け口喧嘩

春飾るデパート外は雪が舞い

高槻市 井上照子

卒業と入学人生旅の駅

ネクタイのゆがみ熱弁聞きほれる

百七歳ご苦労さまとありがとう

弱音吐く私へ主治医喝くれる

寂しげな恩師の賀状抱きしめる

枚方市 栗林光夫

スピードの女王に恋す七ならべ

からまりそう群れ白鳥の首と首

万国旗六十億が手をつなぎ

きのう葬あす葬喪服掛けたまま

いつ死んでもいいと思える歳はない

枚方市 宮川珠笑

道問うておいて逆さま走ってる

長寿逝くホーム職員だけ泣いて

物産展撒き餌のように試食させ

連山を背景に車窓の空き缶

漢方と点滴祈禱で持ち直し

枚方市 前 たもつ

一年生の孫を励ます二〇〇〇年

介護保険期待している人もいる

記念写真いつも首だけ出す男

真剣にティッシュを配る会社社員

汚れすぎ水道水で洗えない

枚方市 海老池 洋

妻のいて子のいて孫がいる至福

苦労した頃思い出す思いやり

人前は強気に見せていた吐息

ログン像に似てるがしょおもない思案

記者会見頭取メモを読んだだけ

枚方市 寺川 弘 一

みな降りるから終着駅はよく分る

シルバースーツ座る時には老いの顔

宇多田ヒカルを聞いて何にも感じない

俺とお前に似てるクローンはつまらない

ターミナル群れてる人は幸せそう

枚方市 森 本 節 子

独り言ではない犬と話してる

目を閉じて反芻してる名場面

ストーカーハッカーこわい世代なり

川べりの群れとぶ鳥は旅の鳥

アルバムを繰れば必ず傍に姉(栗谷春子姉逝く)

守口市 結城 君子

怖れ半分期待半分街の雪

本鯛の顔で売れてる養殖魚

訃報つぎつぎ人間は死ぬのです

カットして柩の姉にかくも似る

影法師あなたも泣いてくれるのね

寝屋川市 高田 博 泉

現役を離れて帽子かぶり出す

手に職をもった男は慌てない

茶をすする音でゆっくり時が過ぎ

ネクタイを締めると機敏な父になる

乾杯が済んだら帰り支度する

寝屋川市 平松 かすみ

相撲吟初めて勝ったミレニアム(寝屋川新年会)

花束を分けて上げますお仏壇

主婦ですネ花束値踏みしたくなり

立合いへ夫と仲良しですカイロ

ワンちゃんを抱いて不在投票所

寝屋川市 籠 島 恵 子

マンネリもいかしあわせなんだから

各駅停車に乗りかえていい話

思い出ひとつこむらがえりをおこしてる

開き直りホップ ステップ ジャンプして

玉虫色をまとう尻尾を出したまま

寝屋川市 江口 度

気の長い話が預金通帳に

報道陣少しリストラしてみたら

リストラの元祖はきつとワンマンカー

毒舌を聞いてる鼻毛抜きながら

灯油買う間隔延びる梅日より

寝屋川市 岸野 あやめ

孫栗立つめでたい春がさびしくて

親友になりたい手相くらべ合い

爺様が競馬新聞読む電車

花の散るように逝かれた惜しい人

プライドが承知せぬ身の置きどころ

寝屋川市 堀江 光子

坂のわが原風景の紅椿

こまやかに街の涯まで見える晴

病院の坂道に知る四季の風

それにしても瓦礫の空の広過ぎる

団交の一人一人にプライベート

寝屋川市 富山 ルイ子

心配性ついでに癌の検査する

小川の水春を映してあたたかい

千客万来古里っていいな

ペーソスの漂う人で放つとけず

人に育てられて楽しい毎日

寝屋川市 森 茜

ビル街の向こうに道が光っている

あいまいな甘い香りもラ・フランス

結論の出ない話にしてオホホ

水道がぼたぼた日脚伸びてくる

二ヶ月の庭 水仙の風のなか

寝屋川市 坂上 高栄

神苑の朝を掃いてる緋の袴

雪花に白梅一層冴えて春

知事選を寄り合い世帯に任せられぬ

特種を傍聴法にさらわれる

手ぶらでは三途の川も渡れませぬ

寝屋川市 太田 とし子

質素儉約すれば国が成り立たぬ

与党と野党炬燵でみかん剥きながら

アルバムにあんなことありこんなこと

うちの鬼真顔で豆まく鬼は外

合格通知あたり前だよ孫だもの

寝屋川市 北岡 波留吉

大願成就祈り青岸渡寺に立つ

接待のお茶に染みてる信仰心

亡妻の写真懐に入れ遍路笠

亡き戦友の冥福祈る遍路笠

宿坊が一際映える満願日

吹田市 山本 希久子

二階にいるのはいたずらの天才
底冷えの街無駄遣いでもしよう
即断即決デビットカード迷わない
梅の花一期一会の手をかざし
結び目ははらりと解けて柩の闇

吹田市 石原 靖巳

金棒が重たくなった古希の鬼
順風に乗るとファイトが出てこない
あの人が囁むと話がもつれ出す
自自公の仲よきことも恐ろしい
太閤も目をパチクリの女性知事

吹田市 瀬戸 まさよ

つらぬいてきたものがありわが人生
思い出は質素な時代暖かし
冬の雨熱いコーヒー人恋し
映画館独りで二回観ています
肉食獣雄悠然と立派なり

吹田市 野下之男

知覧には涙と花が良く似合い
大空を恋も知らない兵が翔け
あの声が後ろ髪引くひばり館(嵐山にて)
大人しい隼人もいと妻の声
王将の歌の文句に励まされ

吹田市 大谷 篤子

明日のドア叩く坂道登り切り
点滴でゆっくり歩くわが命
逢いたいと言う人を待つ冬の駅
逢えたのに手の届かない夢の中
底冷えに女の情が深くなる

豊中市 吉田 あずき

豆つぶて鬼はわが身の内にあり
花嫁のはじらい程の雪の景
海へ降る雪もはかない片思い
チョコレート氾濫 男裁かれる
ご名算言えず御破算にも出来ず

豊中市 湯浅 馬洗

合格に梅の蕾も彩を見せ
お孫さんかと聞かれて背筋伸ばすパパ
振り袖に裸もまじる証書授与(京大卒業式)
千年紀生き抜くパワー掴み取れ
ネットより口コミ頼る梅見客

豊中市 滝北 博史

新世紀の七草がゆを妻試作
Y2K成人の日がまず変わる
ギャルみこしの娘があこがれの福娘
初天神梅が一輪うちの庭
ママの背へパパが小声で鬼は外

池田市 栗田久子

ハッピーマンデー日程表がやや狂う

振り向けば私にすぎる影がある

まだ寒い綿毛をたたむネコヤナギ

控え目に佗助そつと咲く気配

花だより抹茶一服ほしくなる

箕面市 唐住実

蓋のある箱は女の部屋に置く

休日をもとめて町はより寂れ

句碑ほどに水現れぬ箕面滝

カップルのいくつか残り滝暮れる

冬の酒行く末首をかしげさせ

箕面市 椎江清芳

院号を貰うと仏重くなる

髭剃った男は攻めの顔になる

父と子の愛が絵になる肩車

二校共受かり財布に選ばせる

ホステスのお願いの指膝にくる

箕面市 岩津ようじ

温暖化嘘ちやうやろかこの寒さ

能なしの上司にいじめられたこと

ふがない反骨腹を立てただけ

二〇〇〇年ことなく過ぎてあっけなし

肺癌が医学の無力見せつける

箕面市 出口セツ子

人も世も病んで命が軽すぎる

オートロックドアが絆も拒絶する

温かい笑顔を添えて梅届く

想い出の数だけ少なくなる未来

花便り靴があちこち向きたがり

大阪府 靱山隆盛

本離れ駈々堂が幕を引く

見極めのつかない顔に頭下げ

冬の底二月堂から春がくる

マラソンのテレビ二時間飽きず追う

足だけとちやうちやう羽根のあるお金

大阪府 米澤俣子

へそくりという特別口座持っている

あのひとより若いつもりで生きている

ああ無情過信していた記憶力

茜雲地には群れたつフラミンゴ

神の使者か風はいのちの種運ぶ

奈良市 天正千梢

負けないと分らぬ事に気づかされ

ぶどう棚今日木枯しのいたいたし

底見えし池のほとりのもの哀し

鹿せんべい飽きたか鹿のよりつかず

ふたかみの山の麓や友の里

奈良市 米田恭昌

ミレニアム祝う宴の初春やよし

小商人小銭をさがす恵美須さん

豆礫口開けて待つ鬼もいる

人人人悲しいコントのある酒場

美人で利口老父母にやさしくそつがない

大和高田市 岸本豊平次

煮こごりを温いご飯で食べた頃

船だまを頬に隠して笑えない

惚けかけか腹のへるのが早くなり

大阪に来て奈良よりも多い雪

春立ちて陽を山の端に見て出勤

大和郡山市 坊農柳弘

花まつり釈迦のご加護に感謝する

鮮やかにタカラジェンヌの始業式

手酌酒とろりとろりと春の月

剩え騙され上手な四月馬鹿

国後へ行くこう流水見たいから

香芝市 大内朝子

野山越え笑いころげて春がくる

自分史はこれで幕かと風邪の熱

ヘルニヤと気力だけでは闘えぬ

ぼんかんが届きふる里匂い立つ

風雪を耐えた笑顔で花は咲く

和歌山市 福本英子

きんさんの半分なぜに越せないの

弔吟の山をも一度見において

寄生木の主張木枯らし聞きもらす

もう楽におなりと鈴を三度振る

ピーポーへ飛び出すみんな無用心

和歌山市 福井桂香

淡島や雛の骸を山積みに(淡島神社 2句)

佗助も利休にもあう椿園

幸せに髪をなびかせ流水岬

連翹に手を差しのべられてる

テレビから女王蜂が吠えている

和歌山市 木本朱夏

風花や見つめあわねば遠きひと

平熱を超えてほころぶ寒桜

レモン一ヶころがす春を待つ部屋に

鱈の身のほろりほぐれて父恋し

簡単に人は忘れる男の名

和歌山市 桜井千秀

とんちんかん積もり積もれば痴呆症

物分かり良い振り長続きしない

都合良い事実素朴に言い触らす

トイレの陰で涙拭いてた亡母を恋う

ブランド品着こなすためのダイエット

和歌山市 細川稚代

一通の手紙を前に小半日
蓋をしたゴシップひとり歩きする
持ち歩く電話で恐いドラマ組む
女三人喋り疲れて眠る宿
留守電のあなたの声はずんでる

和歌山市 池永正甫

大波も小波も島じゃ子守唄
富士山はいわばお国の広告塔
海が好き喜怒哀楽はつきり
いつまでもしがみついてる入門書
上弦の月よお休み繩のれん

和歌山市 玉置当代

思い出も永久の別れや落ち椿(樟川上富湖さん 3句)
もういない相槌打つてくれるひと
後ろ髪引かれただろう若すぎる
その時は何も言わずに聞いておく
腰痛を支えてくれる力瘤

和歌山市 古久保和子

風花に耳を削がれる大通り
全力疾走ひとりで聞いた風の笛
日本が逆立ちしそう日本語
インフルエンザ居座っている二階
夕やけこやけ少し緩めに靴のひも

和歌山市 楠見章子

ミレニアムベビータッシユが来るそうな
雨上がりの太陽つくし湧いてくる
マラソン中継リタイアしたくなる炬燵
アカペラにもらう野ばらのハーモニ
食べる時輝いてると言う夫

和歌山市 青枝鉄治

過労死のポストが空いている不況
偏差値へ親の茶断ちは追いつけず
洗うほど汚れの目立つ政治劇
大臣になれば靖国観かわる
エイプリルフールで吐いたのは本音

和歌山市 山口三千子

冷静を保つ眼鏡を拭いている
高齢へ押されて踏んだ自動ドア
身を守る為に日和見主義になる
成るように成るさ明日の米を研ぐ
合格をしたのか窓の灯は消える

和歌山市 田中みね

順風満帆決して驕る事なけれ
的を得ぬ話へ短気持て余す
兄嫁から結婚記念日おめでと
柳界のスターが消えた二千年(川上富湖さんを偲んで 2句)
物言わぬお顔へ涙ぼとり落つ

海南市 三宅保州
満ちておごらず欠けてくじけぬ月冴える
もう少しゆっくり生きてみませんか

余生でもゴールをめざすロスタイム
都会の人に田舎と言われたくはない
のど飴がいちばん効くと不治の友

和歌山県 中後清史

掘り下げるほどに怒りの渦を巻く
皆までは言わずなボロが顔を出す

深呼吸明日へ歩幅を調える

沈黙考する時だけはよい孤独

セクハラをビデオで講義する企業

和歌山県 鈴木政子

背丈だけ「ひばり」と同じ私です

湯豆腐を崩さぬ箸は律義者

顔黒に白唇は医者泣かせ

日の丸と国旗の違い聞く子供

日米の施政演説目線の差

神戸市 中村ゆきを

日本の姿にもどり雪積もる

粉雪へ首すくめつつ逢いに行く

少年の行く手見ており道祖神

人の目の優しさに逢う水の底

風匂う母御背負うてやれなんだ

神戸市 小林一夫
幾百の蛸も吊して海の町
とむらいの家過ぎてより老母のこと
鬼の面かぶりて幼児整列す

恋遠く書架にたまりし埃かな
人妻へ夜書く手紙おぼろ月

神戸市 山口美穂

留守電はぎこちない声置いている
例えばの話に熱が入ってる

備忘録探しています昨日から

いい訳を四分六ぐらいに聞いている

いいウンチよかつたねと犬に言う

神戸市 木村貴代子

忙しい朝も幸せ職あれば

熱の日のりんごみかんは搾り立て

沈黙に堪えかねみかんむき始め

ヤング向け服の売場で目が眩む

バーゲンの安さに縫った手を感じる

芦屋市 黒田能子

春風にホップステップジャンプなり

びっくり箱では驚かぬお母さん

一番に君が好きなお母さん

首ひとつ動かしたただけ事が済む

背もたれの椅子と信じて座ってる

尼崎市 春城年代

わたくしは二十世紀に生きたんだ

ふんいきに少し差がある食の街

追悼を書いて書かれてみな何処へ

今はただ頭の中で咲く二月

煮詰ったおもいに軽いコラムあり

尼崎市 春城 武庫坊

妻の丹精ベチュニア年を越して咲き

梅開き花の空気がややソフト

化粧して椿無言で地に還る

振子時計に老いの余生を刻まれる

孫結婚曾孫誕生福二千年

尼崎市 長浜澄子

着メロは好きな娘らしい声弾む

紅殻格子に音なく積もる京の雪

某月某日神さまに虚偽申告す

黙認は弱い白旗ではないぞ

散り急ぐ牡丹へ贈るレクイエム

尼崎市 的場 十四郎

若い気で居ても跳べない水たまり

目の高さ合わせ労る車椅子

いつの世も母のふところ温かい

春の彩重ね自画像描き上げる

タレントの離婚話のるテレビ

伊丹市 山崎 君子

ゆっくりと生きよう外は春の光

強くなれ友亡母のよう姉のよう

カタクリの花咲いてるよ山だより

箱いっぱい不揃いミカン里の味

独身寮三連休に厭きたのか

伊丹市 小熊 江美

ソロパンをはじきひと口乗せられる

出発が遅れ万事が不利となる

いよいよか記憶喪失それも良し

ふくよかな盆梅匂い目に沁みる

人は人わたしは生き方変えません

西宮市 林 はつ絵

老妹が叱ってくれて元気出す

役に立つことがまだあり起き上がる

謙遜の言葉に託す願いごと

例外と片づけなくて聞いている

霧の中どこではぐれた麒麟の子

西宮市 長谷川 淳

篝火が消えて神秘的な闇となる

移り香を貰うて亭主は午前様

病なく幸か不幸か銭もなく

誰でもいい誘って欲しい嬉しい夜

今もなお夢に出る人歳とらず

西宮市 西口 いわゑ

鏡には世辞も内緒も通じない

熱燭が心得ました言う如く

輝いて青いみかんが旅立ちぬ

震災記念日生きて乾杯しています

寒いので花と話をしています

西宮市 奥田 みつ子

胡蝶蘭はなの命の短すぎ(樟川上富湖さん)

閉ざされた胸も知らずに梅開く

噂ひとつ心揺らして通りすぎ

ウフフと笑うアハハと笑う四月馬鹿

昨日は過去のうは過去と風が鳴る

西宮市 門谷 たず子

待合わす影とてなくて春あらし(透太さんを偲んで 3句)

居酒屋で柳論熱き君なりし

第三の句集は未完風寒し

合い舞の足かばいあい余生とや

おおらかに生きたし雲の彼方まで

西宮市 菊池 トミエ

誕生日幸せ願う朝の虹

乱雑な机私の城である

拵着ておでんしっかりおふくろの味

たこ焼屋しっかり者の姉が居る

廃校の跡に老人ホーム建つ

西宮市 秋元 てる

塀越しに夏柑実る萩城下

しあわせを押し売りしたくなる病氣

柚子風呂へ一つ増えたよ手術痕

自然分娩選んだ孫は二十二歳

孫の出来る息子の呼名考える

西宮市 山本 義子

源氏読む歳にはとしの味がする

見ないでね大の字に寝るひとりもの

あの世にも鍋焼きうどんあるやろか

天気予報聞き一日をしめくくる

これよりは古希の段あいつとめます

西宮市 井上 松煙

箱庭の番の鶴もお正月

新世紀酒の銘柄かえて呑み

成りゆきで首たてにふる意気地なし

北風に芽吹いて春を呼んでいる

粕汁のぐつぐつ冬を匂ってる

西宮市 緒方 美津子

結婚に漕ぎつけました春の雨

新聞は読んではいない待ち合せ

雪月花みな酒にする君だけど

定年に先ず娘のくれし春帽子

首まきをとればかすかに春の風

宝塚市 嵯峨根 保子

天才が自主トレしたよ寝ておれぬ

舌下錠どんでん返しありそうて

児をひとり手なすけるのに骨が折れ

義理チヨコであろうと渡す人がいる

寝ごとにも世話にならんと言うまいぞ

加古川市 吐田 公一

亡くなつていいとこばかり見える父

窓際の机は四季の陽が当り

地球儀の国境線が入り乱れ

考えが甘くなかつた茶髪の子

やどかりの大きく育つやど探し

相生市 中塚 礎石

古里がある幸せの墓参り

大の字にテレビに言われ妻昼寝

金でけり心の痛み癒されぬ

大手二杜龍虎相打つ名勝負

飽食を烏猫 犬あざ笑う

姫路市 古川 奮水

不器用が努力へ評価くれた朝

合格は大きな皿に海老を盛る

マネキンの彩もすつかりミレニアム

大袈裟に咳してくず湯つくらせる

夕陽見て童謡歌う母居ない

鳥取市 岸 本宏章

贅沢な朝だ野鳥に起こされる

脈ありと見たのかティッシュまたくれる

相手から見ればライバルにもなれず

一本の白髪抜くほど若くない

老人をいたわる筈の介護法

鳥取市 岸 本孝子

たとう紙に孫の成人包みこむ

のびのびとした一日が物足らず

イメージを変えれば噂すぐ流れ

太陽をいっぱい浴びた街が好き

宝石をいっぱい持ってまだ不足

鳥取市 倉 益一 瑤

立春だくすんでなんかいられない

傘一本人はこんなにくいのか

尖った口でまるい会話はできません

泣き声の武器赤ちゃんには勝てぬ

子育ては命のまつりかも知れぬ

鳥取市 植田 一京

過疎の実家は車五台も持っている

かあさんの度胸に一目置いている

そうそうと相槌打つが聴いてない

のど飴をなめてお経を上げている

恋とは違う逢えば元気が出るのです

鳥取市 坂田 和歌子

あつと世界中を振り向かせた骨
足並みが揃わぬ葬の列にいる
ハンカチの染みは私のことらしい
大きなラッパの奥に居るわたくし
飽きっぽい私をリフォームしている

鳥取市 石上 悦子

自己主張沿線の灯もエールくれ
風邪の娘を気づかう父はオベ直後
夜爪を切るのはやめる父のため
ハルピンの今は昔は帰国の孫と
入院の父だが無事に古稀迎え

鳥取市 春木 圭一郎

花言葉知らないままに花贈る
花見酒まだ飲み足らず夜の街
花暦めぐりデートの日を決める
花時計二人の素顔知っている
花一つ得るため何もかも捨てる

鳥取市 上田 宣子

縄がまた玩具になってくれている
耳奥に倍倍倍の火種あり
神経にピリピリ響きだす手帳
がちがちの思考回路に油さす
山里は今日も大きな玩具箱

鳥取市 徳田 ひろこ

さくらさくら爪も鍵盤から踊る
鈴の音が日ごとに澄んでゆく少女
はらわたを見せる遊びを覚えたり
他人ごとを心配できるのも福だ
終の駅までは見放せない荷もつ

鳥取市 富山 檳榔樹

反骨の彩り映す茶の暖簾
二千年パイオで造る夢の糸
旬の味ときめきを持つ桜ん坊
背伸びした分だけ余生遊ばせる
喜寿迎え柳に風の舵を取る

鳥取市 福田 登美

春だから歳を忘れた色を着る
落ちるだけ落ちた谷間で虹を待つ
大根に愛をゆつくり沁み込ます
銀行に不貞でも景気戻らない
若者は傷の跡など残さない

鳥取市 近藤 佳子

たのしいね充分生きてまだ余生
美貌と才 恵まれたひと子が出来ぬ
百円市ストレス全部捨ててくる
叱られて泣いた記憶も母恋し
カラフルに夢を見てます春がくる

鳥取市 中村金祥

同人へ脳に一本皺もらう

足あととは見果てぬ夢を追い続け

ワニの背に乗った気分のリストラダ

ジグザグに割れたハートを縫い合わす

神様もぐったりしてるミレニアム

倉吉市 淡路ゆり子

一抜け二抜け自立した子へ祈る無事

目覚めれば老母の喜ぶ髪を梳く

雪のため微かに家の軋む音

優しさを大切にする木の葉髪

霊柩車悲しみひとしおぼたん雪

倉吉市 山中康子

通学路雪の重さもまなばされ

深呼吸鬼の住処がわからない

大袈裟にしては値打ちを下けている

黙しても悲喜あいあいの同い年

心地よい明日を夢みる羽根ぶとん

倉吉市 野口節子

コーヒー館でお開きになるおしゃべり会

染め抜きの藍には藍の自負がある

嵐舞う今が私の正念場

蓄散る神の誤算かいたずらか

すらすらと喋れるうちは御安泰

倉吉市 山本玲子

彩雲に染まるさざ波春うらら

日溜りにのはほん群れる蛙の子

病むことの話に尽きるおない年

喜怒哀楽おもてにだして忙しい

秘伝の出しで客足攫うラーメン屋

倉吉市 米田幸子

ギブアップしない鬼にも蛇にもなる

唇の味は未熟なさくらんぼ

かすがいになった子供も皆巣立つ

頂いた愛を時々陽に当てる

冬になりや夏はいいねと夏を恋う

倉吉市 松本よしえ

大切な形見のペンは男物

文箱から男のペンを出して書く

ネクタイもカフスボタンも亡夫のもの

片方のカフスボタンが見付からぬ

風邪病みに露を炊いたと友の声

倉吉市 最上和枝

殊更に手帳の朱書が重たい日

嫁った娘のピアノが手持ち不沙汰顔

床の間に省略という花一基

口紅の彩控え目に念珠を持つ

健忘症脳がゆっくり痩せてきた

米子市 政岡 日枝子

いつまでも母なり母の服着せる
おこんぶにお豆備蓄を食べている
貸し方のページばかりが重くなる
何事もなかった今日にホッとす
彩のない食事で生かされているよ

米子市 鷺見 正子

花の下紺が凜凜しい顔をする
野球拳でもして遊ぼうかお父ちゃん
飲み放題よりも二人で缶ビール
だんだんと透明になる古い家
心機一転 茶髪になって来たホープ

米子市 澤田 千春

好きな大地と心を割って話し合う
この夕茜見せておきたい足の裏
涙壺振り向かないで前進だ
園児等と歌い踊った春よ来い
紺の背広で亡夫も豆まく向う岸

米子市 林 瑞枝

仏壇で祭り囃子を聞く小菊
婿殿の髭に夕陽が立ち止まる
春うらら花芽は里へお嫁入り
光っている餓鬼大将の頬の泥
フオークダンス友の温い手冷たい手

米子市 田中 亜弥

二〇〇〇年の朝はとつても晴れていた
太陽に合わせたような服を着る
鉛筆に反抗したら折れちゃった
晴れた日に限って花はさみしそう
縄先を少しゆるめて子に渡す

米子市 白根 ふみ

眠りから覚め如月の兆しする
枝えだに音符のように止まるもの
踏みしめて確かめてゆく傷その後
雪をおく椿の紅が引きしまる
鳥の死角で万両が生きかえる

米子市 木村 春枝

春の夜の夢にたゆとう過去未来
モナリザの魅力たずねる美術館
写真集姉の俳彷彿と
物干しにふだんの顔が晒されて
ぐうちよきばあ無心になってクラス会

米子市 青戸 田鶴

私を晒してくれる雪の白
一偶を清らかにする水仙花
厳冬も子の思いも耐えきれぬ
横道にそれでも生きていて欲しい
一度だけ参加をしたい菜の花忌

思いつつてファッション変える花だより
吉報だ厨の母は日本晴れ
晴れがましい空気が似合わなくなった
風向きが悪くて咳が止まらない
群像の中で炎の像さがす

米子市 光井玲子
米子市 中井ゆき

今日も雪少し疲れて土を恋う
横町においしいそば屋あったはず
横並び無理な背のびがつづかない
姦しい連れからそつとあとずさり
クラス会風向き変えたのは貴女

米子市 茂理高代

冬將軍この世の乱れ嘆くよに
銀世界涙のあとも見当らず
雪よ降れよい事だけを積らせて
風花がやさしく頬に語りかけ
肩の雪冷たく思う亡母に詫び

米子市 門脇晶子

還暦の今日から歩幅変えてみる
風向きも私も変わる坂がある
私のオシヤレメガネも古くなり
ゆずられた梯子なかなかのほれない
運命のカード一枚ふところ

子定書くだけになってた日記帳
子は都会墓を守って過疎に住む
焼香の順 肩書でもめている
歳言っただけで保険屋来なくなり
親元を離れ大人になった孫

米子市 永井三津子

頼り切る母の仕草にのぞく老い
夫惚ぶ冷えた膝抱く夜寒かな
微温湯で育った自我を持て余す
ふところの重さ具合で人測り
はてさてな妖怪神社何祈ろ(鬼太郎ロードにて)

鳥取県 新家完司

スニーカーで気楽に行こう二〇〇〇年
欲深い頭を打たせ湯に打たす
僕を見て思案している福の神
肉より魚 油絵よりも淡彩画
言の葉を組み合わせると火を放つ

鳥取県 西原艶子

寒の夜の病院で知るあたたかみ
思ってるほどにあなたに思われず
いつからか風も男も気が変わり
愛鳥とポチの十年後を思う
やわらかくいさめる人であたたかい

カンを知りつつ婦人会長を全うした友へ
残る日を確かに刻む音悲し

鳥取県

塔

寛子

ちよつぱり毒味を帯びたい女

鳥取県

谷口次男

奉仕に生き病魔もろとも雪空へ

やすらぎを彼岸に求め燃えつきる

永遠に生くいのち信じて雪の葬列

高台の墓苑風花温く散る

鳥取県

土橋

はるお

昔ばなしを聞きに来たかとそぞの汁

鳥取県

さえきやえ

誓つても所詮は三日坊主だよ

久々のお客と喧嘩別れする

蟹股はお金の溜り過ぎの所為

たばこ吸う女の唇は苦い

鳥取県

原

みさを

春立つ日風邪のさ中に誕生日

鳥取県

林露杖

毒舌で剪定される心地よさ

芹つんでいのちやさしくなでられる

煮詰まっているのに誰も見てくれぬ

なま煮えの男一匹つまみ食い

窓開けて心に春の陽を入れる

鳥取県

石尾

かつ乃

花便りOB会と級会

鳥取県

羽津川公乃

ふきのとう一足早く春を告げ

ゆっくりと春の呼吸になる野山

遠い日の母の温もりなつかしい

希望まだ捨てきれなくてくじに凝り

鳥取県

石尾

かつ乃

日に一度の鏡で足りる冬ごもり

申告に行つて追加の納税書

ペン胼胝もわたしも皮が厚くなる
無為徒食掠れたペンで書く日記

鳥取県 橋本 多哥由

世紀末地下水だけは汚すまい

辰の刻伝言板は語らない

言い訳に嘘を混ぜては笑つてる

満ち足りて凡人らしく生きている

善人の世話にあきあき欠伸する

鳥取県 石谷 美恵子

樂させてあげたい老母がよく動き

決めたのも貴方守らぬのも貴方

苦の後の樂がなかなか巡り来ぬ

いつからかあなたに合わせ脈も打ち

ほどほどに欠けて夫婦の味になり

鳥取県 土橋 睦子

過去捨てて半分軽くなるころ

二千年へ事無きを得て流れつく

父ははを囿に金を借りにゆく

まだ女燃えつきるまで片思い

火のようにエリカの花が咲き乱れ

鳥取県 田村 きみ子

チャイナ服光って見えたのは昔

御受験がうちにも二人咲いて欲し

ばあちゃんが光って見える句会かな

プライドを半分捨てて今日も晴

二〇〇〇年椿植樹をして祈る

鳥取県 乾 隆風

老いらくの翼ひろげる福祉バス

人類の視野を拓ける二千年

がちがちの老骨西の陽にさらす

仏願を信じて石段を登る

お彼岸の沙汰をいただく謝恩会

鳥取県 乾 喜与志

歳老いていよいよ頭軽うなり

花粉症もスペイン風邪も縁がない

何のその雪道こいで温泉へ

世紀末まだ名残り雪とは言わぬ

長命のコツは俺にも解らない

鳥取県 国 森 武子

火の神は太古も今もあがめられ

がちがちと氷叩いて子等登校

赤ちゃんはしっかりゆっくり乳をのみ

白衣着た寒行の人御仏か

いい天気老婆ゆっくり過去話し

鳥取県 山本 正光

四季時期の大山なんと美しい

歳なりの夢だじっくり酒を足す

念のため他店の値札も見てまわる

いたずらをしてもよろこばれる仲だ

掌に乗せる幸せでいい老いの坂

鳥取県 黒田くに子

慈しんだりんご熟して嫁にやる
コンテストガラスの靴を履きたがる
煽ても受胎はしない花ざくろ
肩組んだ人の良心信じよう
不況風父の錨はゆるがない

鳥取県 太田幸枝

初打ちの碁盤に火花散っている
車社会足が短くなりそうな
世紀末私のネジを巻きなおす
新仏香の煙にむせている
梅香り心静かに茶を点てる

鳥取県 幸家單車

好きで描く漫画仕事になって居る
役好きがどんな役でも受けたがる
高級のワイン土産に見栄を張る
汚れ役上手にこなす名スター
喜怒哀楽机何でも知って居る

松江市 安食友子

旅日記亡母の万感置いてある
輪の中に必ずやいるターゲツト
ぴりぴりで試験前夜は縮こまる
胸糞が吐かれないならトランポリン
祝宴でテーブルマナー試される

松江市 佐野木みえ

周遊の旅の名残りに堀川船
あの日から疑い深いけしの花
暖冬と言われ積雪にあえいでいる
煮豆ふっくら隣へ少しお裾分け
立春に心許して風邪を引く

出雲市 吉岡きみえ

春になりや春の仕事が待っている
思いきってショートカットで翔んでみる
春の陽ににぎりこぶしがとけてくる
風邪癒えて大根うまい酒うまい
銭勘定ばかり仏に笑われる

出雲市 園山多賀子

龍は無理辰の落し子なら書ける
風邪の時だけの甘えは困ります
平仮名の優しさ憶う歳かいな
一刻を預かっただけ胸の花
褒められた記憶は耳を離れない

出雲市 竹治ちかし

酒の量減して眠れぬ夜を過ごす
胃の痛み五割カットで妻に言い
子の電話なくて親にもせぬ電話
気が触れたような夢を見て眼覚め
長生きをせよと投句紙の厚さ

出雲市 久谷 まこと

湯煙におぼろの湯宿雪もよい
ごめんねが素直に言えぬ夢ならば
崖つ淵引くに引かれぬ男の座
身辺整理身軽になつて翔び立つ日
燃え残る余燼を友が掘り返す

出雲市 富田 蘭水

古稀すぎてハイと素直に妻に言え
怒涛の海 私を癒やすこの快感
流行に遅れたからとて自句は自句
一ことが余計で価値をゼロにする
カレンダ―辛い別れを知りすぎる

出雲市 板垣 夢酔

元気でね来年またねと桜散る
野も山も息吹き返す春の色
極楽は春秋 地獄夏と冬
金魚から水槽掃除命ぜられ
転勤を笑顔で敵は迎え入れ

出雲市 小玉 満江

セレモニー太鼓の好きな日本人
廃屋を振り返らせる紅椿
うぐいすが急かす今年も申告書
おぞましいニュース電の降る夜に
山を見て天気占う人は亡く

出雲市 小白金 房子

寒ぼたん心やさしい彩で咲く
相談へ苦いお酒も吞まされる
灯を消せば厨凍て付く冬の月
手づくりの半纏母の温み抱く
遭難へ氷柱は解けぬ遅い春

出雲市 石倉 芙佐子

菜の花と想い出づくりをしています
雪どけに尖った心流される
さくら道愛の欠片が落ちている
桃の花思いの丈を有りつたけ
何事も無かったように咲く桜

島根県 堀江 正朗

雪見酒酔から酔うありがたさ
北滴の零下に耐えた日を思う
流れには流され戦盲身を護る
見えていた頃など語る阿呆らしさ
思い出のよさ飴玉をしゃぶりつつ

島根県 堀江 芳子

やるせなさ走って髪を梳きなおし
新雪の足跡 新聞ありがとう
お隣と比べられてた面白さ
目くばせの通じぬ夫の手を握る
この雪が消えたら桜さくら土手

島根県 伊藤 寿美

夏に作った紫蘇ジュース飲む風邪最中

大根が煮えて二人の日に戻り

春になったら亡父の峠まで行こう

トイレの壁がアイウエオから九九になる

カリスマの話が弾む美容院

島根県 森 茂美

とんがった孫も一児の父となり

豆まきの声から春の彩になる

撒いた豆拾う子のいる幸せさ

老婆の軒が高い生きている

寒鰯はアラを買うわと老婆の言う

島根県 榎原 秀子

二〇〇〇年夢かと思ういい出会い

宗次郎もケニーもきかず雪しんしん

清らかな雪に耐えてる寒椿

討論をすすきりとした時間

金封へ書く字がゆがむ嫌な日だ

岡山市 井上 柳五郎

年が明け喜怒哀楽へ靴を履く

連名で写真の賀状孫夫婦

年金で生涯学習趣味励み

一合で足りる酒量にする八十路

ご利益の香煙五体へ手練り込み

倉敷市 小野 克枝

少しずつ積荷減らして行く旅路

平凡な愛を信じている素顔

子宝に恵まれぬ娘の背を流す

反対へ走り出したら虹が見え

生意気な孫奴予定をみな崩す

倉敷市 井上 富子

レッツゴー今日も元気な万歩計

幸せな分だけ肥えている私

まだ固い蓄茶席に初デビュー

六十路まだ儘にならない着付かな

柔軟な思考学生社長殿

岡山市 大石 あすなろ

生涯現役ラストを知らぬ祖父の貨車

麦踏みの頃なつかしむ足の裏

いつからか私の真似をしない影

幸せのページを拾う古日記

ツーショットもう噂にもしてくれぬ

岡山市 小林 妻子

くる日くる日殺しのニュースから朝に

どの辺りからが余生と言うのです

希望高々無職を抱いて生きるのか

入社進学錨巻く音聞いている

枝打ちを今日も鶯笑ってる

昭和史にまだ埋めきれぬ北四島
岡山県 矢内 寿恵子

平がなを並べて老いの証とす
すんなりと書けぬ一行詩の重味
平凡に生きて来た日の淡い虹
無から無に戻す私に水の音

岡山県 山本 玉恵

百態の石の心と向かい合う
倒れてはならぬこんな風あんな風
花活けて花の呼吸と向かい合う
ミレニアム運に摺まり出す一歩
糸通す母の根気に梅におう

岡山県 福原 悦子

木枯しの中で新芽は春を待つ
忘れまいメモしたメモを置き忘れ
坂越えて私探しの旅に出る
真似してもどうにも出来ぬ亡母の味
フルムーン幸せ温める旅の宿

岡山県 富坂 志重

ひそひそと枯葉は私の老いの友
補聴器を付けて笑いの中にいる
どこまでの命か風と手をつなぐ
朝刊の記事にナイフの音がする
横町に昔をしのぶ風がある

生涯を人に捧げる花の精
菜の花が咲いて話はふるさとへ
またひとつ花が散ったよ道連れに
神仏に直訴がしたい拉致事件
時間の中へ血涙流し無で居たか
広島市 森田 文

芋粥をかくもよろこぶ寝嵩かな
たらちねの乳房二枚となり給う
雪しんしんどこかでだれかが泣いている
あるいてもあるいても白鷺にごさな
い
ジャンケンポン魚も跳ねる春の土手

竹原市 三宅 不朽

椿咲く家日の丸を立てている
椿の白も椿の赤も父だろう
ゆとりなどないけどおもしろいこの世
飯免の二女とギョロリとすれ違う
卒業旅行は日帰りというにぎやかさ

竹原市 小島 蘭幸

廃校の庭から聞こえてくる校歌
食足りてシチューの味がどうのこの
豪華キャストで意外おもしろくないドラマ
竜の眼を怖いと思うたら負けだ
葬式が続く寡黙の日がつづく

竹原市 森井 菁居

竹原市 時 広 一 路
なすことも無くて時間が延びて来る

日に三度薬に表彰されそうなの
我が色を守る可愛い種を播く

穏やかな顔だ裸木蕾抱く
ポカリ雲 孫にも欲しい広い空

竹原市 古 谷 節 夫

昇り竜へしがみつきたい二〇〇〇年

ドカ雪でテンポが狂う春の曲

農作業今日も軍手に励まされ

湯加減と爛は温めが好きになり

王様に引導渡すと金突く

美祿市 安平次 弘 道

肩書きが取れて名刺が軽くなり

退職金雀の涙でも嬉し

どんちようが降りて私を取り戻し

夢のまたゆめと知っててくじを買い

雑談の中で拾った処世術

宇部市 平 田 実 男

捻子を巻き巻かれて登る夫婦坂

肩揉んでもらうと心までほぐれ

補償金目先の欲に目が眩む

五七五 五七五で錆び落し

ハイハイハイ三回言うとノーになる

香川県 池 内 かおり
母に似ておんなじ処で蹴躓く

他人様の荷物が膝に落ちた罪
竹藪が相続税に揉めて冬

かす汁に亡母重ね合う寒の入り
セクシーな女優と名前だけ似てる

香川県 成 重 放 任

開発がスズメのお宿食いつぶし

じいちゃんが先生になる竹細工

離農して貸した田圃の米を買い

恨めしい馳走横目に梅と粥

申年の梅は葉と取って置く

香川県 山 地 マツエ

竹やぶをつついて噂の外に居る

水仙の香りが春を呼びよせる

背くかも知れぬ若さを抱く不安

時どきは馬鹿になり切る姑の耳

物言えば涙が出そう花を抜く

今治市 野 村 京 子

雑談の中から光る語を拾う

母というずっしり重い肩の雪

子が巣立ち夫婦の岩かたくなる

始まりも終りもさくら咲くころに

ひたすらに心がなごむつくしの子

四畳半自室整理に今夢中

高知市 北川竹萌

四畳半昭和の記録何処へ置く

若いキスサーフボードを砂に立て

唐津市 久保正剣

川柳書四社を何処に並べ置く

きみが好き明日もこの駅この電車

詩歌俳句自著の書籍をどう配す

風紋も女も一夜の風に哭く

奇策とはいかず静かに考えて

商魂の活字がでかい店仕舞

高知県 赤川菊野

まだ欲があつてお米を研いでます

日本中ピエロの競演春麗ら

唐津市 山門幸夫

戒名はいらぬ私は本名で

過去否定爺に寂しいコマージュル

パスポート地球がせまくなりました

脱日本カラーヘアが風を切り

水師営乃木大将の声がする

立春を紅梅一輪に教えられ

とびこんでゆこう大きい胸だから

アンカーの胸待つテープこれぞ恋

北九州市 梅田宣司

石投げた顔をおぼえているカラス

リユックから頑張つてねと孫の鈴

唐津市 山門夕ミ

静けさが重くて声を出してみる

綿入れの祖母の懐温かった

不協和音に攻められている老いの耳

若者にまじつて貰うエネルギー

生き方を変えても金は溜らない

前向きで生きよう今日も二人居る

住所録消してうつむくことばかり

蕨とりお握り持つて行きたいな

唐津市 樋口輝夫

春の宵独り読むべし古手紙

ひどい音あれが女房の返事かも

殺人のニュース途絶えて春の宵

名門の学卒駅で寝る男

出世した知らせもあつて春の宵

子の電話温度差のある妻の声

春の宵酒は目盛りのところまで

生き生きと人も魚も朝の市

明日でよいハガキを出しに春の宵

三十万出した勝馬世に媚びず

唐津市 市丸晴翠

ハードルが目の前に来て高くなる

三世代それぞれ違う二十四時

国語算数捨ててパソコン英会話

母のしたように私も母を看ん

梅凜と父亡きあとの母想う

熊本市 永田俊子

上向いて落ちてる手袋の思案

花園で迷子になった竹とんぼ

ついてくる鳩よお前もひとりきり

珈琲をすする時つくづくひとり

海に尽く一筋道がある余生

熊本市 高野宵草

歩きつつ焼芋食うも植木市

龍角散 追加買うたら風邪が癒え

さざれ石が巖とならぬ国歌恋う

お師匠さんだけが気取ってない茶室

ホワイトデーのクッキーが孫待っている

熊本市 岩切康子

沢登り拾い木杖の有難さ

頂上の遺跡の標にみな笑顔

母娘連れ見ればその都度羨まし

白髪を染め残す方夫好み

わび助が咲き始めたたら寒巖し

弘前市 蒔苗果林

ありがたい目覚めればすぐ僕の時

樹も影も正直だから犬撃ぐ

褒め言葉乗せて変身速い雲

かんにんかんにん雲とさらさら銷えそつで

手作りの手袋母の音がする

湯上りをパトンタツチする包み

出勤のパパに手袋暖める

北の宿「はるみ」の声が聞えそつ

君子蘭と見ている窓のぼたん雪

桃菜の花 春を真つ先仏壇に

啓蟄の虫にやわらか春の土

子報士が洗たく日和まで伝え

鍋ものは有無を言わない児等の箸

火を借りる相手も居らず過疎のバス

机上論ぼくが僕がが鼻につき

桜咲くまでは長靴だけの日々

職安の求人フアイル薄いまま

職安の更新激しい求人票

真剣に茶髪が見てる求人票

求人票子連れの女に娘を重ね

和田市 小笠原敏人

八戸市 島田 昭治

七十を越えて嫌らしい五十肩

敬愛の友の忌 啄木と同じ十三日

若い娘のサービス心が軽やかに

デイサービス受けて心まで暖かく

横浜市 小野 句多留

雪が降るあらゆる音を飲み込んで

カルテ見る医師の背中に焦らされる

見栄でする快諾妻の愚痴を聞く

暇という苦痛に呆けがしのび込む

京都市 稲葉 冬葉

トンネルを一緒に抜けた家族愛

老人のパワー悲しい鳩屋敷

ラベンダーの香りの中で快復期

歯一本抜けて入歯が合うてきた

大阪市 中田 あい子

プライドが高すぎ今もミスでいる

七十路半ときめきごとの数がへり

バーゲンで買ったセーターぴったりで

電車バスとめてマラソン五十キロ

大阪市 安達 はじめ

出不精に誘いをかける春の風

春霞花のトンネル通り抜け

子の為に美田を残す親の汗

長生きの褒美に無料乗車券

大阪市 町田 達子

野仏の肩の辺りに春匂う

早春の空の碧さが大好きで

東京ゆきヘライブですのと若いママ

就職 受験 神の悲鳴を聞いている

大阪市 渡部 さと美

打ち明けて人を見る眼のなさを知り

大袈裟なお方とろ火にようなれず

親切はおおきに後はほつといて

ノラ猫よ何を食べてる肥満体

大阪市 稲本 凡子

病院へ達者な口も持ってゆく

傘寿そこままだまだ出さぬ依頼心

有難う笑顔で言うて安らぎぬ

負けて勝つことを忘れた意地っぱり

大阪市 寺井 東雲

近すぎて妻の可愛さわからない

鼠穴猫のがまんに驚いた

妻が言う古い物から捨てなはれ

先祖への義理を果しに墓参り

大阪市 松尾 柳右子

野仏の目が細くなる春風に

校庭に歌ひびかせる春風よ

長話犬がべったり寝そべった

置き忘れ宝探しのようになる

岸和田市 宮野みつ江
白羽の矢まともに受けた不眠症
おだてだと判つていても褒め言葉
憧れはマフラー半分編む間
菜の花が心の釘を抜いてくれ

岸和田市 藪野けい子

Y2K買った名水孫みやげ
不景気にガレージに住むひとりもの
持ち株の高値待つてる初相場
ハッカーに元ハッカーが会社設立

岸和田市 田中文時

遊んで何で睡眠不足気味
短いが肺腑をえぐる母の文
飽食と言うが二合の米で済み
新婚の朝刊を取るお昼過ぎ

貝塚市 池田寿美子

舞子ピラ春の潮に風光る
紅梅にほっとひと息いのち燃ゆ
低迷を乗切るあすにすみれ咲く
震災のメッセージから貰う気力

東大阪市 谷口義

眼鏡拭く恥をしので言うたのに
仏壇の隣にお雛様かざり
長男の困った顔は見たくない
万歳が好きな男の主義主張

河内長野市 植村喜代
夫の足もう孫が追いついて来た
夫の靴脱がせて上がる歯の治療
人の波福を貰って帰る波
孫も今全身で物覚え出し

交野市 山川日出子

老人のご蟲屑増えた孫のうた
山寺に平常心の亡父の額
吉野川住民投票誤作動か
いたずらをホームページへ透明人

枚方市 二宮山久

病む妻へ添寝の手枕そつと抜き
病む父へ電話ベルする里の春
春そこにつくしの顔やスニーカー
夫婦句を拾い読みする川柳塔

寝屋川市 酒井勇太郎

八十路過ぎ杖と楽しむハイキング
世の中のすべてが妻に味方する
初挫折息子健気に生き残る
頑張るぞ曾孫結婚するまでは

寝屋川市 柴田英壬子

新年度から代議員言いつかる
節分のおすしもちゃんと丸かじり
軌道あらためて自分を大切に
世間さまへ一年間の宮仕え

豊中市 松岡久留美

海南市 谷口義男

無事願ひ本音は犬に言うておく
侘しさが母の思い出さそい出す
びつたりと意見の合つた夫婦離
半日の出逢い私をわきたたせ

歳月の裁きを受けた老いの皺
正論を無視してしまふ多数決
戦争の悲惨さ知らぬ改憲派
川柳とパソコン ボケを知らぬ老い

豊中市 岸田知香子

神戸市 池田善守

雪便り梅のほころび共に聞き

三十年振りの故郷温かい

浪人生陽気と共に桜咲く

妻の部屋妻の流儀でする掃除

願かけた受験一まず礼参り

自分のこと自分で出来た今日一日
テレビ故障思わぬ静けさよみがえる

戦友会隊列絆乱れがち

目立つのが怖くて渦を出られない

池田市 藤井計光

尼崎市 田辺鹿太

駄菓子屋は今どき子等の社交場

言いたくはないがお前も老けたなあ

百家争鳴 巷はとかく金金だ

裏側もさらけ出すのが男だよ

明荷もつ夢へ力士のふれ太鼓

お世辞抜きなどとお世辞を言っている

底冷えの孤独が残す てるくはのる

西宮市 刈田泰司

和歌山市 山根めぐみ

雪かぶり梅うめなりに満ちている

逢う度にだんだん小さくなる母よ

火の玉になるほんぼんの心意気

逢うたびに若くなるのは女だけ

鯛めしをむしむし食べる倦怠期

幸福の木が生き返つたよ芽が出たよ

ガングロの娘も日本の血が流れ

福の神招く手立てに善を積む

和歌山市 榎原公子

宝塚市 黒台伊佐武

若いっていいなあお臍出したって

病んで知る残り時間の短さを

春の息苺ミルクを頬張って

ふっきた悪夢も醒めた腹ひもじ

カタカナに汚染されたくない頑固

恋心あれば賞味の期限なし

撒饅の餅から貰う神の加護

本気ならウジウジせんと飛込みや

三田市 北野哲男
叩く真似すると日本は金を出す
鼻づらを撫でてポンポン餌を一つ

あんぱんが好きで半分ずつの古希
和を以て尊し程は酒ものむ

鳥取市 山本益子
閉ざされた心の窓をノックする
目標の輝く言葉吟味する

充電の餅腹三日寝正月
美しい別れの言葉胸に棲む

鳥取市 西村黙光
果実酒でインフルエンザやつつける
新聞を読むと頭へ血がのぼる

囲碁将棋マージャン老いのジャンプ台
ペン先は隠遁術の天才だ

鳥取市 美田旋風

賞罰なし怖いものなど何もない
無駄骨もひよっこり後で役に立つ
美しい花もはかなく散る花火
豊かさが値切る勇気を閉じ込める

鳥取市 杉本孝男

煽ても割勘だけは頂くよ
恥と汗上手にかいて生きのびる
死んじやいや相続税が払えない
父さんのよっしゃは何時も空手形

鳥取市 前田一枝
塗ったけど顔の小じわが目立つだけ
無免許で上手に乗せる妻が居る
振り返り拾い手のないボロだった
老人の帰りをせかす春日暮れ

鳥取市 岩原喬水
死んでから惜しむ話の種にされ
言えぬ愚痴実家の畳聞いてくれ
念のため書いたメモ帳また忘れ
老骨の膝が泣いてる油切れ

鳥取市 夏目健一
しんしんと積もる雪にも雪晴れ間
知り得ない明日があるから灯を点す
目礼にいい女らしい雪明かり
橋よりも川の飛び石近い道

米子市 木村富美子
風向きで匂う隣で梅が咲く
風向きを変えろ大きな深呼吸
兄弟で姉の心配してくれる
姉さんと呼ぶ義弟が年が上

米子市 野坂なみ
介護法ころがし飴を肥らせる
珊瑚礁魚の涙で白くなる
姦の字は女性侵害ではないか
仏像の下段へいつか座るだろう

ありがたや今日も笑顔でたそがれる
花かるた曾孫にかぶとぬがされて
高齢化すすむ私もその仲間
吹雪く夜は一人で逝った夫偲ぶ

鳥取県

津村 八重子

ふる里の母の便りを風にきく
世の中を正す神風吹いてくれ
逆境に耐えた証の花開く
ほほえんだ甘い言葉にだまされる

鳥取県

近藤 春恵

退院のほほえみ首は巻いたまま
新聞を読んで聞かせているようだ
終電車手前の駅で爪外す
焦るほど今宵の舵に乗り切れぬ

鳥取県

吉田 孔美子

がちがちの頭流れに添いきれぬ
目が覚めて今日もじぐざぐして暮れる
天の雨地に水となり生かされる
四十年巡る記念日恙なし

鳥取県

西川 和子

二千年のマウス無事故で間が抜ける
里帰り蟹のシーズン選って来る
髪染めずシルバークレー誇ってる
生き抜いた波乱の昭和遠くなる

鳥取県

上田 俊路

二〇〇〇年記念の苗木植えておく
梅の香に心ほのぼの万歩計
底ぬけの明るさを引きつける
シャボン玉とんで浮かれる春日和

鳥取県

権代 康女

春の陽に心の根雪溶けて行き
まだまだ六十路派手目な春の彩を選る
人生行路夫とあうんの旅つづく
舟溜まり幾たび死線越えたやら

鳥取県

奥谷 彩子

老いてなお頑固ますますひどくなり
いろいろと趣味にのぼせて惚けられぬ
日溜りで姉妹仲よくおままごと
さざ波で気持よさそう鴨群れる

松江市

浦辺 静江

毎日が多彩娘が嫁き遅れ
男一代おくやみ欄に名を載せる
ネオン街鼻緒が弛む宿の下駄
鶏もついで寝過した寒朝

岡山市

荻野 鮫虎狼

店頭で春を見つけた親子づれ
サザンカの雪は優しい顔を持つ
初雪へ朝の電話は忘れ物
正月の凧はテレビで見たまつきり

竹原市

岩本 笑子

伊予路にも春の足音椿祭

松山市 丹下美津子

ミコシ担ぐ息子へ父のアドバイス
兄弟が近所いい時悪い時
言い負けてつくづく妻の顔を見る

香川県 神保坊太郎

竹ほどに脱皮が出来たらナと思
未だ十年いけませと決めてくれ
色褪せぬまに飛立とう千羽鶴

改築に仮のお城で冬の陣

高知県 小澤幸泉

父恋し母亡き里に老いを生き
静淑と安堵を友に春遠い

縫いあげたゆかたに妻の別れの記

愛二つ別れて共に会えるまで

唐津市 宗水笑

二千年かけてヒミコを探し得ず

寒行の僧を励ますボチの声

米借りる噂は聞かぬ不況風

ひよ鳥の樹間を抜けるコンピュター

唐津市 井上勝視

影武者はやはり俺だと唐津焼

いい出会い唐津と生きる藪椿

ブランドは性に合わない唐津焼

軸と花生かし控え目唐津焼

川柳塔まつえ 復刊30周年記念川柳大会

とき 5月13日(土) 午前10時開場
ところ ホテル白鳥(松江市千鳥町20)
出句締切 午前11時30分
開会 12時30分(昼食は済ませてください)
懇親会 午後6時終了予定
兼題 「溢れる」 板尾岳人 選
「糸」 小西雄 選
「続く」 土橋螢 選
「花道」 林荒介 選
「活気」 原章峰 選
「爽やか」 佐々木裕 選
「玩具」 長谷川博子 選

席題 1題当日発表 各題2句
会費 1000円 懇親会 4000円

◎欠席投句は投句料500円を添えて5月8日(必着)までに下記へ送付してください。

〒690-0859 松江市国屋町381
竹内すみこ

主催 川柳塔まつえ吟社

いずも川柳会 75周年記念川柳大会

とき 6月18日(日) 午前10時開場
ところ 出雲ロイヤルホテル(0853-23-7211)
(出雲市駅北口から送迎バスあり)
出句締切 正午(各題2句・席題なし・欠席投句拝辞)
おはなし 川柳塔社 主幹 橘高薫風
兼題 「素敵」 河内天笑 選
「凡」 天根夢草 選
「雲」 八木千代 選
「びちびち」 但見石花菜 選
「椅子」 山本希久子 選
「船」 小島蘭幸 選
「うっかり」 恒松町紅 選

会費 2000円(昼食・大会誌・記念品呈)
懇親会 4000円(当日午後3時半・当会場にて)

宿泊 6000円(朝食は別) 出雲ロイヤルホテル
(17日夜・18日夜を明記の上、5月末までに下記へ)

申込先 出雲市松寄下町619 尼れいじ宛
TEL・FAX 0853-22-9832

主催 いずも川柳会

この句この人

橋 高 薫 風

一刻を預かっただけ胸の花 園山多賀子

胸に大きな菊やバラの花、派手なりポンを付けて様になるような顔でいるのは政治家に多い。作者をはじめ庶民は、滅多にない事で気恥すかしいのである。中七の措辞がよい。

昨年米寿のお祝いを受けられたところなので、その日の感懐であろうか。尼緑之助氏や原独仙氏の名コンビに色を添えた「いずも」の花の時代を思う。今年はいずれも75周年。

サウンドが聴こえてきそう路のとう

増田 紗弓

富山といえは立山山麓の雪の中から顔を出す露の臺は壯観である。若々しい色と勢いは若者達のライブの音響の綺羅の様に燃え立つ。ナースを職とする紗弓さんは露のとうの淡いやさしさと活力を持ち合わせておられる。

大寒のガムはバリツと音をたて

福土 慕情

弘前は北国、厳寒期にはチューインガムも噛めば煎餅のように音がするのだろうか。暖国では、まさかと感じられることなのだ。この

ように土地柄では当然のことを句にして、頷いて貰えるのも意外性のある面白さによる。

本社の大会にも参加下さる六十歳前の堅実派、雅号はロマン派。きちんとした組織立てに堪能なお人柄とお見受けする。

傘一本人はこんなにぬくいのか

倉益 一瑠

相愛の二人が雨をしのぐのを相合傘と言うが、傘の字には人が四人もいる。二人でも四人でも心通った同士はあたたかい。この句の「ぬくい」には、あたたかいを越える霊肉の实感がともなう。自分に正直な真実の歌い手で、これからの川柳の姿と言いたい。

大きなラツパの奥に居るわたくし

坂田和歌子

ホルンのような楽器を見ると、音の出口の大きく開いた形に反して、奥の方にはまことに静かな所があるので、ななかりかと思わされる。そう思わせる句の仕立てに独自の腰の据わったものがある。

今のこの作者を私の若い日に似ていると見

て、積極性に感じ入っている。

若いキス サーフボードを砂に立て

久保 正剣

パドルボードともいう波乗り用の板は細長くて、砂浜に立てると如何にもカッコいい。

若いキスの背景には夕日の落ちる椰子の木まで想像出来る。こんな若い句をものにする御仁は唐津在、肥後の細川家に仕えた宮本武蔵の自画像に似たたずまいのお方である。

不孝者嫁とはうまくやっている

川村 映輝

いつも言うことだが民主主義のお蔭で老後は寂しい。愚痴の一つも出るといいうものだがその愚痴にまた味があるのだ。作者は運輸局の役人の頃から路郎の門下で九十六歳、五人の子(四男一女)、十人の孫。それでいて今
は老夫婦お二人の生活である。

これよりは古希の段あいつとめます

山本 義子

舞台の裾で文楽の黒子が口上を述べる。演題や演者を持有の節で披露する。それはこだわりのない淡々とした口跡なので、次の太の音色が一層壮重に聞こえる。古典の味の一つ。
山本義子大夫も古希になられたか。それでも山登りを楽しみ、川柳会の世話を惜しまずにされている。控え目ながら出来る人である。

自選集

恒松町紅

川島諷云児

お節介と愚痴くり返す総入れ歯
政治家のエゴで神話が崩される
貸したのが戻り嬉しい気にさせる
筋肉疲労歳を忘れていた力
世の中が気に入らないは歳のせい

芳地狸村

野田素身郎

Gキャンブのファンを沸かす背番³
若虎が明日を信じるキャンブイン
松坂のキャンブにファンの目が熱い
ペナントに若獅子燃えるキャンブイン
球春の幕が開いたキャンブイン

遠山可住

榎本吐来

いまここにたった一つの歩が足らぬ
真っ白を行く北国の恋若し
よそ行きは紺一着で済む余生
だまされた思ってお守り買わされる
老い楽し明日へ素敵な友が居る

涙ならあした流そう夕茜
正解のない人生がおもしろい
脇役のそれもまたよし人生譜
借金も甲斐性のうちと負け惜しみ
背を向けた子ほど可愛い親ごころ

春が来た来たこれで霜焼けなおるだろ
入れ歯はずせば七十歳の顔になり
いい句だった、すつと浮かんですうと消え
軍歌なら引けをとらない古希の喉
ありがたや時間がくれば腹が減り

仮名文字とアルファベットが混む街路
葬送の従兄を偲ぶ夜半の月
席を譲った縁が結ぶスナックバー
糖尿へ薬と酒がせめぎ合い
プライドはまだ捨て切れぬ物忘れ

小林由多香

恵まれた暮らしへ早い日が沈む
発展の裏で昔が消えてゆく
胃袋も笑ってこなす三分粥
天下り待つ椅子だけは空けてある
行間にわたしの真意埋めておく

堀端三男

年甲斐もなく短気を出してひとり酒
目覚しも僕も捻子を巻かねば動かない
始まるよの声に起き出し見るあすか
電車の音がやけに聞こえる南風らしい
確定申告月日の早さ知らされる

藤井明朗

無党派も考える票総選挙
太陽を拝む雪雲うごき出す
苦勞して育った子等の親思い
句会後の笑い話が帰らせず
もう別れさびしさ募る花吹雪

宮口笛生

寒いのは嫌い老いたりなと思う
寒いので昼もすっかり酒をのむ
七十代若い若いと言ひ聞かす
氏神の森へ酸素を吸いに行く
まだ死ぬぬ三食薬のんでいる

八木千代

褒められた物を並べてばかりいる
意気地ない姿で並ぶ水呑み場
勲章を片付けている冬の棚
花のない壺を飾って寝てしまふ
可能性ゼロゼロゼロのその先に

阿萬萬的

無縁仏にも春が来ました草がのび
川霧に揺れて春待つ猫柳
春ですぬ家出の癖がついた猫
スケッチの方に味ある巨匠の絵
ばれそうになって仮面を脱ぐとする

斉藤 荔

地吹雪もやがてさくらの舞になる
冬眠の森は人間寄せつけぬ
鳩笛のまあるい音に包まれる
餌付け人逝って白鳥寂しげに
流感の子らを氣遣う冬葺

藤村 女

梅ホロリ散って失意の日を思ふ
土手のつくしに冬がさよならして行った
石仏の姿おだやか春陽さす
ほろ酔いのグラスが踊る春の月
腹心の一人上手に酔うてはる

田 辺 灸 六

乗り遅れ置いとけぼりの老気質
傷ついた心が癒えぬ貼り薬
よいことが舞い込むように節分会
一汁二菜いたわり合うて老夫婦
生かされて未完の行事目白押し

西 田 柳 宏 子

信用はしてると言うが鍵はかけ
寒気団 今年は日本好きらしい
僕のとこ信用したか面映い
両親に背く孝行だってある
裏長屋でもよしわが家温かい

小 西 雄 々

意地張らず何時もカゴメの輪に溶ける
そろそろと悔みに来ても血は薄い
錆びてきた右脳へ喝を入れとこう
子離れの近い私も傘ひらく
年金で微かに呼吸しています

野 村 太 茂 津

越後から嫁いで貶す紀の女
だしこんぶふやけたわが身ふと思
鞘払う武士の血筋という呼吸
逆縁や心疼いて寝もやらず
若葉よ何故に病葉残し散り急ぐ

弘 津 柳 慶

嫁にみなまかして我が家平和なり
太鼓打つ姿生き生きと燃えている
毎日が病院通いの年となり
責任を押しつけ合ってる事故現場
口ずさむ歌は軍歌大正子

金 井 文 秋

孤独でないだけでも幸せなる米寿
程々の力が好きなシャープペン
夢も見ずぐっすり寝たいのが夢だ
渡り鳥のねぐらを花火脅かす
風邪と言う事で小さな義理を欠き

舟 木 与 根 一

せせらぎもはしやぎ出してる浅い春
淡々と胃の潰瘍を告げる医師
暦では相性黒で五十年
地獄絵のほうが退屈させぬ鬱
それなりに悟りきってるやぶ椿

黒 川 紫 香

君の名をまた書きました手暗がり
わだかまり解くとおながが空いて来た
ふるさとは何を食べても皆旨い
声もなく涙ふき出る訃報聞く(川上富湖さんを悼む 二句)
輝いてまた輝いて逝った君

石川侃流洞

胡蝶蘭ひとりの部屋は淋しいよ
戦好きの神へ困っている地球
逃げ足早い思い出ばかり走馬灯
寺詣りでもしようか気弱になった歳
鬼退治した豆掃除機吸いに来る

正本水客

片方の耳では雑音きいている
想い出をたち切るように汽車降りる
言いきった言葉をむねにためている
古本のおい自分をとりもどす
せつなくて次の言葉をまっけている

西村早苗

あくびして犬も寝不足したようだ
えん側に隣も呼んで九谷焼
瞬きをして冬眠から覚める
啓蟄のわけを子が聞く置炬燵
服にブラシかけて約束ごとがある

高杉鬼遊

八十になって笑われまいとする
石一つ海のまんなか辺へ投げ
怒ったら身体にわるい医者が言う
暖房の部屋でひとりの計報きく
死ぬというまだ残ってる大仕事

木村あきら

風雪に耐えた老父の背が丸い
少年のベグルは春の風を呼ぶ
枯れてまでダブルで墜ちてゆく松葉
複数の舌でやがては纏れだす(政界)
五百羅漢亡父によく似た貌に逢う

工藤吟笑

流れても流れても川無表情
黒いから何時もカラスは損をする
計りには乗らぬ重さの母の慈悲
土の香が肌に染み入る父の詩
四世代君に仕えて生きる幸

土橋螢

照らされているとは知らぬ黒い影
先輩に催促なしの借りがあり
ありがとうございますでしたが聞こえない
涙腺がまさか切れてはおるまいな
二十一世紀の約束をしてしまう

越智一水

仏には嘘をつかない灯を灯し
恋をして何が悪いと猫帰る
ひたすらに夫に仕え酌をされ
歌会に「革命」シヨパンの歌選び
重ね着へ焚火が派手な漁師町

二宗吟平

回り来る春よ辰年八回目
御神酒の油さす母からの発動機
宮の段孫が私を吊り上げる
成り上がり爺の私に減らず口
我が町は母の町血の鎖

月原宵明

太陽を信じて農夫五〇年
ご立派な家だが笑い声がない
思い出の森で口笛もう鳴らぬ
肩車パバの頭は叩きよい
大好きな保母を園児が通せんぼ

波多野五楽庵

ででっぼうと啼くのはおよし喪の朝に
親と子と積んでは崩す輪廻かな
サソリ座の人と地獄へ参ります
菜の花の季節私と悲と哀と
買い足した絵の具はなぜか涙色

林荒介

降る雪に沼は遙かになるばかり
雪に咲く梅にまぼろし生れでる
埋み火と刻を過している月日
男来て重い机となりけり
如月のこぶしよ熱くあつくあれ

田口虹汀

大宰府の楼門巖と雅びして
まだ梅に早い宰府の太鼓橋
春南風が桃の節句を連れて来る
官幣大社バラオ参詣も命がけ
針一本ぐらいでバナナ提げて来る

板尾岳人

サクラにも相談したいことがある
咲いてすぐ散る理由知らぬ春の風
人の世を散るまでサクラ見えています
背伸びしてサクラと遊ぶ四月馬鹿
花びらを浮べて呑んで春の中

両川洋々

広い広いあなたの胸に好きと書く
月よ月僕の無念が分かるかい
紙おむつしてもとことん生きてやる
春風が政治のおもちや箱覗く
火のドラマこれから君と書いて死ぬ

河内天笑

道真の仏師の腕を発見す(道明寺)
花みずきつぼみはみんな天を向き
幾万をかたきに回す宝くじ
五欲抜けやらぬ柏手のひびき
念ずれば念じたようになることも

川柳太平記 (263)

川柳の群像

福岡阿彌三

東野 大八

「作句は中学時代、つまり大正14年頃で、岡田三面子博士の息子さんが中学の同窓生でその影響から作り始めたものらしい。

昭和3年九州から上京、東大入学、昭和10年頃北村雨垂氏を識り、14、15年には頻繁にこの人とゆききした。当時の横浜は柳誌『紀元』を山本斗酒が編集していて、大正から昭和10年頃へかけて活躍した柴田五万石氏の後の横浜柳壇をまとめていた。鬼猴子、小林万川らも活躍していた。

『紀元』はやがて『路上』となり文学報国会の『川柳道』に移り終る。これよりさき、昭和10年頃、阿彌三は、後年の理論的活躍舞台となった『川柳研究』に入り、戦時中半歳ほどこの『研究』の編集にも従っていた。

秋田時代(昭和18—23年)ある化学会社の経理を担当する傍ら、作句に励み『日本海』百

句を纏めた。この頃が作品活動の最も旺盛な時期だったらしい。

風も日本海も松も古典だ鳴るだけだ

この彼の作品は、今読んでも充分たのしい阿彌三の特色を示している佳品と思う。

秋田から転居し、茅ヶ崎時代(昭和23年頃)は、米軍調達部勤務。この時代はよく知られた彼の『川柳研究』時代だった(『川柳雑誌』昭和37年12月『阿彌三氏の横顔』山村祐)

本名・福岡実。明治41年1月1日現北九州市生れ会社員。大正14年から川柳に関心を持ち、昭和10年『川柳研究』同人。東大在学中から西脇順三郎の詩論に力強い影響を受け、西脇流の超現実主義詩論を『川柳研究』誌上に展開。誌上で現代詩としての川柳革新の推進に努めた。柳界では昭和10年に接触した北村雨垂の作品を高く評価。『天馬』19号(昭和36)

に次の『北村雨垂論』を発表している。

「落書は大抵黒の鉛筆である。色彩のある落書というところに妙な抒情が出ている」との評価を下している。昭和49年7月2日、脳軟化症で没。享年66。

「阿彌三の功績は何といっても超現実主義論を川柳界に紹介し、啓蒙的な実践活動を根強く展開してきたことであろう。超現実主義が二十世紀の芸術の性格を全く一変させたこととはよく知られているが、これは日本の詩についても例外ではない。

日本において超現実主義詩論の最も独創的な紹介者は西脇順三郎だが、今日の三十代、四十代のすぐれた詩人で、直接、間接に西脇の影響を受けていない者は少ないであろう。そして阿彌三は周知の通り西脇博士の熱心な崇拜者である。彼の西脇への傾倒ぶりは見事である。

今も現役として活躍する現代詩人の二本の柱を求めれば西脇と金子光晴の二人を挙げることに異論はないであろう。古くして最も新しいこの二人の詩人の秘密は一生かけて研究するテーマである。二人は資質的に対照的に見えるが、ある一点で一脈相通するものがあることを感じる。

何か私達に理解できない個所が奥深くひそ

んでいて、それらが彼等の詩人的活動の源泉となつてゐるようだ。西脇が最も影響を受けたのは萩原朔太郎である——と自ら告白しているのは一見奇妙にみえるが、なかなか味わい深い言葉である。二人ほど遠くに座つてゐる詩人はいいと思われるけれど、私にとつては非常に好奇心をそそられるのである。濡れた抒情とか乾いた抒情とかいうアイマイな割り切り方でなく新しい抒情の性格を探索する上においてよい足がかりとなるであろう。(同上・山村祐)

西脇イズムを信奉する阿彌三の考えているこれからの川柳は、よくいえば孤独な川柳理論批評家が味わう冷たい闘いしか考えられない。彼の作品を評して「教養が邪魔をしてゐる気の毒な作家」とみる既成伝統派の連中が多いのである。孤独な明日の川柳を希求する彼だけに、その川柳理論を毒舌と断ずる連中も多い。

「作品を書く評論家の辛さを阿彌三はよく洩らしていた。読者、特に句作に個性と才能をもつ作家ほど概して嚴格でセツカチのように思われる。評論家が批評や、評論で述べることは、川柳はかくありたいとの希望なのだ。句の形式で表現することの不適当なことを評論の形式で引出せうとしたものである。

もともと句と評論とは質の違つ表現様式であることを忘れ勝ちだが、偉そうに書くお前の作品はなんだ、では少し子供じみていてもそれが作家の本音というものであろう。しかし、作家ももつと寛容であつていい。句で創造活動をする才能と評論で創造活動をする才能とは、お互いに影響し合ひ、反撥しあつて進むのだから、句で表わせぬその捌け口として、批評に似た形式を借りて書いてしまつたのである。だから句がいつでも後になる。逆にしたいなと思ひながら出来ない。誰かが実作で示してくれてもいい、或いはその方がいいかもしれない(昭26・9「鴉」5号・阿彌三記)

この彼の期待に応えたのが北村雨垂であつた。それも終戦後何年かの沈黙の後に発表した雨垂作品を指してのことだ。

『川柳研究』に参加したところから、彼はその誌上に数々の評論を発表しているが、実のところ小文が多く、読む方も食ひ足りなくともつと長く書いて欲しいものだと思つたことである。そうした想ひの中で眼にした北村雨垂論(昭36・2「天馬」誌上)は、彼の柳観がよくこめられていたことだ。

雨垂作品をどう鑑賞しようと、人によつては勝手なことだが、彼は次の雨垂作品を挙げ、こんなことを書いてゐる。

画家よ 私なら一切を無色で描く 雨垂
純粹な灰色に鼻が啼いた

北風に柿が某戦犯の夢を描いた

色彩のある落書を未だ見ぬ巴里だが

これらの作品を並べて彼はこう独白する。

「北風に梢に残つた一個の熟れた真つ赤な柿と戦犯者の夢との取合せは妙に感じ入つた。

最後の「落書」の句はシャレた句である。しかしセンチメンタルではない。落書は大抵黒の鉛筆である。色彩のある落書というところに妙な抒情がある。それと未だ見ぬ巴里との結びつきが洒落ている。以下略」

といった調子のものである。そのよさは、阿彌三の彼自身の心証に拠らねばわからない。

君や動悸の罪障深き胸の丘 阿彌三

という彼の代表句があるが、そう彼がきめつけたのは、いかにも阿彌三らしい心証の結果からきているのだと判断したまでである。こんな彼の作品や雨垂の句をどう鑑賞しようと各人の勝手だが、最後に彼の『川研』参加頃の作品を参考までに挙げておく。

病んで蒼白い線が臥ている女だ 阿彌三

冬はミリミリと貧乏が凍る

空も大きな疲れである月が赤い

目高目高を追つて僕の理論を繰返す

▼次号は「矢野 佳雲」

誹風柳多留二四篇研究

16

大野秀二・小栗清吾
橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男

清 博美・佐藤要人

113 女にこうをはたかせる神事も

大野 「業をはたく」は、罪業を自白する

(「日国」とあって、本句を引用している。

句は、滋賀県坂田郡米原町朝妻筑摩にある筑摩神社の祭礼を詠んだもの。その筑摩の鍋祭では女が交渉を持った男の数だけ鍋をかぶるので、女にとっては間男の数を鍋が知らせることになるので、業をはたくことになる。

手にさけるよりもせつない鍋祭 三八9

顔に火を焚て祭の鍋の数 三〇8

清・佐藤 賛。

114 小刀を持つめにして栗を喰ひ

大野 栗の皮を剥くのに小刀を使用し、剥く

とすぐに食べてしまい、また別の栗を剥くというように、小刀を離さないでしきりに栗を食べている景。

気の長さむきためて置栗を喰 寛元莉2

清・佐藤 賛。

115 唐よふハ一字はなすと読メぬ也

大野 唐様は、書道で書体を中国風にして書くこと。元、明の書家をまねた書風をいう。

文人の間では、文徵明の書風が最も広く行なわれ、細川広沢、九臯父子、関思恭、三井親和、沢田東江、市河米庵らを代表とする専門家が輩出した。一般人には読解が困難だったのが特徴であった。(『新編川柳大辞典』)

続けて書いてあるとどうにか読むことがで

きるが、離して書かれていると読めない。

読メもしないで唐やフをやたら誉 傍三22
掛り人からやう書てしかられる 拾一〇32

橋本 当時の人は漢字の意味を知って読むというより仮名まじり(というより仮名中心)

の文章を定型的なスタイルとして読んでいたので、このように漢字だけの連続の文章になる漢籍の素養がないと読解できないということか。

山田 「続けて書いてあるとどうにか読める」というのは、その類の文章はよく知られたものが多いので、前後の関係で分るということ

で、ばらばらではとても読めないということではないか。

清 山田兄のように考えていたのだが……。

佐藤 句意は礎稿賛。

116 僧ハ聞俗にはくへと釈迦をしへ

大野 初夏の名物を詠み込んだ素堂の句、

「目には青葉山郭公初鰹」を背景に、俗つまり一般人の人は初鰹を食べ、そして肉食の禁止されている僧はほととぎすの初音を聞け、と釈迦が教えている。この釈迦は四月八日の花祭り(花祭り)の時期になれば初鰹を売りに来るし、ほととぎすの初音も聞かれる。

御誕生アレ時鳥ソレかつを 五〇八

中ハ釈迦左石松魚ほと、きす 二二六・五三

橋本 贊。細かいことながら、「釈迦が教えている」というよりは、「釈迦の教え」（つまり仏教）ではと解するほうが自然と思う。同趣の句に、

三人で老人魚くふあきのくれ 二二二・三八

―三夕の歌。

がある。

清 釈迦の像の指の指し方が、あたかもそつ言っているようだとの意であらう。

誕生のゆひハ松魚と郭公 拾一七

あれを聞ヶあれをバ喰へ指とをさし 六九八

佐藤 贊。

117 のうれんをいしやハ扇てすくい上ヶ

小栗 医者か町屋に入るときに、いつも手に持っている扇でひよいと暖簾をすくい上げながら入るといふ日常の光景を細かく観察した句。

小児いしや扇子をかへる迄に取り

明三宮 3

など、扇子は医者か必携品であつたようである。

暖簾には格別の意味はなく、

法げんののれんをくぐるじひな事 天五宮 1

の如く、一般の町人の家のことだろう。

清 贊。まるで居酒屋へふらりと入るような雰囲気であらう。

佐藤 贊。

118 其角が無いとおたすけに出る所

小栗 御助けは御助踊で、農村不景気の年に、百姓女の姿に扮して江戸市中を踊つて回つた物乞い。またその踊り。（『江戸語の辞典』）

俳人宝井其角が、元禄六年三囲神社で詠んだとされる雨乞いの句「夕立や田をみめぐりの神ならば」に関する類句多数の一。

句意は、其角に雨乞いの句を詠んでもらつて雨が降つたからよかつたけれど、もし其角が居なくて雨が降らなかつたら、農民はみんな御助踊りで物乞いをして歩かなければならなくなつただろう、という意味。

たなつもの持て発句の礼に来る 三二一

宝井の水でゆたかな年に成 六一・二三

清・佐藤 贊。

清・佐藤 贊。

119 御鼻毛をかそえて居るが勤なり

小栗 「鼻毛を数える」は、①女性が自分に

ほれている男性の心を見抜いて好きなようにもてあそぶ。②相手の心を見抜いて機嫌をとる。（『成語林』）

「勤め」は、「遊女が客の相手をする事」。

またその稼業や境遇（『日国』）の意もあるが、ここは妾奉公のことだと思ふ。「御」とあるから殿様などの妾で、とにかくひたすら媚態を示してご機嫌をとるのが勤務内容だといふのである。

足の指折つて鼻毛をかそへられ 二二三・五九

穴の毛ハ鼻毛かそへた跡で抜き

風流庵弘会 8

清・佐藤 贊。

120 切文ハ宵に帰たあした書キ

小栗 切れ文は遊女に客から出す縁切りの手紙。（『江戸川柳辞典』）

吉原で泊まらないで宵の内に帰つて来てしまつた翌朝、切れ文を書くといふのである。

宵に帰るといふことで、もてなかつたことを暗示する。腹立ち紛れに、「エイ、二度と行くものか」と悪口雑言を書き並べるのであらう。

切れ文ははら一はいいな事を書

清・佐藤 贊。

八二九

秀句鑑賞

同人吟 中原 諷 人

—3月号から

春の便りに「秀句鑑賞」依頼が届いた。

およそ二〇〇句、四百人近い同人の力作たちと対峙してみぬか、とは編集部的情怀？ともあれ日頃の感想も込めた鑑賞のページとして任を果たすことにしたい。

先ず、私が川柳界に曳き込まれて、諸先輩や諸柳誌に因って教えられたことは、定型の五七五による十七音字の原則に努めること。さらに、下五の「し」止めを禁ずること。また、何を詠んでも可いが、他人の眼にまで触れなくてもよい悪口句や人権差別句などは日記の中に眠らせたい。句は一人歩きする。老母や亡母を(はは・老父(ちち)・亡夫(つま)・孫など、説明の表現をしなくても推敲・工夫で読み手に判る句は生まれる…と習った。

川柳塔欄(同人吟欄)の作品は、未入選句をもってして技量度量を研鑽する場所であると教えられたことがある。にも拘わらず、定例句会での入選句を選者試しなのか、主幹へ再出句なさる作家を見上げる。これは両選者に対して失礼で非常識なことだとも教わる。

その上、例会の没句を推敲せぬままに羅列季節外れの句までも；主幹に向けては大変に非礼なことだと思わねばならぬものである。「川柳は人間陶冶の詩」と路郎師は遺され、

「句はその人のこころ、十七音字はその人の姿、リズムはその人の呼吸」を薫風主幹は引き継いでおられます。もう少し温かい人間を目指して川柳という宗教を大切にしたい。

あなたの作品は色紙・短冊に書けますか？
たくさんさんの秀句の中から主な作品を推挙…。

白杖に甘え心がふえて歳

白杖と六十年ありがたや

堀江 正朗

なに機嫌悪いの問えば目が欲しい

堀江 芳子

いつも傍に、白い杖と喧嘩相手をしてくれる内助の杖が添っている。どちらの杖に対してもお爺さんは心から感謝の念を抱く…。

ご機嫌斜めのこと心眼でおさめている…。

この御夫婦の作品に、この人間道に文句をつける人が居たなら、人間味が足りぬ…。

雪吊りの樹に雪があり安堵する

高須賀 金太

もし雪が来なかったら…哀れみをも想うかたちに映る。泥棒を捕らえて縄…では遅い。

さらには、弱者への施策漏れをも穿っている。

何事もバランスが取れるとホツとさせて貰えるではないか…。うつくしい景が好い。

はは老いたもうことなかれ屠蘇の順

白根 ふみ

齢一つずつつ古いけれど、母を追い越せぬ…歳の差が縮む筈はない…いつまでも若い母であって欲しい、私も若いままで居たいから…先ずは、今年も「元氣印」の一献をどうぞ…おだやかな景が佳句のかたちに調わせている。

どうしても埋まらない塗り残しの絵

永田 俊子

大望を抱き描きあげてゆく絵巻であるが、おさまる処に収まる彩が未だに決まらぬ絵。

やりがいがいり生き甲斐が在るのである。これが人間性というものではなからうか…。

ひとり住むアパート決めて来た雪よ

小島 蘭 幸

雪が降る日の辛さからアパートを借りたくなって契約してきた…。では作者の気持ち裏切ることになる。借家人は雪自身である。春を迎えるロマンチックな佳句だと思つ。

風呂敷の結び目にある演技力

川本 畔

材料が愉しい見付けである。風呂敷といえどもヒロインやヒーローを連れているのだ。やさしい蝶結びや花結び、堅物の男結び等々演技派の舞台は身近なところで開演中…。

茨道ものはずみか花が咲く

茂理 高代

人生街道とは茨道だとも言いませぬ。その人生の途すじで突然に愉快？なことが起る。馬が嘶く・宝くじを射止める・チューリップが咲く・大賞受賞など嬉しがらせてくれる。

まだらばけ勝手な時に顔を出す

林 はつ絵

完全なる惚け現象じゃないそだ、斑なる惚けなのだそな…すなわち濃淡の惚け現象が何の予告もなく勝手なときにちよっかいを出すのごとく顔をみせる…私まだ五十七歳だといふに物忘れが酷くなってきている。

はつきりと言う舌らしい寒の水

渡部 さと美

寒の内の水は、腐らないと言ふほどのことだけあって、自信を持つがごとしに澄み切っている。祖母が生前「寒の水は飲んでおけ」と諭したことを憶えている。強かな舌になつたのはお陰なのだろうか…嬉しいことよ。

雪しまく恋には遠き歳となり

長谷川 春蘭

「子を産まぬ約束で逢う雪しまくり」と香傘は森中恵美子先生の作品の続編を想わせる。あの若いころの恋は随分に遠退いた…という作者、激しい恋じゃなくほのぼのする恋心はご健在である。吹雪く日の物思いに男と女。

一人では何も出来ないありがとう

植村 喜代

一人だけで生きていような気であつても実際には誰かとお互いを生きている…。ジャムの蓋、朝・昼・晩餉のこと、身辺のこと扶け合つてゆく社会や家庭の筈だから、感謝すべき時にお礼を言わなくてはならない。残念だが動作が鈍くなってゆく道程である。

改まる服も着ないで正月

籠島 恵子

遅れても怒れない程来て欲しい

遅れても怒れない程来て欲しい

唐住 実

ありがたい絆ではないか。怒れないほど来いという、遅れても可いから来いだそな。ふるりの親たちは正装もなく待ちかまえていのお正月。ルーズじゃなくて正月は忙しい。そして神様も初詣をお待ちになつて…。

犯人は正月なりき尿検査

都倉 求芽

正月という奴が悪いのですな。決して私が悪さをしたのではない…という。川柳です。正月明けに多いのは糖尿尿や胃潰瘍だそな。お餅・お屠蘇など飲食も過剰がちですな…。くすぐりのユーモアに嫌気がしない佳句に。

松葉杖わが身となればいと哀し

稲葉 冬葉

初詣の交通事故？スキー？病気？、ある日他人事に想つていた松葉杖を遣うことになつてしまった。いと哀し、いと哀しいことよ。松葉杖のひとへの人情が察れるのである…。

一・一七 奇跡の生も五つ老い

山口 美穂

九死に一生ありがたや二千年

ごんごん始発が通る新世紀

森 茜

七〇〇〇人ほどが亡くなつて、阪神大震災の一・一七が五歳も齢を食つたとは速い流れを憶う。いのち拾いをして二〇〇〇年に生きることを感謝する作家たち。二十世紀の終焉列車と同時に次世紀（二十一世紀）の列車のゴトンゴトンに乗り込むことになる…。さあ今日の始発も今エンジンを始動したぞ…

水煙抄

河内天笑選

横浜市 川島良子

生きたとはこういうことと知る介護

お世辞にはお世辞で返すのが礼儀

知りすぎたあとの対処が難しい

焼き芋のかおりが届くどんど焼

酒の味知らず同情されている

篠山市 谷田多美子

始めまして曾祖母でちゅよ野菜ちゃん

キッチンでピカピカにして雪籠り

年金で好い婆ちゃんを演じてる

輪に入れてほしくて胸にながしこむ

鬼は外心の鬼も豆で追う

和歌山県 森下順子

ほがらかを演じ続けてストレスに

歳豆をたったひとりで数えてる

肩の凝る優等生のおともだち

方言は文化 お世辞だとしても

あちこちで春の見つかる野良仕事

愛媛県 中居善信

灰汁があるだから私が私なの

ど演歌のような女をすきになる

煮こごりになって魚が自己主張

停年後大きな穴が空いたまま

真っ直ぐに立とうとしてる独楽の芯

大阪市 中澤伽羅

逆境に打たれ上手になっている

表では時に他人の顔をする

向こうさんも他人は怖い思てはる

無駄を省くと暮しに何の彩もない

前書きを省いて熱い手紙書く

堺市 和田つづや

嫉妬心君を愛する副作用

充分にしあわせですという寝顔

我がままな方が安心してくれる

本心は妻の背中に手を合わせる

僕の影妻の潜望鏡の中

高知県 百田 幸

若者に嫌われぬようお洒落する

遠慮なく社長を叱るコンピューター

無関心よそおい夫は聞いていた

半分は隣へ分ける貰いもの

問われても教えられない目分量

京都市 高島 啓子

子の電話だと何となくわかるもの

道を掃く人へ会釈をして通る

挨拶の程度にしとくおつきあい

畳屋がなくなり駐車場になる

めだかだけじゃない雀も減っている

今治市 塩路 よしみ

春風に触れて木の芽の弾く音

進学 転勤打ち出の小槌振りたいたいよ

無口だが父の背中についてゆく

氷山に異変が起きるエルニーニョ

褒められてバーゲンだったとも言えず

三重県 佐々木 森 哉

今日一日を描く絵の具は 酒である

地獄絵を抱いて昭和が哭いている

わが罪の重さで落ちる寒椿

微笑んだ女仕掛けた罫がある

恋の夢見ている僕は骨壺の中

北九州市 岡田 幸生

試運転などと同棲憚らず

腕白の皆勤賞という誇り

仲のよい茶碗に薫る五目めし

ショーケース覗けばお茶の出る老舗

看護婦に少し甘えているベッド

岡山市 大森 純子

人はみな差し引き得なことをする

心にも体にもよいワンカップ

梅干しの種をカリッと噛んだ歯だ

ボランティア見栄でされたらかなんなあ

人気者破れ具合がいいのかも

八尾市 與田 明

妻乗せて押す車椅子歌が出る

胃潰瘍またストレスに食いつかれ

長寿国介護地獄の闇が増え

女性知事マドンナの人気呼ぶ

握りめし一番あとで指を食う

河内長野市 大西 文次

お尻から火がついて来る人減らし

影にまでがっかりされた待ちぼうけ

神さまに神殿修理頼まれる

赴任地にお供して来た影法師

厄年の祈願お呼びでない卒寿

東京都 井上つよし

年明けて時計が速く回り出し
なつメロで朝の体操床の中

古稀らしくない字が躍る年賀状

里芋に木の芽の香る朴葉味噌

木枯しがパラグライダー乗せて駆け

静岡県 中西雅

私の喜怒哀楽を知る柱

過去ばかりにしがみついている私じゃない

酒杜氏の汗にまみれて歴史継ぐ

農を継ぐ老いの背中に丸味おび

年賀状もう書かないと頑固者

野田市 那賀島雅子

ひっそりと目立たぬ草が蝶を呼ぶ

善人の面をはずしてすわりこむ

耳鳴りはストレスたまる音らしい

山深い里の串柿掌にぬくい

指全部つかって話す手話ニュース

八王子市 井上京一郎

ハンカチをくわえ晴れ着の手水鉢

朝礼の話 悲しいことばかり

セクハラの対極で売るヘアヌード

時刻表だけで一本書くドラマ

叱る気の声の高さになっている

新潟県 高野不二

大さわぎしたほどでないミレニアム

一週間は早いもう来る休肝日

ふとれない人の苦労もあるらしい

年金で隔月貧乏暮しする

免許証老人パスの役に立ち

弘前市 宮崎ヒサ子

梅だより遠いお国のようになきく

暖冬どうあれ雪の岩木嶺巖として

早朝のめまい騒動から十日

一過性と言う病名の安堵感

ミレニアムの今日の大空深く吸う

札幌市 三浦強一

戸を開けて吹雪飛び込む縄のれん

信頼をさせた詐欺師の国訛り

助手席にいて信頼の舟をこぐ

父さんのジョークに誰も笑わない

流水に寡黙となったオホーツク

横浜市 田中笑子

妻褒めておくと平和が続きます

誕生日今日は良い子になっている

猫好きに放っておけぬ野良の数

タイマと同時に妻が喋りだす

寒さからいち抜けだした梅の花

横浜市 秋元可
底冷えは春の序曲と位置づける

鳥の目に国境線はうつらない
嘗て火を灯した爪を化粧する
緞帳が下り一斉に咳ばらい
包装紙美し過ぎて包めない

横浜市 芦田鈴美

目立たない場所についてた期限切れ
胃カメラに私の過去が暴かれる
同居して下さるだけで親孝行
子が巣立ち夫大事な人になり
トンネルと橋で列島手をつなぐ

横浜市 豊田羊子

センサーがこわれ銭湯なつかしむ
銭湯を見付ける厚い電話帳
銭湯のある空間のセピア色
暖冬に勘違いした梅が咲き
翔んでいいよと娘に誕生花

横浜市 巖田かず枝

風邪予防虫歯予防と酒を飲む
邪魔になるようなプライド持っていない
笑い皺もれなく福がついている
前髪を切り春の服買いに行く
子育てを終えると持病うずきだす

横浜市 金森徳三

いつでもと思うていつもやり残す
手や足は洗うが心忘れがち
サイドミラー気付いてバスが待ってくれ
少子化の歯止めになるかミレニアム
出鱈目の体操だけど達者です

横浜市 福田由美子

廊下まで物置きにする整理下手
ポックリ死の話題さけたいまだ四十
マニキュアが並び娘と距離ができ
お年玉おめでとよりチカラあり
もの忘れ年寄りどうしなくさめる

横浜市 鈴江純子

陽の温み心の驕も伸びてくる
次世紀の夜明け見ようと検査受け
若作り席譲るのをためらわれ
モーションをかけられ脈が乱高下
陽炎は大地の息吹草木萌ゆ

横浜市 近藤道子

陽の当たる道を探して散歩する
気くばりがこんな温いとは知らず
少年の野心が恐くなる世相
しみじみと茶を入れかえてする話
自販機のジュース怒って出て来ます

英文科卒で会話が通じない

故障したテレビ叩いてみたくなり

紙コップなみなみ注いで嫌がられ

急用に以下の予定は忘れられ

ためらってすかさず貰う袖の下

横浜市 長 島 亜希子

寝正月だけれど腹はすいてくる

透明な袋でゴミが出し難い

醤油まで持参したのにまだ釣れぬ

Y2K非常袋を見直させ

出来栄えを褒めた野菜を持たされる

松江市 銭 山 昌 枝

髪切った訳をみんなが聞きたがる

ときどきは先祖の墓へ詫びに行く

二人きりにも指定席あるこたつ

うつぶんを晴らす焼き芋食べている

責任感強い男も左遷され

出雲市 川 島 和歌子

戻り寒風が笛吹き雪おこす

二〇〇〇年こわいニュースの続く春

むらむらを心に秘めて燃える女

見栄張って女の意地が顔に出る

大漁にバケツで計る雑魚の量

横浜市 北 沢 街 湖

頼まれて否とは言えぬ荷を背負う

瘦せたいと呪文を唱え黄昏れる

引き算が続き年金身構える

ほしい物無いと言うのも淋しいね

似合うよとたまには言っしてほしい髪

出雲市 城 多 喜

鳥になる夢はまだ捨ててない

生きている証欲しくてひた走る

逢う約束果せぬままに春が来る

親ばなれ子供はとうに離れてる

やんわりと棘を包んでいた言葉

出雲市 加 藤 スズコ

もみじの手何を祈るか初詣で

賀状から息吐く龍の勢ぞろい

古里は大蛇伝説神の住む

積る雪庭の八ツ手が苦しそつ

赤い頬親子の絆雪だるま

益田市 岡 田 たけを

力瘤できない腕を撫でて住む

割りに合わぬ仕事もせねば食われない

健康を自慢の友が先に逝き

病む妻と昔話の夜が更ける

転んだら人に見られぬうち起きる

出雲市 佐 藤 治 代

島根県 武 島 ちよえ

情報をスタミナにして老い二人
甘党に辛党だけど仲がいい
小窓から桜見出来る家に住む
引つ込みのつかなくなつた早とちり
ふた月が駆け足で行き路の臺

島根県 菅 田 かつ子

梅干のない日食卓もの足りぬ
頼りきる船頭さんの櫓が壊れ(思師病氣)
いける顔してるが私飲めません
白鳥の飛び立つ姿ゆつたりと
悲しさはひと息ついてから哀し

島根県 福 間 博 利

入れすぎた風呂水こそつと捨てておく
消防車の引き上げていく鐘の音
ぬくもりに突き当たるまでハシゴ酒
ぬくもりが屋台の椅子にありました
切りつめて自己満足の庭の松

島根県 持 田 多輝子

世の中の悪に染まらぬ島暮らし
奥の手をみせぬ思案の腕を組む
眞実は神のみぞ知る医療ミス
紙一重予測の出来ぬ明と暗
ふらつと来た友は一番うまが合う

鳥取市 録 沢 風 花

誤作動が脳波に起きぬよう磨く
ひと区切りつけては熱いお茶を飲む
お稽古に出る日は寒さ厭わない
ぜいたくが手作り病を生んでいる
ハードルを一段高くして転ぶ

鳥取市 田 賀 八千代

荷車が重すぎ愛が乾きだす
文句なく生きる火を抱き風を抱き
踏ん切りがつかないままに舟をこぐ
輪の中ではつきりしないまま暮す
子が巣立ちそれから花火胸にだく

鳥取市 有 沢 せつ子

婆ちゃんになる日の爪を丸く切り
湯上がりの赤ちゃん包むいい役目
三世代心の窓は開けておく
米をとぐ手伝い好きな孫二人
歩道まで広げて花屋憎まれず

鳥取市 福 永 ひかり

負け癖がついて忘れた勝名乗り
同じ水飲んで当たる日本人
春の窓となりが近くなつてくる
明日死ぬと分かれば何をするだろう
まだ五十惜しんで余りあるいのち

鳥取市 山宮愛恵

分ち合う伴侶の居ないのが困る
腹割ってホットな足で帰宅する
結婚記念日初心に帰る日と定め
佐助の一輪ほどの幸でいい
流れから少しはずれて葦になる

鳥取市 西尾敬之介

酒粕に下戸もほろ酔う寒の入り
雷の地鳴りに雪の降り積る
旅先で方向音痴らちあかず
いい年をしてもらい泣き品がない
値が高い破魔矢を買って運預け

鳥取県 鳥羽玲子

足音へ懐かしそうに鯉は浮く
結婚もどんぐり同士波立たず
新茶の荷深いご縁が続いてる
憂うつな日はひたすらに鍋洗う
ダイエットやがてすらりと痩せる筈

鳥取県 鳥羽直市

仕合わせだ窓際という席もある
美しい富士山眺め旅終る
百円の朝市なぜか買い過ぎる
平均寿命まではしっかり生きてゆく
晚しやくを適量にして目覚めよい

鳥取県 山内芳江

末席の無口が妥協してくれぬ
引き裂いて見ても親子にある絆
良心に詫びつつ捨てる紙コップ
感動の涙に貫い泣きをする
どんぐりが背伸びをしても届かない

鳥取県 澤裕子

裏方に徹した母の丸い背な
信じてた友の裏切り震度3
叱責は脈あればこそ飛んで来る
少年のいちずな思い侮れぬ
超音波脈打つ胎児映し出す

鳥取県 竹森富久江

限られた命よ惜しめない情け
にこにこと笑ってくれるまであやす
晩の露あびると咲^{ひら}う蘭の花
意気も盛んに老い燃える皺炎える
苦は楽へ裏返りにこにこ暮す

鳥取県 山下節子

疑えば広域犯の顔に見え
客からの土産の酒に酔っぱらい
頼られているが私も頼りたい
歳を積み負けるが勝ちのコツ覚え
買い物へせっかく書いたメモ忘れ

のびのびの同級会で兎に戻る

倉吉市 大下 智子

鬼よりも怖いリストラ豆をまく

八百長といわれてもすぎ相撲見る

倉敷市 撰 喜子

微かでもイメージ残るクラス会

新聞のクイズに葉書まとめ買い

初恋の思い出いままも生きている

新聞の休刊日にはホッとする

交替で夫にまかす台所

弁当をかくして食べた新聞紙
バレンタイン義理でないチョコ作ってる

倉吉市 牧野 芳光

引き算をやった揚げ句の好決算

年金の耳にむなしい億の金

鳴門市 八木 芳水

頼もしく思う私に背いた子

老いてなお願いが多い初詣で

街路灯がわりの自動販売機

ひたむきにバイクを磨く茶髪の子

梅干しの実を投げ捨てる孤独なり

福耳と言われて金が溜らない

人を信じぬ鴉が分かりかけてきた

長生きの秘訣などない好きな酒

倉吉市 猪川 由美子

川柳に命を貰い生きてます

まだ欲も希望も捨てず青竹を踏む

香川県 原 賢

恋の予感へ危ない橋を渡りそう

目線さげ見れば許せることばかり

ほころびたハート縫い縫い恋を追う

ライバルが去って肩の荷軽くなる

おんな五十 恋の過労にめげず生き

少しだけ言い過ぎ妻と寒い部屋

コウノトリ皇居とどうもソリ合わぬ

これからもガタゴト走る縄電車

岡山市 清水 金太郎

香川県 松村 輝夫

戦争はルールあっての人殺し

涙浮べ応える妻の足摩る

草花に春が近いと教えられ

死亡欄私の歳と天秤に

老友が寄れば病氣の話のみ

太陽と暮す私も燃えている

戦争があつて外地の話出来

夫婦して満足そうな顔の皺

他所の子はみんな利口な子に見える

布ノレン汚れた店にある人気

高知県 近森 功

おしつこの話に耳を傾ける
結び目を時折ゆるめ翔んでみる
赤い糸忘れています倦怠期
賞味期限切れて切れない赤い糸
限りある余生に夢が多すぎる

高知県 桑名 孝雄

泰山鳴動 鼠も出ずに二〇〇〇年
Y2K貯金が増えも減りもせず
あと三年もう三年の日誌買つ
身に余る光栄ですとしらじらし
楷行草そんな人生だったなあ

今治市 渡邊 伊津志

差別の目こそが平和の障害だ
足摺の波が吼えつく遍路旅
美しい嘘を咲かせて波立てず
了見の狭さを海へ捨てて来る
退官を潮に気楽な雑魚になり

今治市 中村 好恵

乗り継いでやはり東京遠いとこ
学割りが欲しいな主婦の趣味の数
泣きながら気になっているアイシヤド―
二兎を追う中途半端な習いごと
中傷の言葉が胸につき刺さる

愛媛県 安野 案山子

リセットを押しても消えぬ愛の傷
振り向けば夢幻の五十年
長生きの心得だけは知っている
春風と上手に遊ぶグライダー
善人の面を被って聞く法話

愛媛県 宮本 末子

待つ事に慣れた女に夜鳴きそば
お抹茶の残りで刻をあたためる
心もち伸びた節分後の陽光
分れ路の旧参道は仏道
金のある人使うこと知らぬ人

八幡市 糸野 和俊

窓越しの電信柱松になれ(マンションに転居)
近すぎてやさしい言葉後回し
大阪城の広さへ寒いホームレス
淀君の自刃を偲び梅を見る
足遅き父に合わせよ家族旅

尼崎市 河津 正治

アドリブが多く真意が掴めない
モカ一杯始めの義憤どこへやら
還暦を越えて派手目が良く似合い
運命線太く希望に揺れ動く
小春日を乗せて漂ううかれ雲

日が昇り雪の滴がしゃべりだす
いい風が吹くこと念じ二〇〇〇年
尼崎市 野瀬昌子

いよいよの介護保険が動きだす
ほったらかしの蘭が今年も咲きだした
春仕度しているらしい土の中

尼崎市 軸丸勝巳

カニ様と言いたやテンと皿の上
むしる手をチクリと刺したカニの意地

梅干に元気を貰う朝のお茶

種袋見て夢をみる坪菜園

判決が地球を救う方を向き

尼崎市 森安夢之助

舌先の嘘ころころとよく転ぶ

お祝が重なり家運盛んなり

仲直りのけじめに酒が待っている

食文化老妻の味嫁の味

始めての大根作り自画自賛

尼崎市 尾宮弘治

金婚の色香は追わぬスニーカー

辞書にない言葉で綴る自嘲の詩

長生きをしてねと覗く老いの風呂

ワープロを習うて猫にまで手紙

潰け過ぎの白菜義歯にでも美味し

ロケットを打つのが下手な種子島
本物はお金だけだとひねくれる
命あつての物種お粥に吸り泣いている
衝動買いで痛いローンを組んでいる
義理チョコのひとつに期待かけている
尼崎市 清水久美子

饒舌でキラキラ光る今日的大海
一筋の光すくいの手をのべる
予測せぬ狼煙が昇る背後にも
書初めを乗せた炎が舞うとんど
太陽が昇る一日を確と生き

篠山市 円増純子

旨くない青汁飲んで命乞い
ガン告知されて温和な顔歪む
新聞に載る程悪いこともせず
この世からゴミのなくなる夢を見る
ワンマンも定年真近皿洗う

三田市 久保田千代

酔い醒めの水に道理をこんこんと
先立てば三途の岸で待つつもり
受け継いだ血に解凍の手間がいり
判ってはもらえぬかたつむりの必死
敵が居るまだまだ望みあるらしい

綾部市 藤田芳郎

— 71 —

兵庫縣 安達 厚

長話女は腰を下ろさない

酒のめず妻と二人の旅にする

ついていけん 便利なものはもういらん

カレンター美人が部屋に居てくれる

靴の数見てはつととする医者の門

兵庫縣 広瀬 房江

腰痛を終身刑と思う冷え

要らん事言うてしまつた苦いお茶

ワインレッド位平気で着ています

お刺身も三日続けば生臭い

熱爛は一合きりの診察券

京都市 前上 英一

気掛かりは老いゆく先の空模様

古書の市亡父の蔵書と巡りあう

安心をカーブミラーに貰う角

回り道した人生が視野広め

正確に声聞き分ける白い杖

和歌山市 上地 登美代

強い方へ上手く傾く風見鶏

春一番ロングヘヤーを逆撫でる

冠婚葬祭あつて絆が深くなる

まだ散るの早すぎますよ寒椿

来客の電話で紅を引き直す

和歌山市 吉村 さち子

春待たず黄泉路へ急ぐ寒の入り(川上富湖さんへ)

命の洗濯なんて勝手な誘い合い

一心同体みたいに見せるペアルック

ちよぼちよぼの友だちだから気がおけぬ

目を付けて根回ししてる形見分け

和歌山市 木村 親路

ぬるま湯に育ち出世が遠くなり

見て見ないふりする教師ばかり増え

筆まめな先輩もつて苦勞する

花粉症一番先に春を知る

就職が出来ず大学院へ行く

和歌山市 土屋 起世子

携帯を持って外出多い母

一桁の昭和生まれで昭和好き

喜寿の子に味噌おくる母九十五

漫才はおもろい裏は戦場か

今日だけは鱈に頼む福は内

田辺市 大峠 可動

春浅し酒のうまさと生きてます

藪椿水が欲しくて地に還り

花便り耳で拾うて耳へ捨て

もも さくら笑いすぎると落ちますよ

忘却の闇しんしんと物忘れ

和歌山県 杉山 精子

慰めの言葉渴いた空に消え

こだわりのモカを夫の味音痴

スピードに追いつけないよ英会話

きつと来る老いに備えるバリアフリー

観客は夫ひとりという会話

和歌山県 坂東 和代

賞味期限切れた二人の差し向かい

関白にさせていながら糸を引く

あの二人夫婦じやないな楽しそう

お父ちゃんそれセクハラやないですか

ウインクも眼がね越しだと通じない

奈良市 上村 季世恵

暮れからの風邪持ち越して二〇〇〇年

専門書枕にねてる二浪の子

神さんも多くの願ひ背負わされ

成田山掃き集めてるお賽銭

ダイエットせねば足腰悲鳴あげ

奈良県 渡辺 富子

言い過ぎへりセットボタン押せたなら

師の一言心の穴を埋めてくれ

衝動買い妻のいら立ちすつと消し

煌々と明かりをつけて君を待つ

私の愚痴放り込む穴を掘っておく

三重県 尾崎 勤

いつまでも手を振る友が居てくれる

ばけ役が居らず話が固くなる

届けるには惜しい好みの傘である

何も策ないのでせめて悩む顔

人通り途切れ昔の町に出る

尾張旭市 三浦 きぬ

独り居は鬼を追うのに落花生

意味知らぬ経を唱えて頼みごと

美辞麗句お止し貴女に似合わない

摩訶不思議な事件の続く世を憂う

眼の周りマッサージして日誌書く

大阪市 平井 露芳

ええ夢が見たいと枕さらにする

日本一小さい池に住む金魚

無添加の豆を鬼にも撒いてやり

未だ若いつもりが介護保険証

汚すなら富士山遠くから見とき

大阪市 一本 勇太

捨扶持に武士のプライド尾を振らず

アメとムチつまりは型にはめてゆく

美しい嘘に埋れて見る勇氣

塗り込めた筈の下地が浮いてくる

どの辺に心があるや影法師

大阪市 榎 本 日 出

戎さん起きて下さいこの不況
句の世界回り道にも魅力あり
自転車がベントと出合い吠えている
手料理に飽きて出掛ける回るすし
鏡には皺を気にして距離を置く

大阪市 奥 村 五 月

黄昏に友と語らう縄のれん
やめた酒夜がくるたびそそのかす
言えぬ愚痴屋台の酒は聞いてくれ
ランドセル夢つめ込んでおどる春
豊満な胸をくすぐる春の風

大阪市 三 浦 千 津 子

いたずらな指がアイデア生んでます
すれ違う女に音のない火花
米びつを満たし戦後を忘れ得ず
伸びる芽に老いる命を刺激され
定年後妻に傾く影法師

大阪市 榎 本 舞 夢

祝賀会脇役ばかり盛り上がり
華やかな話聞いている部屋のバラ
あくせくと稼いだお金置いて逝き
ハプニング台本背き名演技
雪景色今日の装い派手にする

大阪市 熊 代 美 智 子

愚痴ばかり言わず生きよう古稀の春
優先の座席ゆずられちよっと照れ
逢わぬよう遠まわりして逢いました
ごめんねと言えない私ばかりです
はぐれ鳥餌などないがよつといで

大阪市 小 泉 ひ さ 乃

枯れるまで愛されたくて光らせる
ブライドが選り好みして遅い春
親孝行してます脛もかじります
吹っ切れて再出発の靴を買っ
丹精の花盗まれた寒い朝

堺 市 丹 後 屋 肇

まったりの味に帰阪をかみしめる
ドキドキで見詰める内之浦のゴ―
よちよちの足に及ばぬ関節痛
故郷嗅ぐ竹馬の友の年賀状
折り合いがつかずキツチンドリンカー

堺 市 矢 倉 五 月

生命線この頃疑問持っている
顔つきに余裕切り札出来たらし
低そうなただけ測る血圧計
大丈夫走り切れると自己暗示
小春日でさつきの花芽のぞき込む

ザーメンの弱さ少子化劣性化
ザーメンの跪き国力低下する
堺市 梶本哲平

平均年齢高き誇るもいまのうち
日本の文学賞が海越える
活力の漲る社会今いちど

堺市 村上玄也

健康の敵と知ってる煙草好き
一言と断りながら長談義

急用を邪魔する妻の長電話

孫からの電話に妻の声弾み

おばはんと呼んだら睨みかえされる

堺市 齋藤さくら

五十路でも裏と表がまだ読めぬ

サラリーマン妻の前では弱音吐く

最低限のプライドだけは持っている

句に困る時は夫の顔浮かぶ

手を引かれ戸惑いながら歩く道

堺市 田中紫

越前の蟹かにカニに腹笑う

競い合うガングロマネキン春の彩

肌荒れにお薬付けて肌あれる

百歳の現役テレビで励まされ

若づくりしながらカイロ背に腹に

留守久し大阪弁に甦る

木々の影ゆったり伸びて日向ぼこ

一輪のベダル自在な遊歩道

Eメール無味乾燥の文字並ぶ

息子の焼いた鉢で寛ぐ夕ごはん

堺市 大橋錦

きんさんは百歳からの晴れ舞台

日曜の気分ゆつくり雨になり

バイバイがもうわかるのか十ヶ月

見栄張らず姪の古着を着せる嫁

鳥かごの中の私もコーラスに

堺市 荻野正雄

笑いますまだ福欲しい爺と姥

雑誌買うへアーヌードが好きだから

旅の宿妻長電話僕早寝

悩みます無傷の野菜戴いて

銀行黒字つまり税金太りだな

大阪狭山市 矢野梓

相談をしておきますと逃げられる

血圧にひびく争いから逃げる

省いても何処かに無駄のある家計

マイペース取り残されてもマイペース

声で聞いたのとお顔と大違い

羽曳野市 川 田 晋

クラス会健康法を比べ合う
歳とらぬ声が返って来る受話器
御指名の音頭コップの泡が消え
長生きの秘訣きかれる喜寿祝
着ぶくれて風邪ひきなおしひきなおし

羽曳野市 森 田 四三郎

禁煙禁酒飯も減らせと言う病
未だ生きているかと現況届くる
元気でふとポツクリ死考える
オバタリアン旅の話は食ばかり
空き巣には吠えず巡査に吠える犬

藤井寺市 岸 本 寿 代

若返り滑ってみたい銀世界
踏まれても踏まれても咲くたんぽぽよ
面倒とわかっていてもほっとけず
柳友とすし丸かぶり厄逃げる
この熱で貴方のハート燃やしたい

八尾市 山 本 至

甲高い母のラッパが鳴りひびく
ゆっくりと養生できて神に謝す
まだ嫁にすべてゆずれず目が尖る
加齢臭消して若さを追いかける
見えないもの見えて苦勞の幕があく

八尾市 田 中 トシエ

髪染めて出かける妻に犬が吠え
起重機が不況の風をつりあげる
ゴミの山人と鴉の知恵くらべ
人生を知りつくしたる日向ぼこ
四月馬鹿待ってた嘘にひっかかり

富田林市 山 原 昭 水

織田作も遊んだ難波好きやねん
戎橋俺も昔は軟派した
ストレスを溜めないように今日も呑む
ふる里の田舎歌舞伎が生きている
わらべ唄心の疲労回復剤

富田林市 中 井 ア キ

雷の一喝 昭和は生きている
今更に告白はせぬ赤ワイン
省かれてほっとしているチョコレート
方言が弾む 昼のローカル線
海鳴りと暮しスランプ切り抜ける

富田林市 大 橋 鐘 造

すべらせた口が大きな荷を背負う
結び目を確かめ合って回る独楽
歳豆の数だけ花野近くなり
実らない恋なら何時もしています
逃げ込んだ森で拾った温い風

富田林市 中崎深雪

岸和田市 村垣鹿太郎

雪かぶり見慣れた庭も別世界

子ら巢立ち豆撒いた頃なつかしむ

良い母を演じ続けてくれたびれる

あす受験親がドキドキ眠れない

新年の誓い忘れてゆく二月

河内長野市 水谷正子

定年でバレンタインも波静か

蟹食べる戦いぶりを挿擧される

蟹御膳女四人の口塞ぎ

湯けむりの友の乳房が美しい

きんさんを思えば背筋シャンとする

河内長野市 杉谷カズエ

誉められて画家になる夢すぐに見る

障害の言葉聞きとる思いやり

ノーマイク プラチナリングよく光る

杖の人皆友達と思う年

いいお茶をよばれてお茶が好きになる

河内長野市 木太久正一

半世紀信仰の道迷わずに

耳萎えし妻生き甲斐のパッチワーク

誕生日孫と娘の声届き

寒空の何処に宿るホームレス

ホスピスの話に耳をそばだてる

投句する日は大安と定めている

定退日喜怒哀楽を胸の中

五七五孫も一緒に指を折る

金婚式でやっと阿吽の呼吸合う

聴診器で今年の景気みたいもの

泉佐野市 大工静子

ささやかに退院祝寿司を買う

気の迷い身代り不動の札動く

御先祖は子授け頼み矢田地蔵

年一度子安地藏へ礼詣り

デイサービスあだ名で呼んで心引く

泉佐野市 備後三代子

サンキューと満更でない老いのチョコ

雀語で早く起きてと春の唄

モデルハウス手の届かない他人の家

内風呂にゆったりと入る至福者

初出勤化粧ばっちり食事抜き

交野市 森本益弘

孫怪獣布団に地図を画いて逃げ

大阪五輪地下の飲み屋が待っている

鬼は外声張り上げて二三粒

来年も元気に撒くぞ福は内

もうチョコをくれそうにない女と住む

寝屋川市 岡本 勲

短所には触れずに長所褒めてやり

無礼講調子にのつて左遷され

イエスマンいつも笑顔をたやさない

デメリットもあつてあの人好かれてる

すんなりと無職と書けぬ定年後

豊中市 みき わきみ

くちばしを入れるお前が出たらどう

新成人おれはそのころ弾丸の下

不況もう勘弁してくれこの辺で

年金は払う時には痛かつた

馬齢八十日々塞翁が馬なりし

吹田市 穴吹 尚士

メールなら息子も悩み言つて来る

二〇〇〇年暮らしが変わる気配なし

去り際の辞儀そそくさと通夜の客

正論で流れが変わる時を待ち

日の丸は表彰台が似合う旗

高槻市 西谷 治三郎

サポーターつけ足袋を履く大相撲

大陸を歩いた足も老い進む

あくびしたとたん目が合つてれくささ

誤作動用六甲の水きょうも飲む

さよならを二回も言つてまだしゃべり

尼崎市 内田 美也子

非常口いつも気にしてひとり旅

とび込んでみたいと思う冬銀河

バレンタイン恋のきざしの春の風

梅だより約束ふやす電話口

伊丹市 延寿庵 野鶴

北風に耐えるポストが白い朝

カニの目がうつろにわたくしを覗む

雪しんしん切り口青きメロン喰う

飽食の谷間に飢えるホームレス

姫路市 北条 てる代

口裏を合わせた所から縛れ

ゼロ一つ見落としていたお買い得

笑い顔少うし増えて忌が明ける

この人と漕ぎ出す二十一世紀

神戸市 木村 忠義

好きだから素っ気なくすることもある

大好きな人の風邪なら貰います

頼まれて知らん顔する難しさ

なぜだろう妻の頼みをよく忘れ

川西市 西内 朋月

お正月ベビーギャングが押寄せる

貰うまでぐずぐずしてるお年玉

汗出さぬ人には来ない残り福

お受験に大変でんな言う他人

宝塚市 飯西ミサヲ
老いたとて負けて勝つのは至難技

月だけが恋の失敗聞いてくれ
控え目が良いか悪いかおーいお茶
遅かった好きと言うのに半世紀

兵庫県 山本泰子

計画を無茶苦茶にして夫逝き

から元気血液検査でばらされる

老いたねと息子が言うから認めます

暗譜した乙女の祈り今おぼろ

鳥取市 谷岡清子

田舎家へのびのび暮らす平和づけ

飯台のみかんにらまれ転げおつ

老梅の底力やな花一つ

税務署員やさし地獄に仏なり

鳥取市 福島庸二

旅先の足どり拾う朱印帳

待ちぼうけ頬を冷たい風が抜け

フレッシュに人と草木が躍る春

充実の楽しい時はすぐ過ぎる

鳥取市 河田のり代

白無垢の妻も次第に泥まみれ

ジョギングでぐったり疲れ遅刻する

人は皆やがてを信じ生きて居る

鳥取の自然良い子を育ててる

鳥取市 横田春名
悩む子よこの指止まれ輪になろう

しょんぼりとする児に言葉甘くなり
ふと読んだおくやみ欄に夢のあと
やじろべえ今日は私が軽くなる

鳥取市 山口千代子

鏡に映る私の影も老いて来た

深い慈悲傘寿過ぎても病みもせず

愛着のこもった古着捨てきれず

久し振り晴天だから布団干す

米子市 森脇麗

テレビ見る時間が多くなった夫

花びらを浮かべてみたい桜風呂

色白の美人と言われ荷が重い

親の敷くレールに乗らぬ子の自立

米子市 小塩智加恵

黒梓は十年前に撮った顔

どこからかコレステロールついてくる

安値札重ね貼りする冬商品

披露宴内緒で買ったスーツ着る

鳥取県 加藤公子

震災の六千本の火がゆらぐ

手帳には記載できないスケジュール

白蓮の固いつばみに細雪

義理チョコにつくり笑顔が添えてある

鳥取県 河本照子

さよならを言うタイミング考える

人間に丸みが見える下り坂

斜め読みして回覧を持って行き

伝言を置いて一日羽伸ばす

鳥取県 平井栄翁

保母さんに解る家庭の砂糖づけ

節分を待つ居れない露のとう

除夜の鐘聞けば心が改まる

蟹コース財布に聞いているからにする

鳥取県 山岡久枝

その度に螺子を巻きつつ考える

ガチガチの手足労り温泉に

よい話胸の手帳に記しておく

熱爛にガチガチ男和みだす

鳥取県 田村邦昭

初披露それからの句に春を見ぬ

人情を宅急便がつれてくる

ぬるま湯に浸かった垢がおとせない

こんなにも一字を悩む趣味がある

倉敷市 家守政子

風邪引いて嫁との距離が近くなる

風邪引きへみやげ鼻紙ふた袋

太陽のような赤子が生れ来る

困ったことだ裸で嫁に来いと言う

岡山県 土居ひでの

プライドを捨てた男の手弁当

一本道歩き疲れた弥次郎兵衛

栄転の単身赴任が笑えない

ロケットを何度揚げても失敗し

松江市 小川注湖

写真にはいつも真ん中いる女

気になるは壁の向こうに住む人よ

恐ろしや地震臨界保険金

書道展わかった顔で長く立ち

松江市 松浦登志子

パソコンの指示するとおり申告し

母の手が黄色に染まる冬の夜

牛肉を豚にして買う春の花

今日も雪カニ雑炊に芹散らす

出雲市 榎ミツエ

木枯らしが冬の名曲奏でてる

散歩道白いカーテン大根干し

掘炬燵兄弟げんか懐かしむ

ばたん雪どんどん積り花となる

出雲市 伊藤玲子

吹雪いてるママに太陽要るようだ

薄っぺらな心上げ底だったのか

他愛ない話喜ぶ老母という

冬ごもり命に油差しておく

難病に新發明が待ち遠い

島根県 松本聖子

新調の背広だぶだぶ病みあがり

ほとぼりが冷めたらあれは何だっけ

どうみても此の人だけはにがてです

島根県 毛利幸

二千年天空辰が空駆ける

運命に翻弄されて生きている

今はもう後振返る道はなし

真っ直ぐな道が嫌いなへそまがり

島根県 多々納テル子

衿もとへスカーフ派手に老いのしやれ

追い風に老春謳歌するブーツ

コーヒーの香りの中でひと休み

お手玉へ昔のリズムとりもどす

香川県 清川玲子

盆栽の松に余生の日を刻む

ケイタイの笑いに車内の目がにらむ

年金の財布に似合う旅に出る

寝てる間に暦はしかと二千年

香川県 瀧井勝

定年の素足大地を踏みしめる

生かされてまた巡り逢う梅の花

お互いの弱みを知ってからの仲

梅一輪春のロマンを先駆ける

燃える色消さず椿のデスマスク

愛媛県 黒田茂代

いただきます御先祖様も一緒に

日の目見ぬけれど大事な足の裏

もう誰の指図も受けぬはぐれ風

宇部市 高山清子

残り火を燃やす傘寿の赤い爪

思いきり泣いて彼への未練断つ

泥酔を見てから老いの恋も冷め

娘は巣立ちひな人形は忘れられ

唐津市 岩崎實

損すると思う仕事のはかどらず

ポケモンカード押っ取り刀で発売日

探し物思わぬものが顔を出し

巣づくりの小枝集めるカケガラス

榎原市 居谷真理子

何ごともなく高野炊く誕生日

祝い酒ぐらりと酔って闇を見る

不機嫌な下戸はむやみにみかん食べ

奈良盆地寒の仕事の多いこと

榎原市 西本保夫

有難い思う気持ちの心づけ

心づけ妻の喜ぶ顔がある

してよかったキラキラ光る歯が笑う

もうこれで妻は何でも食べられる

京都市 勝山 美千代

鬼払う声無き町の鬼の笑み
甘くみた風邪に三日も寝こまされ
飾ること無縁に生きて喜寿もすぎ
大根足家族支えてまだ元氣

和歌山市 和田 美寿子

運がない人で成立つ宝くじ
何時の世も殿をあやつる部下がある
宴会のかくし芸から名がうれる
ボケベルを鳴らして今夜デイトする

和歌山市 武本 碧

煩惱を鎮めるようにぼたん雪
赤い色好きで黒子になり切れぬ
あなたへの恋の巻紙エンドレス
ポイントを過ぎたあたりで気付く罪

和歌山市 福重 美子

一人病みバランス崩れ出す家庭
春休み孫より先に着替え着き
リサイクル他国で元氣古ミシン
ペランダの靴に感謝の大地震

和歌山県 中村 君枝

神のてのひらで人生あやつられ
忠告も素通りしてる風の向き
浮かぬ世に相談事が多すぎる
飾り気のない一言が胸を打つ

横浜市 布山 嘉信

老いて子に従う子等は遠く住み
語尾上がる妻の逆鱗さけている
企みを隠す指し手はそつと指す
酌み交わす嫁の第二子まだらしい

横浜市 荒井 広和

出無精の羽化を促す花日より
言訳の涙に出端控かれる
終章の花道託す妻が居る
雑字を褒め町会の役頼み

横浜市 生坂 サト子

湯島の地学問の脈引き継がれ(吟行湯島聖堂)
お局の偉業に見合う名が街に(吟行春日局菩提寺)
誤作動をせぬよう夫のメガネ拭く
一丸となった綱引き沸きに沸き

横浜市 平達 也

階段が難所となつて老いが来る
病む身でも忍耐力は強くなり
病窓を澄んだ景色が慰める
外出は出来ぬが夢で楽しめる

横浜市 伊藤 ふみ

登竜門潜れば絵馬の壁に会い
夢の椅子バブルの泡と消えていく
土壇場に慣れて図太い肝となる
定年後早起き散歩好きになり

横浜市 保田 絹子

義理チョコに一瞬妻の目が光る

コンビニの灯が独り身に暖かい

安直に這入り出口で迷ってる

姿見に百面相のストレッツ

東京都 清原 悦子

歳月に流されていた悩みごと

二日目の鍋はうどんの一人膳

別れ際励まし合った里帰り

吹っ切れて日記書くこと忘れてる

東京都 吉田 土風

独身ですと口説いて回る罪つくり

古い傷持出し妻は責めてくる

古傷は出世と共に暴かれる

郷愁を深く感じる年となり

静岡市 増田 扶美

兎の矛盾祖母はにこにこ耳を貸す

嬉しくも淋しくもあるクラス会

会うたびに友の歩幅がせまくなる

迷わずに軽い方持つ友の足

浜松市 岡本 まち

ピツポツパ老細胞を刺激する

凍る月そつと願いをかけてみる

春なのに心すぐれぬ季節病

針供養する程針を使わない

日立市 加藤 権悟

正夢となつてしまった前後賞

スタートはしんがりだった亀の自負

ひよどりの大食漢にただ呆れ

ミレニアム昇る太陽への讃歌

青森県 富士 トキ

川柳塔と肩を並べて寝ています

振興券もらったことはもう忘れ

リストラの再職家族に見送られ

シクラメン今日も一日無に過し

秋田県 湊 修水

主義主張選挙目当てが見え見えで

年金が年金の親介護する

匙加減むずかしいぞえ介護法

雪除けの汗を知らない雪見酒

高槻市 左右田 泰雄

降り立てばレトロの灯ともる駅

空缶が一つ転げて汽車を待つ

危ないと声かけられてすくむ足

不景気の迷路はどこも行き止まり

高槻市 乙倉 武史

匿名で本音を晒す投書欄

赤飯をチンしてわびし誕生日

好きなようしなはれ妻も匙を投げ

トンネルの出口見えない低金利

高槻市 江原秀夫

墨の香に心の和む朝の筆

豊かさに酔ってボタンを掛け違い

テクニクよく知ってるが下手は下手

天国を思いちびちび一人酒

高槻市 執行稲子

埒あかぬ相談聞こえぬ振りをする

ボージョレヌーボーも粋に着替えて二千年

頭文字でページを埋めた愛いずこ

母と娘がラッキー同日バースデー

吹田市 須磨活恵

躓いてはつと聞こえた神の声

川柳で心点描日々描写

春が立つ自分と向き合うこともよし

獅大根雪ふるさとの母想う

門真市 矢阪英雄

潮騒と魚商う老夫婦

柑橘の暖かき色猫眠る

蛸焼きの小さな宇宙回転し

湯葉の膜冷え唇に絡み付き

寝屋川市 井上すみれ

老いたりや文明の利器さわられず

たかが飲屋されどつづいた八十年

ご近所の風呂屋無くなり寒い街

名が売れてゴシップ派手に走ってる

大阪市 亀井円女

肩の荷がやっと下りたと亡母にTEL

片手でも掬えるほどの幸でよい

節分に鬼より自我を追出した

夢だけは人に負けじと二〇〇〇年

大阪市 中村忠敬

猫嫌い猫かてそんな人嫌い

人間と思いきんでる猫を飼ひ

スタートの二千年だが定年に

自己主張強そうに泣く二歳の児

大阪市 辻川咲

夫という宝なくしてもう五年

外出にすこしおめかし紅をさす

郵便受けコトリと音のするの待つ

ドラマ見て泣いてる私とおしい

大阪市 中村叡子

サミットの前に視察と沖繩へ

感無量みんな一族喜寿の宴

中流の意識だんだん遠い世に

老いました痛いところや痒いとこ

大阪市 大川道子

フォアグラもキャビアも食べず嫌いです

居候きつちり帰る夕餉どき

欲の数減らして笑顔ふえてくる

怒ったが本音はとうに許してる

あこがれたひとの不幸は語るまい
大阪府 尾崎 黄紅

女の棘は薔薇よりも鋭いで
渋柿の頃を干柿語らない
地獄酒極楽酒に混む酒場

大阪市 中井 正秀

自販機は皺を延ばせと突返し
新聞ほど金が貯まれば良いのにな

この歳で反省ばかり太鼓腹
女房にFA宣言告げられる

八尾市 中島 春江

内科歯科整形眼科つかれます
こんには愛想よく言い誰だっけ

食べ放題カニ殻山に笑顔です
輪切りしてたしかめている脳の無事

羽曳野市 川口 信子

手鏡が笑い出すほどハゲてきた
人生のネジをなんども巻き直し

気がつかずまるめられてるほめ上手
料理教室肩書とった男たち

和泉市 横山 捷也

新築に一人住いの古希の坂
恵まれた体力定年もて余す

筋道を変えてて人生面白い
絵はがきに書ききれなくて電話する

岸和田市 不破 仁緑
ガンダロと山姥たちに鬼も逃げ
議事堂が油切れして軋む音

杉花粉飛んでるテレビ見てくしやみ
投票も行かずに文句だけは言う

岸和田市 亀井 皎月

広告の美人わたしを見詰めてる
無理をせぬこと古希からのターゲット

意識して末席ばかり狙う歳
クラス会来ぬは逝ったと聞くつらさ

泉佐野市 稲葉 洋

春の陽よ老いにも隔てなく照らせ
ハーモニ―破調が目立つ歳となり

妻逝ってソロで奏でるフィナーレ
もう後にひけぬイントロ鳴りだした

大阪府 澤田 和重

インフルエンザ僕に体罰あたえてる
ボケ子防してます辞書と万歩計

家計簿に妻の不満が伏せてある
新年会社長が明かす胸の内

大阪府 小栢 こずえ

赤いバラトゲがあるのに魅せられる
目に見えぬ不思議な糸にあやつられ

孫娘つぼみ日毎にふくらんで
六十路すぎ迷った蕾咲きはじめ

今治市 野村清美

カーテンを降ろして部屋へ閉じこもる
水平線でつかい海の曲がり角
冗談に本心少し混ぜて言う

松山市 山之内 八重美

義理の帯といてつくづく我が家の灯
いい予感朝の茶柱花をいけ
憧れの祖国でいいやす孤児

宇部市 中田忠夫

年金の日を忘れずに孫が来る
ミサイルを日本に向けて米ねだる
缶ビール妻と分け合うだけで済み

福岡県 岩崎和女

これ以上かくせぬ尻尾もてあまし
若者のパワーが欲しい二千年
標的をせばめて洗う捜査二課

岡山県 国米きくゑ

ときめきを抱いて女のかえし針
しあわせな余生豊かな墨を磨る
老人力まだまだ弾む夫婦独楽

鳥取市 宮脇道子

ジョギングに寒波が背中押してくる
淋しさもリズムで飛ばす老いの園
母の煮た豆最高と舌で知る

鳥取市 岡田信恵
極楽は進む時間が早すぎる
食進む体重計がとび上がり
花回廊感動くれた花の道

米子市 猪森 スミエ

モノリザも寄る年波の笑い皺
白黒をはっきり言える他人様
たどたと姉の後追う手毬歌

鳥取県 西冲彰雄

忍ぶ恋伝言板にそつと書く
僕の恋いつも二車線左側
住所録書き足す友がまた一人

鳥取県 藤山弘子

元旦も休まず励む受験生
寝正月許してくれぬ福袋
おもいっきり不況風向け豆をまく

鳥取県 高尾京

日本にも対人地雷百万個
あの世への旅立ち先に延ばしたい
寒に耐え春咲く花の賑やかさ

鳥取県 橋谷静江

父の肩借りて出世の道がつき
仕事終え夜のテーブル盛り上がり
化粧品買うだけバイトして帰る

梅の枝に一句吊り下げ今日は
コッポリの行く音も良し古都旅情
時計の音が静かな闇を深くする

尼崎市 松下比ろ志

枯葉やく煙は風の吹くままに
背伸びして見送った母思い出す

姫路市 勝間タツエ

お正月神話の数かず思い出す

姫路市 服部一典

詳細はホームページを読んでくれ

コーヒーを一つの匙で飲む老夫婦

ネクタイが曲がっている構って欲しくて

伊丹市 檜谷郁子

お年玉ゲーム機めがけ滑り込み

初詣 神様だつてバニックだ

不況風出口こちらと書いておく

川西市 田中喜俊

カタカナ語老人置いてはや変り

老いてなお貸し借りもなくマイベース

精いっぱい画布にぬりたす山の色

兵庫県 西山八重子

一年の計も立てずに寝正月

ライバルに負けぬ明日に火の匂い

スコップを杖に明日の風を待つ

胸痛と相談しつつ旅決める

風邪が来て思わぬダイエツト効果

食べものの美味しさで知る快復度

兵庫県 徳平毬子

雪合戦タイムスリップの絵の中に

静けさを破り近付く救急車

親馬鹿を剥き出しにして若夫婦

松江市 山根邦代

やがて行く道と見つめる羅漢様

過疎文化凸凹道が舗装され

雪しんしん故郷は温い風が吹く

安来市 原煩惱児

晩学の何時しか森が深くなる

善人の願いが星へ届かない

角隠しもう直ぐ母という話

出雲市 岡あきら

どうすればいいかと思う妻が臥す

大あくび妻が相当つかれてる

可燃ゴミ昔の手紙底に入れ

和歌山県 村中悦男

さらさらと枯葉の音で秋を知る

グループで競うグイ飲み若さ誇示

老いの身に邪魔な肩書捨てました

滋賀県 中宗明

趣味の会休み時間によく笑い
節分の豆で歯医者に通う羽目
売り場では小さい家具が大きすぎ

春の夜足組み替えて君を待つ
暖かし妻が子猫と話す声
南極のオゾンの穴から見る地球

遺伝子を組み換えた豆鳩も逃げ
賞味期限味は変わらず値が変わる
あっそうか振り返ったらそこに居ず

美人には似合ってるけど同じ柄
通リゃんせセールへ財布急ぎたてる
膝痛を忘れて走る黄信号

八尾市 山梨雅子
静岡市 大村正雄
大阪府 伊藤博仁

八尾市 高橋明子
大阪府 星野きらら

八尾市 井尻民子

八尾市 井尻民子

八尾市 井尻民子

八尾市 井尻民子

八尾市 井尻民子

八尾市 井尻民子

おはようと音符のような若い息
うれしさが生きる基準になる余生
リストラが道路の端を通ってる

八尾市 鷲見章

節分や心の鬼を追いはらう
昼食がすんでニュースを聞くベッド
旧友からとどく年賀のうれしさよ

凛として人待ち顔の寒牡丹
売れ残り巧みに買わず福袋
再会でぱっと開いた玉手箱

松原市 和気慶一

ふなどじょうめだかもおった田の小川
震災の傷跡えぐる不況風
老兵が消えていかない永田町

羽曳野市 永田章司

我が亭主チョコよりおちよこで上気げん
厳冬をたえて梅の香におい立つ
大役を果しぐつすり床に着く

枚方市 二宮紫鳳

この程度なら元気だとしておこっ
温かさ女将もお湯も変わらない
帰り際握手でそっとメモ渡す

豊中市 江見清

豊中市 江見清

同居して孫を要に日々樂し
介護保険矛盾だらけと妻怒る

高槻市 生田 義一

和歌山市 前岡 健三郎

野仏が熊野古道の道しるべ

丑の日の寒に水汲む妻の知恵

倉敷市 森本文子

窓赤く燃やし夕陽の無責任

子が近く難題多く呆けられず

兵庫県 黒崎 美紗子

よく育つ液肥の話聞いてくる

似た人がいたよ待合室で会う

千葉県 大川 晚翠

ロボットにされたあなたはよく動く

植木屋の欠伸がでますいい日より

横浜市 三村 八重子

師の快癒アラーに祈る空の旅

ハウマツチ夫を見直すノミの市

枚方市 大昇 隆広

アメとムチの分量迷う子のしつけ

手は二本自分と他人救う為

吹田市 後藤 志津香

語り合う冬の夜長の掘ごたつ

鬼は外豆撒く声がなつかしい

相撲だけ爺が番組地頭さま
妻の友テレビ出るたびわれを呼び

守口市 井上 桂

東大阪市 今岡 貞人

毎日が初心であると悟る朝

二千年護憲改憲騒ぎだす

岸和田市 木村 正剛

消した過去はじくり返す同窓会

フルムーン気の変わらぬうち行っておこ

第18回東北川柳連盟青森県大会

日時 5月7日(日) 午前10時

会場 ホテル・ニューキャッスル(弘前市)

参加費 3000円(昼食・記念品・発表誌呈)

事前投句(2句) 締切4月20日(必着)

「咲く」 森中 恵美子選

宿題 「活字」ちば東北子選 「探す」坂野 冬眠選

「湖」万 迷多選 「甘い」吉實 井児選

席題 「」佐々木文子選 「」工藤 寿久選

◎各題2句、懇親会・前夜祭・宿泊の詳細は左記へ

投句先 〒036-0387 黒石市元町51

相馬一花 (☎0172-52-3561)

問合せ先 〒036-8202 弘前市元大工町50-5

波多野五楽庵 (昼☎0172-33-6030)

愛染帖

波多野五楽庵選

偏頭痛思い過ごしがまだ続く

富田林市 池 森子

節目には真つ赤な薔薇が咲いていた

シ・エンドとても小さなのど仏

和歌山市 吉村さち子

継ぎ足してくる言葉に救われる

美しい過去だけ胸に棲まわせる

大阪府 一本 勇太

各駅停車父が語っている無題

ふゆ茜老いてはならぬ絵の具皿

富田林市 藤田 泰子

子報では雨のち晴と言った筈

冬眠の扉を叩く豆の音

弘前市 宮崎ヒサ子

満月を描く度少しずつ歪む

口紅の色変えながら妥協する

鳥取県 ささきやえ

のほほんと流れる川にさからわぬ

倉吉市 最上 和枝

寒椿ぼろりと過去は引きずらぬ

唐津市 田口 虹汀

髻だけは剃って来ました面接日

八尾市 宮崎シマ子

胸はカラッポどなたか入って下さいな

和歌山市 古久保和子

バス停に無口な冬が立つたまま

和歌山市 榎原 公子

諦めの笑いからつと後がない

高槻市 乙倉 武史

此の今が大事と思う戸を叩く

弘前市 高瀬 霜石

押しくらまんじゅうみんな原石だった頃

平凡なあすへ小骨を整える

和歌山市 池永 正葡

明治おとこ塩辛顔がともいい

枚方市 海老池 洋

曲り損ねた角に約束置いたまま

日立市 加藤 権悟

追伸の余白に愛をちりばめる

和歌山県 中後 清史

断わりの気配漂わせる電話

倉敷市 家守 政子

人間も猫もおんなじ物を食べ

弘前市 櫻庭 順風

引き出しでマグマの願書涙ぐむ

京都府 稲葉 冬葉

もう春ですな少し我が儘言つて見た

松原市 小池しげお

胃袋にくすりばつかり溜まる冬

藤井寺市 太田扶美代

この絆切つたら少し前に出る

岡山県 富坂 志重

戦中派君が代揺れる世まで生き

大阪市 津守 柳伸

意にそわぬ女が起す偏頭痛

枚方市 寺川 弘一

親近感湧くのは故障した時計

弘前市 一戸 ツネ

かくらつと転げた先の水たまり

尼崎市 長浜 澄子

欠点をすばり指されて身構える

ピリオドを打つに程好い雪の華

吹田市 山本希久子

春のいのちあふれて小川身籠りぬ

底冷えの街振り向いたのは他人

鳥取県 小西 雄々

悲喜劇がすこし人間模様変え

雪女みそぎの事は考えぬ

和歌山市 木本 朱夏

立読みの父の背中が黄昏れる

美しい空き箱ばかり溜まる部屋

弘前市 斉藤 晶

縄を縛う感触にあるふるさとよ

りんご樹の涙ぼとぼと聞こえます

岡山県 小林 妻子

立ち止まる勇氣は提げているつもり

墓場まで独りで行ける訳がない

羽曳野市 吉川 寿美

噂にもならぬわたしも蟻の死も

富田林市 大橋 鐘造

ずっしりと肩に重たい義理人情
和歌山市 福重 美子

人生の裏を覗いてふっ切れた
弘前市 福士 慕情

故郷の海へ続いている海だ
倉吉市 山中 康子

新世紀老人力を買いにい
倉吉市 牧野 芳光

透明な顔が行き交う歩道橋
今治市 月原 宵明

自家用のつもりで眠る終電車
泉佐野市 稲葉 洋

世の風に真向う時と背負う時
海南市 三宅 保州

青信号ばかり続いている疲れ
高知県 桑名 孝雄

終章を書く楷書で毛筆で
米子市 白根 ふみ

新世紀ゆっくり歩幅ととのえる
川西市 松本ただし

紙風船手の鳴る方へ落ちたがる
岡山県 矢内寿恵子

あやとりの橋を渡って来た昔
大阪市 北 勝美

点滴の答えやすやすや眠る妻
弘前市 岡本 花匠

梅一輪薫りを添えて来た手紙
箕面市 岩津ようじ

邪魔になるものではないと貯めている

西宮市 門谷たず子

風花が舞うときこえる亡母の下駄
大阪府 澤田 和重

気にならぬ程度に香水匂わせる
和歌山市 桜井 千秀

逆光を浴びると背伸びしてしま
川崎市 和泉あかり

八起き目が出来ぬタルマの電池切れ
鳥取県 石谷美恵子

松葉ガ二本籍問えば口ごもり
米子市 木村 春枝

度肝抜くニュースの続く不整脈
今治市 野村 清美

何となく春の息吹にくすぐられ
貝塚市 池田寿美子

パッチリと眼が開きそうぞ森へ行く
和歌山市 川上 大輪

途中下車して幻影を追うてみる
岡山市 大森 純子

どんぐりでいる輪の中に居たいから
香川県 成重 放任

人柄の良さ似たものの夫婦です
弘前市 高橋 岳水

引き出しの奥でまどろむ相聞歌
大阪市 三浦千津子

世話焼きへ見せてしまった泣きばくろ
砂川市 大橋 政良

紙を裂くように裂きたいくもり空
綾部市 藤田 芳郎

二番目も煎じて神の沙汰を待つ

三重県 佐々木森哉

さらば皆の衆 魂星になる
横浜市 田中 笑子

引つ越しの邪魔になつて本々の山
唐津市 仁部 四郎

世間より体内時計信じよ
唐津市 井上 勝祝

美辞麗句非才晒しただけのこと
唐津市 樋口 輝夫

二日酔わが家に非常口が無い
唐津市 相葉 あき

七五三の中に四人の孫が居る
唐津市 宗 水笑

連立を時たま替える嫁姑
唐津市 久保 正剣

介錯が欲しくなつたらどつしよ
青森県 西谷 大吾

跡継ぎができてばっこり福寿草
今治市 塩路よしみ

森深く迷い聖書を読んでいる
鳥取市 上田 宣子

くちびるを小さく開けて死んだ振り
大和高田市 鍛原 千里

老将のよろいの下は傷だらけ
鳥取市 録沢 風花

品切れになつたらしい脳細胞
八尾市 村上 剛治

もう誰も鳴らしてくれぬ胸の鈴
八尾市 村上ミツ子

空っぽの引出し前に思案中

岡山市 井上柳五郎
ほめ言葉貰うてからの立志伝

大阪市 神夏磯典子
ストレスを抜けて私らしくなる

富田林市 片岡智恵子
相変らずという安らぎに生かされる

富田林市 中井 アキ
つるし柿昔はでかい夢をみた

豊中市 田中 正坊
きさらぎや軍刀をまだ持つている

大阪市 榎本 露児
女偏僕はとつくに捨てました

米子市 木村富美子
閏年逢える約束など出来ぬ

高槻市 傍島 克治
私には曇り鏡がふさわしい

米子市 門脇 晶子
善人に貸した家だが出てくれぬ

愛知県 早川 盛夫
果物になれぬトマトの独り言

鳥取県 土橋 螢
雪が降るおそらく逢えぬかも知れぬ

今治市 野村 京子
留守電の向こうに寒い部屋がある

藤井寺市 高田美代子
笑えないコントが一つ売れ残り

和歌山市 楠見 章子
風向きが変わる三軒両隣

米子市 政岡日枝子
何もかも耳をふさいで無色なる

堺市 志田 千代
幸せで雲に御無沙汰しています

和泉市 横山 捷也
骨壺に拾って恨みまだ残り

奈良市 米田 恭昌
背信の余熱を抱いて終電車

西宮市 奥田みつ子
三角は三角のまま生きてゆく

寝屋川市 平松かすみ
自分のは信じたくない占い師

岸和田市 井齋 一齋
ネクタイの柄で行き先感じ取る

鳥取県 西原 艶子
ペン立てに書けないペンが多くなる

羽曳野市 酒井 一壺
根回しの出来た会議が進まない

藤井寺市 中島 志洋
明日定年賞罰なしの幕を引く

鳥取市 植田 一京
瘦せ細るほどの恋などしてみたい

松江市 小川 注湖
宝くじ独り笑って見たいもの

倉吉市 野口 節子
ひよんなことから他人の荷物まで背負い

鳥取市 岸本 宏章
二日酔さめて約束思い出し

鳥取市 岸本 孝子
妻の愚痴煮つめて食べて五十年

海南市 谷口 義男
擦れ違いばかりして居る運と金

香川県 木村あきら
一戸建て背負って重いかたつむり

尼崎市 田辺 鹿太
足踏みのミンシンの音は母の音

横浜市 山下 省子
結局は今年もやはりケセラセラ

鳥根県 伊藤 寿美
矢印を信じて峠越えた道

八尾市 吉村 一風
油きれかけうろたえている夫婦ゴマ

唐津市 山門 幸夫
思い出のへのへのもへじ床柱

宇部市 平田 実男
言い訳を思いつくまで叩くパフ

大阪市 本間満津子
道聞けば舞の手つきで教えられ

青森市 漆戸凡々子
牛乳の育児で牛になった夢

寝屋川市 森 茜
古戦場吹雪いて寂として眠る

堺市 小西 小雪
着膨れて春一番を待ち焦れ

倉吉市 淡路ゆり子
ぼろぼろと嘘が零れる朝帰り

八尾市 高杉 千歩
多数決勉強不足が手をあげる

尼崎市 春城武庫坊
抱き合つたかたちでセーター干されてる

八尾市 高橋 夕花
売れのこるヒナ人形も美人なり

大空のくま

(111)

橋高薫風

広辞苑の日章旗の項には「わが国の国旗とされている日の丸の旗」とあり、赤い丸の大きさや白地に占める位置の規定など細々と記し、「一八七〇年（明治三）の太政官布告で商船規則を制定し、旗の規格を定めているがこれを国旗とする明文はない」とある。

それで戦後も長らく曖昧な理由で袖にされていたが、このたび君が代と共に国旗・国歌の明確な存在権を得た

次は昭和12年1月号掲載のものである。

国旗のウラおもて

たかを・あきを

どこの国の国旗でも裏表があるもの、外国のそれはよく見分けがつくが、日本の白地に赤い「日の丸」は左右も裏表も判然しないから一寸困るようである。日本人全体がまだ国旗に対する觀念が他の国人のように明かでないのは遺憾千万、万国に比類ない国柄だけに一層、国旗に関する知識を一般化し正しい諸儀礼をも定めておきたいものだ。

七八年前、今は市になった豊中の克明小学校で正月元日の拝賀式の時、Kという一学務

員が沢山な生徒の集っている席上で、国旗掲揚の方式に就て校長に面罵した事があった。

その学務員の言うのには——二本の国旗を出す時はいつも交叉すべきものである、それにこの学校の門には左右に二本ただ差し立ててあるのは、どうした事だ。教育者ともあろう者がそれほど心得がなくて勤まるかと。

ところがその時の校長も国旗に関する正しい知識がないものだから、その時は無念を耐えて黙っていたが、あまりといえは自分の教え見らの面前で恥をかかされ、残念でたまらず、すぐ大阪府庁にかけつけ学務課に相談に及んだが、そこでも明確なことは判らず、悶々に暮らしていたところ、この事情を聞き知ったわたしら同志のものが作った国旗宣揚会なるものが、国旗は交叉する方が却て過り（国際的には別として）で校長のやり方が寧ろ正しいのだ。然し間違つたからとて、これを罪にする法律は作られない。これは明治大帝の有難いお思召しによるものと宣明してやつたので、校長は大よろこび、半可通なその

学務員は平あやまりに陳謝し自らその職をも辞したという。これらはどちらも国旗に関する知識が足りなかつたから起つた事件である。さて国旗のウラおもてを定めるのは、つまりこちらから向つて左の方に棹があり、その左から右の方へ横にいれるのが本体なのである。（詳しい割出の寸法もあるが略す）ところが、この正しい方式から見ると、あの朝日新聞の社旗になっている六本の光線を放つ日の丸に「朝」の字を現わしてあるのが全く旗のウラおもてを理解しない時代の産物で、まことに不都合千万だと、私はその社に在職中度々忠告したのだけれど、どうしても改めようとならない。妙に頑固な社だ。

ある人が曰く——甲子園に、あの野球大会が続く限り社旗の違法は改めないよ。何故なら甲子園の夏は大概西風が多い。万一改めたが最後、外野から各スタンドの屋上に立てた社旗は右から左へ流れて「朝」の字が悉く裏返しになって頗る縁起が好くないからさ——と。文章は以上で終りになっているが、筆者がジャーナリストであるので国旗から裏表論になつて興味がある。星条旗、三色旗、それにユニオンジャックにしろ殆んど裏表ありだ。若い人が日章旗の日の丸をハート形にしたらと言つが、上下裏表のない方が平等で良い。

尚音のむ

宮西弥生選

もろもろの人生を踏むクツの裏

脈のうつまでは女でいたい欲

差が出来た日の雑巾は白のまま

中心がだあれもない核家族

おにはそと鬼はそれからどこへ行く

ライバルと言う素晴らしい拠り所

欲ばりで人並み程はもの足りぬ

継ぎ当ての堪忍袋持ち歩く

いつも春逃げたいものは何もなし

梅一輪いのちの話でもしよう

大声でおんな独りの鬼は外

紅バラを妬けば私の負けになる

白髪に命通わせまだ走る

立ち止まるそれから先を見たいから

つらい目に遭つてる窓の半開き

少し欲あつて今日の日頃張られ

会者定離白い椿が地に落ちる

台所も知った本音のおつき合い

八尾市 井尻 民子

鳥取県 石谷美恵子

富田林市 中井 アキ

和歌山市 福本 英子

横浜市 川島 良子

出雲市 園山多賀子

藤井寺市 高田美代子

倉敷市 小野 克枝

富田林市 池 森子

吹田市 山本希久子

富田林市 藤田 泰子

羽曳野市 徳山みつこ

松江市 銭山 昌枝

和歌山市 桜井 千秀

鳥取市 徳田ひろこ

尼崎市 内田美也子

西宮市 門谷たず子

堺市 志田 千代

人間を浄めるように雪が降る

もう十円あれば本音が言えたのに

ほどほどの艶に酔つてる皺がある

ゼロいっぱい付いた慰謝料くださいな

噂話へびくびく動く猫の耳

カタカナが増えておかしい日本語

太陽の匂いがしない冬トマト

バーコード付けて私を売りに行く

三角や四角いるからおもしろい

笑顔する笑顔返して欲しいから

うぐいすがやはりいいねと梅の私語

仕事場に立つと私に似合う紺

ばたばたするな言うて手伝つてもくれず

約束が生きる力となつて冬

欲望の川へ流した罪の数

ふっきたららしい眉間のすじ消える

なんにも知らぬ方がよかつたその方が

心なく石は重さで転ぶだけ

客ひとりおろして無人駅は雨

美辞麗句きちんと言えてやや老いる

横になる事を忘れた腹の虫

鳴きやまぬ犬よ握手が欲しいのか

味噌汁の湯気が無風に揺れている

朗報は一筆花を描きそえて

懸命に積んで崩して子の積木

大和市 神夏磯典子

大和高田市 鍛原 千里

鳥取市 坂田和歌子

東大阪市 北村 賢子

和歌山市 福井 桂香

寝屋川市 平松かずみ

鳥取県 西原 艶子

米子市 林 瑞枝

西宮市 西口いわゑ

鳥取市 植田 一京

和歌山市 武本 碧

米子市 鷺見 正子

八尾市 村上ミツ子

和歌山市 中川 楓

大阪市 稲本 凡子

寝屋川市 森 茜

羽曳野市 吉川 寿美

池田市 栗田 久子

鳥取県 さえきやえ

藤井寺市 太田扶美代

岡山県 矢内寿美子

松江市 安食 友子

和歌山市 榎原 公子

和歌山県 坂東 和代

倉吉市 米田 幸子

何もかも知っていますとコンパクト
 論すより論されること多くなり
 春愁に詩集広げてみたとても
 悪夢消す雨なら両手受けましょう
 道祖神の首乗せてある春の坂
 手袋を片っぽ無くし春のうつ
 地味婚というお祝いも地味にして
 弟に負けてやろうかジャンケンポン
 あれ以来だあれも来ない公園に
 目の範囲みんなやさしい風光る
 財産は子供と言った母の骨
 お金では買えないゆたかなるころ
 人の世はなぜがあるので疲れ果て
 丁寧なお料理ですが無味無臭
 少子化の波にかすんだ未来図よ
 若者にピアスの似合う顔増えて
 新世紀へ生きる余白は趣味とい
 おしゃれして母も小さな鈴ならす
 春近い暗示で走る筆の先
 確執へ花はだまって散ってゆく
 言い勝った後でだんだん虚脱感
 二千年だんごの歌が遠ざかる
 飴玉が無言の仲にうち解ける
 ミレニアム未完ひとつを引きずって
 血の絆時々水を差しにくる

横浜 秋元 和可
 米子 小塩智加恵
 西宮 奥田みつ子
 鳥取 田村きみ子
 鳥根 伊藤 寿美
 八尾 宮崎シマ子
 尼崎 春城 年代
 米子 政岡日枝子
 八尾 高杉 千歩
 松江 川本 畔
 八王子 播本 充子
 鳥取 土橋 睦子
 伊丹 榎谷 郁子
 寝屋川 岸野あやめ
 米子 木村富美子
 寝屋川 堀江 光子
 八尾 生嶋ますみ
 八尾 高橋 夕花
 富田 片岡智恵子
 横濱 近藤 道子
 和歌山 上地登美代
 鳥取 録沢 風花
 横濱 保田 絹子
 岡山 山本 玉恵
 和歌山 山口三千子

北風の愛が咲かせた紅いバラ
 再びの恋は小梅のひとつほど
 何年も知らずに食べていたなまこ
 煮こごりの角ゆっくりと解けて春
 一期一会野花を汚すラッピン
 まあきれ地球を汚すラッピン
 大根が美味しく煮えて寒の夜
 楽しげな首はリズムをとっている
 命の灯たやすく風にさらさない
 外反母趾とうとう足が謀反する
 恙なく暮れて佗しい一里塚
 大寒に地蔵も毛糸帽被る

香芝 大内 朝子
 藤井寺 鴨谷瑠美子
 和歌山 杉山 精子
 大阪 米澤 俣子
 今治 塩路よしみ
 岡山 大森 純子
 具塚 池田寿美子
 芦屋 黒田 能子
 倉吉 山中 康子
 岡山 撰 喜子
 大阪 津守 柳伸
 横濱 清水 潮花

民子さんの句―人生を堅実に歩んだ作者の姿勢が、句全体で
 理解出来る。「もろもろの人生」の中味には前向きに生きた強
 さ、不動の姿勢。「クツの裏」は情性も気負いもなく明日への
 希望に橋をかけたそのもの。特に「クツの裏」が光っている。
美恵子さんの句―人生八十歳とは言え、昨今は百歳を目指す女
 の人生に幅が出来た。「脈のうつまでは女でありたい」脈々と
 して流れる動脈の音が力強く聞えて来る。一度しかない人生、
 どうか健やかにありますように。**アキさんの句**―細やかな作者
 の心理描写、下五「雑巾の白さ」は敗北を意味するのだろうか。
 雑巾は汚れてこそ女の誇りが生きるとも言える。うまく雑巾に
 例えたものである。**英子さんの句**―「中心がだあれもない」
 の上句で家族の構成を表現。うまい句である。父権のない家庭
 の自由奔放に満足を感じているのだろうか等と案じるのは私だ
 けだろうか。

キッチン

村上ミツ子選



おふくろの味のことと鍋の歌
 キッチンで嫁と姑の笑い声
 キッチンでふつふつ煮える愛煮える
 包丁の音湧えている喜寿の老妻
 キッチンを駆込み寺にする喧嘩
 母の日も母が蛇口をあける音
 まないたのリズムは母の唄になる
 キッチンに一番近い主婦の席
 キッチンがよく弾んでる給料日
 キッチンからハミングが出る合格日
 すぐできるキッチンがあるテレビ局
 定年のぼくを待ってた台所
 キッチンに試されてる妻の留守
 改造のキッチン老いを寄せつけぬ
 キッチンに女の花が咲いている
 キッチンに立てば生き生きし出す妻
 キッチンに立つと素直な妻になる
 キッチンに妻がいる日の安堵感
 思い切り蛇口ひねって流す鬱
 ラップでチンキッチンママの休憩所
 キッチンでやること終えて書く日記

深雪	柳弘	愛論	幸夫	鐘造	政良	権悟	俣子	清史	典子	宏章	強一	ちかし	玉恵	狸村	義男	慶一	たす子	周信	民子	寛子	章久			
タイマーを揃えキッチン忙しい キッチンに夫とときどき留守がよい キッチンへ当番制の共稼ぎ キッチンに均等法と書いてある 組は旦那の癖も知っている コンピニの惣菜皿に盛り替える キッチンに夫が立つと高くつき キッチンで殿様料理定年後 キッチンで妻の指図を受ける粥 流感の妻に慣れないう七分粥 おばんざいことと母の台所 キッチンが知ってる母の泣き笑い キッチンという名で母の天守閣 キッチンの妻に賞状贈ろうか 煮豆コトコト女の城は温かし	佳	キッチンハミング恋をしてるらし 单身赴任背広のままでキッチンへ 妻逝ってからキッチンが乾きだす キッチンの伝言板に叱られる キッチンへ百点の子が見せに来る 人	満秋	宏	勝美	正剣	水笑	英子	啓子	碧	慕情	潮華	降盛	千里	シマ子	雄々	岡美代子	朝子	鉄治	大輪	緑良	武史	保州	俊子

鈴

須郷井蛙選



鈴つけて厚底の娘が街を行く
 胸の鈴振って自分も確かめる
 鈴つけた猫は私かも知れぬ
 目の離せぬ孫へ鈴など付けておく
 鈴つけに行った男が帰らない
 孫の靴鈴リンリンとコンニチハ
 まだ女鈴はいつでも鳴らしてる
 残り火を抱いて遍路道鈴を振る
 鈴付けに出掛けたままで帰らない
 飽食の猫の鈴からさく呪文
 ガングロも小さい鈴をつけている
 SOS 財布の鈴が止まらない
 私の嘘をみぬいた母の鈴
 巡礼の鈴が四国に春を呼ぶ
 修羅越えて夫婦の鈴が響き合う
 すれ違う鈴が労る遍路笠
 巡礼の鈴は懺悔を消して行く
 迷い道母の土鈴を振ってみる
 鈴の鳴る方へ素直に行ってみる
 鈴付けてわたしの側を離さない
 風鈴が留守番してる過疎の村
 お守りも鈴もうれしいランドセル

英子	ちかし	保州	みね	勇太	花匠	千里	愛論	碧	ツネ	和歌子	清史	一壺	喬水	高栄	益子	ひかる	ミツ子	康子	純子	たもつ
----	-----	----	----	----	----	----	----	---	----	-----	----	----	----	----	----	-----	-----	----	----	-----

いつからか結婚しない鈴をつけ

釣竿に大物らしい鈴の音

ねぶた乱舞浴衣の鈴が鳴り止まぬ

ふるさとの声聞きたくて土鈴振る

妻今も鈴をころがすような声

さい銭をはずんだ鈴がよく響く

胸の鈴揺らして風が通り抜け

ベッドから鈴が鳴らない胸さわぎ

母の鈴きいてどん底這い上がる

竿に鈴付けて昼寝の釣天狗

炎えている限りは鳴らす愛の鈴

再会に胸の小鈴が鳴りやまぬ

タンバリンたたく園児に春の風

風鈴の音色が冴える南部鉄

子等の輪の真ん中で振る保母の鈴

佳

自自公の鈴は不協和音で鳴る

鈴が鳴る財布と小さい旅をする

私をときどき叱る亡母の鈴

死角から聴こえる鈴に身構える

鈴つけた企業戦士の重い首

人

托鉢の鈴に水子の声がある

地

落ち込んだ闇で聞こえたのはの鈴

天

鈴つける話になると皆無口

軸

二日酔鈴の音ささへ逃げてゆく

螢

宵草

慕情

勝視

圭一郎

宏章

鐘造

五月

一風

一齋

時弘

登美

俣子

狸村

岳水

正剣

清芳

重人

銀波

孝雄

アキ

ヒサ子

中島

志洋

のびる

岸本宏章選



落第と言わず卒業のびるらし

ジンスクの髭がのびてるお立ち台

同情の泪でのびる縄ばしご

万物がのびをしている春うらら

春眠の副作用かも髭のびる

深刻な話へうどんのびている

引きのばす返事もしやの夢を賭け

沈黙の陰で正論伸びをする

どうしても噂の方へ伸びる耳

迷ったら真つすぐのびる杉に聞く

よくのびる会社はきはき物が言え

のびる芽を摘むバランスという掟

許されぬこころの爪がのびてくる

のびた鬚もと切りたくなってくる

のび過ぎた耳に虚飾の声がする

派手に翔ぶ娘らにも春の日差しをのび

死角からするするのびるうしろ指

サッパリと着て目立たない無精髭

中流のくらし続けている背伸び

伸びる芽をつんでいないか大人の目

露のとうのびてたしかな春になる

のびきった輪ゴムの中の疲労感

じわじわと命をのばすくすりづけ

背のびして渡る世間に秋の風

均等法のびる婚期が恐ろしい

雲海を突き抜け若い樹が伸びる

定年がのびて父権を持ち直す

お互いによきライバルを得てのびる

のび切ってゴムは反旗を翻す

ウフフフ春の日脚がのびてきた

石筍の一ミリぐらい生きて来た

寒に耐えのびる花芽がまたひとつ

のびる芽を無情に摘んだ罪憎む

触角をのばして損をした話

伸びる芽の空の広さへある祈り

よくのびるように浸しておくジョーク

水草の根つこでのびる母の愛

佳

のびる手は払い女の炎をたたむ

つまらない時間がとても良くのびる

定年がのびて男を磨り減らす

引っ張ったゴム離さない人という

爪も髪ものびる脳死と言われても

人

背のびして受けた拍手の荷が重い

地

一本は奈落へのびるあみだくじ

天

わたくしの寿命がのびるのが怖い

軸

持ち味を褒めれば草も木も伸びる

狸村

幸夫

五月

岳水

鉄治

庸佑

鐘造

美代子

孝雄

睦子

陸花

風花

しげお

可住

日枝子

アキ

雄々

正子

緑良

ひかる

セツ子

正雄

大輪

土橋

螢

初歩教室

題 — はやい

吐 ^は 田 ^だ 公 ^{きん}
一 ^{いち}

祖師麻生路郎が『川柳とは何か』で多読多作について、次のように述べておられる。

「川柳が巧くなるには第一に多読。但しどんな句でも手当り次第に読めばいいと言う意味ではない。人生を凝視した独創的な作品を一句一句批判しながら読み、その句の表現技巧を学びとる。多作はとにかくドシドシ句を作る。常に作句を続けていないと表現技巧上、秀れた句が生れない」

要するにいい句（先輩方に教えてもらい）を多読する。いい句はメモにとり暗誦するほかに読むこと。多作した作品はできる限りよき指導者にみってもらってその批判や講評を受けること。これが進歩の基本といえる。

添削句

○早くても遅くても終点同じ
人生の終点の意であれば

▽急かすともよい終点へ早く逝き

一歩

○子の時と違う早さの時計持つ ㊦八重子

この時計を擬人化すれば『古時計（老人）』

▽若い頃と早さが違う古時計

○聞いたこと又々聞いている老母 正雄

原句では時間の経過が出ていない。すぐ忘れるという内容が必要

▽いま聞いたことも忘れて聞く老母

○吾が余生亀に託してミレニアム 政子

中七が題からやや外れている。

▽吾が余生急かす慌てぬミレニアム

○老人会早くから来て待っている ㊦雅子

早くから来る内容に乏しい。創作すれば

▽あの人に逢える集いへ急ぎ足

○はやいものがちで手にした甘いもの よしこ

もう少しスパイスを効かせて欲しかった。

句意は異なるが

▽タイムサーピス一挙に客の手が伸びる

○早合点して引受けた荷が重く 志重

原句を具象化する

▽早合点した荷が重い保証人

○はやいのが彼の取柄と名を知られ 宗明

下五の練り上げ不足

▽はやいのが取柄の彼で座席取り

○はやいこと時代錯誤に追いつけず 晩翠

原句のままであれば時代錯誤でとなる。

▽パソコン時代老いには早い世の流れ

○はやく効き薬は妻のよい笑顔 禮子

○雪どけの早さ春芽もそわそわと ㊦玲子

○子離を早く出来たと箸一膳 茂代

てにをはの添削三句。格助詞や副助詞

の推敲は大切です。それには何度も句を読

み返してみることです。

▽はやく効く薬は妻のよい笑顔

▽雪どけの早さへ春芽もそわそわと

▽子離れが早く出来たと箸一膳

○はやいとこゆかんとくれあたらぬ 美寿子

句意が少々わかりかねる。思い込みのはげ

しい句。句意は異なるだろうが私なら

▽私より早く逝くなと子の病

○北の国新幹線を待ちわびる トキ

上七になるが上下を入れ代えてみると川柳

らしくなるし、新幹線が強調できる。

▽新幹線を待ちわびている北の国

○通り初めはやく待つ人三日前 輝夫

中七が弱い。

▽通り初めの一番狙う三日前

○暖房のお蔭で蕾すぐ開花 謙次

説明句に陥っている。

▽ハウスの早い開花でよく様子

○計報来たる何故散り急ぐ好敵手 つよし

構え過ぎの感じがする。

▽早すぎる友の計報が身にこたえ

○給料日早い足どり口笛と

栄翁

下五を省略し、家とか飲み屋とか目的地を詠むとよい。

▽給料日赤提灯へ急ぎ足

○気のどくに悪い噂は早く飛び 俣玲子

上五に代えて噂話の仲間を譬喩すれば

▽群雀噂は尾鰭つけて飛び

○歳月も移り変りが速すぎる

志津香

人間を詠んで欲しかった。

▽光陰の速さ身に染む古稀の日々

○早いよりゆつくりが良いローカル線 章司

ローカル線といえはゆつくりが内包

▽新幹線よりもローカル線の味

○せまい国だから急がなくとも早く着く 勲

この句に似た交通マナーの標語がありましたね。毎回いうように着想が大切

▽急ぐ用なくても飛ばす若い人

○土産寿司足がはやいと待たず食べ 初男

下五の待たずが冗長

▽土産寿司足がはやいと宵に食べ

○仇となる知ったかぶりの早合点 美恵子

上五を川柳らしくすると

▽恥をかき知ったかぶりの早合点

○はや五年まだ五年だと大震災

原句の方に軍配か。 賢

▽はや五年春まだ遠い震災地

○注文にはまり一瞬両手つき

徳三

原句では相撲の句とは分り難い。またメリハリをつける言葉を選ぶこと

▽一瞬で優勝逃がすはたき込み

○今更にはやい自分に会わぬ 邦昭

何をしても早く仕事を片付けたら、判断が早かった頃を偲ぶとすれば

▽手早かった頃なつかしむ仕事部屋

○早飯の芸を威張れぬバブル以後 勤

威張れぬと以後に要推敲

▽早飯で走ったバブルのツケのあと

○流行は田舎にはやく届いてる 敬之介

原句は説明句に近い。

▽流行の先端をゆく田舎街

○金のいる話早早姿消す 宏

表現技法の問題

▽金のいる話へ逃げるように立ち

○バーゲンの箸掻き回す手の速さ 尚士

見付けは面白いが

▽バーゲンを探す女の目のはやさ

佳句

松屋町ひと足早く春の雛

あきらめるにはまだ早い脈がある ひさ乃

アンカーの足が見事にテープ切る 泰雄

共稼ぎ手はやく手抜き料理出す 美子

早春の竿うきつきとアマゴ釣り 美弥子

開店セーラーあつという間の特価品 慶一

二人目はあつと言う間で母子元氣 和可

秋の陽の落ちるはやさに気がせて 深雪

頂点の人にすばやく袖の下 彰雄

早ばやとベビー仕込んで玉の輿 トヨ子

はや合点話の腰は折れたまま 煩悩児

早口について行けない老いの耳 君江

チンをして五臓六腑が満たされる サト子

仕事せよせよと時計のはやいこと 西八重子

定年後時計は速く動くらし 純

諦めが早くいてもほぞをかむ 梓

はや夢は馳せて春待つランドセル セツ子

一段と加速がついた老いの坂 美也子

会う度に大きく育つ他人の子 舞夢

花冷えに花もそこそこ急ぎ足 民子

(上手に擬人化を)

手のはやい父の拳がひとりぼち 幸枝

(父の頑固さが)

早口と無口で持たず赤い糸 円女

(夫婦の妙)

気の早い蟻が一匹列乱す 芳江

(擬人法がよく効いている)

はやい朝陽を浴び昨日ふり向かず タツエ

(余韻のある句)

私の句

一炊の夢と終った知事の椅子

本社 三月句会

三月六日(月)午後五時半

アウイーナ大阪

まだ余寒は続くというものの、春の気配がただよう六日、本社句会は百三名の出席を得て定刻開催された。

雛の月であり、お話や選者は主幹を除き、全員女性で占められた。

お話は、華やかにハワイのムーム姿、レイを飾って登場の河内月子さん。ハワイアンに魅せられ、ハワイに憧れ、フラダンスを習熟したと言う。夫の天笑氏のハワイアンに合わせて踊りたかったこともあるとか。

空も海も花も明るく美しいハワイの唄には恋の唄が多い。手振り、手の使い方、ずい分多くのことを表現する。また、レイ、マラカスのような小道具も使うという。最後に一曲、あでやかな身振り、手振りでフラダンスを踊って会場を魅了して話をしめ括る。

月間賞は中澤伽羅さん(大阪市)に輝く。

(司会―淺野)(記名―朝子・澄子)
(受付―保子・希久子)(清記―義)

席題「うっかり」 平松 かすみ 選

- 離さまもうっかりあくびしてしまっ
 うっかりと寝言も言えぬ狭い部屋
 うっかりと賞めたら妻が側にいた
 うっかりと電車賃まで飲んでる
 うっかりは出来ぬ部下まで椅子狙い
 うっかりと寝言に死んだ妻を呼ぶ
 大惨事うっかりしてただけのこと
 地下道を傘さしたまま通り抜け
 居酒屋のうっかりすぐと洩れている
 うっかりとしっかり母に元気です
 うっかりと宛名違えたラブレター
 うっかりと妻にポケット探られる
 一本の葉にうっかり身をあずけ
 うっかりとうっなすいてから五十年
 うっかりとするから愛をぬすまれる
 うっかりと溜めて病院通いする
 うっかりと妻に好きだと言いました
 病院にうっかり行ってはいけません
 うっかりに負けない妻になりました
 うっかりが続いてけむたがられてる
 暇ですとうっかり言って呼び出され
 うっかりと真つ赤な服を買いました
 仁王さんの欠伸うっかり見ました
 乗り越した上に忘れた棚のもの
 うっかりと触るとエイズより怖い
 へそくりを挟んだままでゴミに出し
- いわゑ
 とし子
 靖巳
 一歩
 文秋
 高栄
 柳宏子
 千秀
 保子
 義
 靖巳
 洞庵
 義子
 いわゑ
 洋
 大輪
 岳人
 弘一
 しげお
 茜
 恵子
 扶美代
 タン吉
 洋
 弘一
 寿美

夫だけ残しうっかり逝けません
 桜咲く頃からうっかり病になる
 アリバイの時計うっかり電池切れ
 飲み屋へのダイヤル妻にしてしまっ

住

君の手にうっかり触れてから虜
 うっかりが頭振ってる叩いてる
 餅肌の美人に見とれ乗り越した
 網棚に遺骨忘れる春の午後
 飛び乗った電車が逆に走りだす

人

伊勢参りうっかりお経出てしま

地

うっかりと鬼と仏を間違える

天

札束へうっかり光った眼を洗う

軸

うっかりの私の好きな多年草

兼題「カリスマ」 藤田 泰子 選

- カリスマの過去はべールに包まれる
 カリスマの吐いた煙を吸っていた
 カリスマの背から煙のようなもの
 カリスマがスタータストを唄ってる
 大奥の鈴にカリスマ招かれる
 マジックの鳩出てこないカリスマだ
 カリスマの手が弱点をついてくる
 ずっこけもあるカリスマで親しまれ
 冬大根カリスマの笑みたたえてる
- 重人
 半蔵門
 雅文
 正一
 賢子
 正雄
 正一
 たもつ
 欣之
 哲男
 楓楽
 弥生
 充子
 螢
 千代
 伽羅
 英千子
 房子
 隆盛
 昭子
 義子

善人のボスでカリスマにはなれぬ
 歪んだ月はカリスマのウインクか
 その昔象はカリスマだったのだ
 家族みなカリスマパパの傘の下
 定説 天声銭を集めるすべだった
 カリスマを持たぬ女の大あくび
 カリスマが虫歯で泣いているそう
 月はカリスマ父の顔母の顔
 カリスマ的に妻の子感がよう当る
 カリスマカット女が今を弄ぶ
 カリスマになって抜け殻にもなつて
 おふくろの味カリスマの割烹着
 カリスマと言われて面が外せない
 負の影を残しカリスマ消えてゆく
 カリスマに遠く米とき菜を洗う
 カリスマのお面あちこちから剥ける
 カリスマのタマゴが育つ世紀末
 カリスマに遠い母の煮ころがし
 カリスマのうしろで妻は石を積む
 カリスマの手に痒いとこ狙われる
 カリスマ美容室へ猫も女も足が向く
 カリスマの刹那まつ毛は動かない
 会社ではカリスマ家で子煩悩
 カリスマが撞くと魔球のように跳ね
 カリスマの子言大山鳴動す
 カリスマの一語一挙に揺らく森

佳

正坊 千里 睦子 なぎさ 三男 寿美子 みつ子 しげお 扶美代 恵子 柳弘 ますみ 陸子 楓楽 英代子 美代子 かすみ 夕花 賢子 寿子 瑠美子 弘一 文秋 天笑 天す子

洋

カリスマの暗示信じて橋渡る
 カリスマの背に悲しい詩がある
 カリスマの指一本に靡く葦
 カリスマカット少し流れを変えてみる
 薔薇はカリスマ棘の先まで研ぎ澄ます
 人間を飲むカリスマの熱い舌
 カリスマから逃げる虜になりそう
 フィナーレのライトは公平にあたる
 何処よりも早くあかりを点けて待ち
 雪あかり吊り橋渡らせてしまふ
 六甲の夜景のあかりみないのち
 今日も無事通天閣に灯が点る
 朱雀門ライトアップに浮いた良さ
 古いひとりとあかりがついてほっとする
 いつの間に倒産したカネオンの灯
 コンビニの深夜のあかりほっとする
 いか釣船のあかり旅情をかき立てる
 涅槃像そこにあかりがさしている
 母さんの温もり待ってる窓あかり
 手作りの雛さま飾るほのあかり
 ばんぼりの灯春が見えたり隠れたり
 暗闇に一点神のあかりかな
 駅裏のあかりはとでもあったかい

兼題「あかり」

神夏磯典子選

諷云児 弥生 欣之 扶美代 森子 欣之 充子 満津子 朝子 周信 笛生 昭子 日の出 正一 萬的 路児 風云児 あやめ 希久子 鬼遊 紫香

春の闇視野にはんのりおぼろ月
 愛された記憶にあかり灯します
 うすあかりそんなムードに弱い僕
 寒椿ほんのり浮かぶ雪あかり
 わたくしを叱ってくれた月あかり
 ばんぼりのあかりは春の走馬灯
 屋台の灯行きすりなのに懐かしい
 受験子のあかりへ葛湯運ぶ妻
 わたくし粗を探しに来たあかり
 一隅を照らすあかりのポランテア
 天の岩戸のあかりの欲しい闇つづく
 月あかりあなたが頼もしく見える
 ふるりのあかり失意の目に温い
 一日の終りへ妻が消すあかり
 ありがとそうの一言でつくあかり
 ぼろくそに言うが妻待つ窓あかり
 花あかりみんなそわそわしています
 百万ドルの夜景貧しい灯もまじり
 家中のあかりを点す子の帰省

佳

泰子 睦子 瑠美子 倫子 岳人 朝子 弘一 正雄 美代子 高栄 一風 かりん 金太 大輪 房男 哲花 雅文 正坊 シマ子 いわゑ ダン吉 つつや 欣之 ますみ 千里

天

玄関に電気許してくれている
しげお

軸

アングルを変えてあかりが見えてきた

兼題「姫」 桜井千秀選

うちの姫あぐらで彼の自慢する
照子

お蚕ぐるみ手も足も出ぬ姫達磨
満津子

眠り姫とは知らなんだアロポーズ
充子

かぐや姫の童話聞きたいスズメの子
昭洋

居心地が良くて嫁がぬうちの姫
陽子

姫様のご機嫌を嫁がてんでまり
紫香

ミセスと言わ呼ばれているクラブ
正雄

学園の姫と言われてまだ独り
靖巳

愛してはみたいがキミは姫薊
美代子

生きるため姫のブライドなど捨てよう
弥生

おすべらかし十二単の硬い顔
春

再会をためらっている姫かがみ
靖巳

就職は吉本志望うちの姫
正一

姫ゆりの塔の悲劇も風化する
鹿太

主役でなくてもお姫様がいい
千歩

姫鏡愛に目覚める日が怖い
勇太

世が世なら姫様の身のワンルーム
房子

大都会に望みなくした姫リンゴ
澄子

大秦の姫はスパスパ煙草吸い
一風

保育器に手足のばして眠り姫
ますみ

移住先教えてくれぬカグや姫
弘一

大女優でなくても出来るお姫様
文秋

シンデレラ憧れ三十路まで独り
セツ子

取り巻きに姫と呼ばれている悪女
利昭

積極的な姫と駈落ちしてしまふ
代

姫さまに誘われカード持つて出る
月子

灼熱のドラマは知らぬ姫リンゴ
森子

源氏の姫に生き方学ぶ春炬燵
楓

核テスト乙姫様が目を覚ます
なきさ

パッパラーの姫で家には居つかない
金太

華やかな称賛を背に姫が逝く
英子

姫ひめとお付きの者が小うるさい
紫香

お前は姫で白馬童子は僕だった
弘一

バイクから降りるとまきにお姫様
度

御所車に一度乗せたいうちの姫
夕花

うちの姫双子で揃って幼稚園
利武

佳

ジョギングが趣味と駕籠には乗らぬ姫
恵子

飾飾り華やく姫は二度童子
寿美

白雪姫守るこびとは無精卵
英千子

姫の買う化粧はパリの直輸入
雅文

かさぶたの絶える間がないうちの姫
保子

人

この森はものけ姫の声がする
瑠美子

地

家系図に清姫の血が流れてる
泰子

天

姫君が来るぞ大きな炎の岩
欣之

軸

厚底靴で恋路きまよう茶髪姫
奥田みつ子選

願いごと何でも叶う不幸せ
剛治

親と子の願いが違う道歩く
照子

シヤッターが君の願いも読み取った
千代

願望が欲望となる曲がり角
風云児

願いがあがる口紅を引きなおす
重人

イメージトレーニングして叶えます
伽羅

点滴のしずく母の願いの涙粒
千里

一途な願い発酵させて待つ答
寿子

亡妻を返して朝の一つの願いです
大輪

結願へ奇麗に朝の歯を磨く
澄子

満願の目に楚楚と咲く白い梅
柳宏子

孫出来て祖母の願いがうんと増え
鬼遊

十円でそんなに多い願い事
ダン吉

ひとつだけ叶わぬ願い抱いている
梨里

ない袖は振れぬ願いを頼まれる
メ女

娘の晴着一針ずつにもつ願い
周信

大それた願いは持たぬ蛙の子
かりん

一生に一度と何度言うたやら
楓

笑い袋の中へ願いを詰めておく
正坊

戦中を生きたいさなき世を願う
月子

父ちゃんがスマートになった夢の中
英子

どの真開けても子らの願いごと
泰子

現状維持それが私の願い事
三

お願いと地球のうめき声がする
かりん

神様も微笑される願いごと
舞

願い事捨てたとたんにお報われる
たす子

逆上りした願いが今もあれる
笛生

絵馬堂の願い必死の絵馬が揺れ
弥生

少年の大志願いがたんとあれる

逢える日を願って扉あけ放つ

お願いをする時使う標準語

これ以上願うと罰が当ります

叶ったら次のお願ひ決めてある

春選抜ベンチに吊す千羽鶴

ささやかな願ひかなって花を買つ

佳

どうぞ娘の願ひ叶えて流れ星

願ひ未だ八分で足踏みをしてる

弱点をつくお願ひの鼻濁音

等身大のすなおを願うひとり風呂

請願書民のくらしは瘦せ細り

人

鎮守様にお願ひがあるちっちゃな娘

地

見つめたら願ひの叶うお月さま

天

茶断ちする老母は祈願を明かさない

軸

明るさを願ひ明るくなる兆し

兼題「様」

橘高薫風選

上様で宜しいですか領収書

お月様お月様としてあなた様

様やめてやさしい手紙さまと書き

奥様を連発してる契約書

君と僕貴様と呼んだ頃もある

模様替え娘の部屋の恋気配

様になるように散髪やへ出掛け

寿子

弘一

泰子

弘一

周信

いわゑ

澄子

森子

寿美

義子

一三三

紫香

扶美代

倫子

千秀

千代

満津子

充子

半蔵門

柳弘

鬼遊

面の手の使えるお陰様がある

何様と思つてはるの本部長

書きなれて様という字の筆さばき

様という字が横つちよ向いてます

様で来る他人行儀なおんな文字

あの日から様に変つていった手紙

今様のギャグに笑えぬ老い二人

ご令室様とは僕の妻らしい

旦那様と妻が呼んだら何と言お

さま様な富士を忍野の雪化粧

行雲流水左様さしずめホヘミアン

様々な苦勞の果ての痴呆症

憶い様様ダムに沈んでゆく村よ

様変りもつ踊り子の居ぬ峠

防寒着脱ぎ神様の前に付つ

おびんづる様撫でてきた大安堵

午前様過勞死などはせぬように

新聞に包み焼きいもサマになり

乗り換えて化粧の続く様を見た

何様のつもり座席を二人分

逆様に見れば本心読めてくる

お金さまさまいつも孤独がつきまとう

わたくしの電話帳には様がない

様々な未練繋いで生きている

様々な人生を見た青アセント

鮫小紋わたしもすこし様になる

上様と書く物言う領収書

不合格天神様のせいじゃない

佳

瑠美子

利武

たもつ

路児

鹿太

ダン吉

周信

たもつ

柳宏子

柳伸

周信

吐来

寿美

一三三

扶美代

英壬子

文秋

正坊

東雲

たず子

靖巳

寿子

冬葉

つづや

朋月

たず子

重人

風云児

折角の酒にのまれている不様

何様のつもりと思つ妻のあこ

元上司ベレーがさまにおなりです

様さまの想いで桜はなを待ち

ビリケンさん通天閣と様になる

人

生き様を毎年雛に見てもらつ

地

奥様は魔女心得ておりまする

天

いか様と知つて持つてるルイビトン

軸

家康も上様領収証の僕も

第31回 北日本川柳大会

日時 5月7日(日) 午前10時30分

場所 富山県職員会館(富山市新桜町)

兼題 光る・ラスト・力む・根気・平和

突く・苦笑・共・役(やく)

選者 奈田実路 舟渡杏花 仲侯新一

谷口 弘 結城健治 沼田耕作

開発秋醉 酒井路也 脇坂正夢

締切 午前11時20分(各題とも2句)

賞 北日本新聞社長賞ほか多数

会費 2000円

投句 1000円(切手可)を添えて4月28日まで左記へ

〒930-0362 富山県中新川郡上市町

稗田6 柳瀬あき緒方 北日本川柳大会係

笛生

度

義子

西

隆盛

泰子

春

伽羅

秀句鑑賞

— 3月号から

大内朝子

新鮮な一年でした職ひいて

大森純子

長年の仕事を終え、がらりと変わった暮し
の実感がよく窺えます。第二の人生の幕開け
です。もっ一度キラリと光りましょう。

親切にされて錯覚してしまふ

銭山昌枝

経験あります。おとことおんなはとかくお
もしろいものですね。

裏口を出ればひよっこり春に会う

武島 ちよえ

ひよっこり春に会うんですもの人生捨てた
ものではないですね。希望のある明るい句で
こころの蕾がポツと開いたようない気分。

コンビニと言う母さんに頼り切る

和田 つづや

母親のお弁当が恥ずかしいという話を聞い
たときは、ギョッ。これからの母子関係は。

極楽はどこを掘っても酒が出る

大西 文次

健康であつてこそ極楽のお酒。どこを掘つ
ても出てくるお酒を呑みすぎませぬように。

お洒落して手の甲の皺もてあまし

高山 清子

よく働いてくれた手。感謝し誇らしくひと
さまに見ていただきましょう。

枯れ草へ燃えつきせうな陽が沈む

三浦 千津子

ふる里で見た夕焼けの感動を思いおこしま
す。情景描写がお上手だと感心しました。

木の芽にも聞こえたらしい春の音

中澤 伽羅

ピョコピョコと新芽が顔だすかわいい瞬間。
「オーイ、春ですよ。」風さんがいいました。

家を出ると一人前の顔をす

城 多喜

甘えん坊の娘の職場をのぞくと頑張つてや
つていました。涙をそっと拭きました。

肩寄せて暮す夫婦の根深汁

須磨 活恵

根深汁の湯気にはのはのとした夫婦愛。
福袋の前に立つたら思案する

後藤 志津香

人間の欲をかいま見る楽しい句です。

毒舌の底に流れる思いやり

澤田 和重

毒舌は照れかくしかもしれませぬ。
自分史の中に伏せ字のない強み

森本 益弘

真つ当に生きている自信がうかがえます。
ここでさよなら駅の別れは辛いから

野瀬 昌子

車窓を境に老父がほろりとこぼした涙を思
い出します。ここでさよならがいいですね。

大根を煮ると優しい顔になる

録 沢 風花

フムフムとつなずいてしまいました。コト
コトと大根を煮ているうちにほっと心がほぐ
れてゆきますよ。

柿の実を寂しうだと二個残す

福重 美子

一匹の金魚に金魚をプレゼントしたことを
ふと思ひ出しました。

世の中を時々抜けて海に出る

木村 親路

ストレスを溜めないように生き上手の秘訣
かも知れませぬ。

生き下手が回り道して花に逢う

瀧井 勝

コツコツと前向きに生きますよ。

平成11年度年間賞発表
2000年記念ふあうすと川柳大会

日時 4月23日(日) 午前11時開場
場所 兵庫県民会館9Fホール
神戸市中央区下山手通4-16-3
(JR元町・阪神元町駅西出口から徒歩
7分、地下鉄県庁前駅東1・2出口すぐ)

宿題

「通る」 千葉 平井 吾風選
「差」 高松 堤 春子選
「宇宙」 福岡 松原 葦男選
「残る」 中川柳 浜口 剛史選
「ドラマ」 川柳塔 橘高 薫風選
「年」 番傘 森中 惠美子選
「線」 時の川柳 小松原 爽介選
「理由」 本社 泉 比呂史謝選

席題 なし

出句締切 12時(各題 2句)

会費 2000円(記念品・発表誌呈)
(昼食は各自でお済ませください)
大会終了後、同会館内で懇親宴(会費4000円)

くらわんか番傘創立20周年
丹波三千子句集「ひまわり」発刊
中山おさむ句集「きずな」発刊
記念川柳大会

日時 4月29日(みどりの日) 正午開場
会場 日本料理・ひらかた仙亭・著穹の間
京阪電車・枚方市駅下車南へ7分・Tel072(846)3333

句集鑑賞 「ひまわり」 森中惠美子氏
「きずな」 奥山 晴生氏

宿題 「大人」 柏原 幻四郎 選
「世紀」 片岡 湖風 選
「香る」 田頭 良子 選
「星」 西出 楓楽 選
「宿」 宮原 せつ 選
「みどり」 森田 和夫 選

席題なし 各題1句 出句締切 13時

事前投句 「川」(1句) 磯野 いさむ 選
投句先 〒573-0081 枚方市釈尊寺町28-4-301
足立淑子宛(072-853-8153)

投句締切 3月31日(出席者に限る)

会費 3000円(句集「ひまわり」「きずな」呈)
懇親宴 7000円(大会終了後・会席料理・要予約)

第11回 時の川柳交歓川柳大会

日時 5月13日(土) 10時30分開場
会場 兵庫県民会館9Fホール
神戸市中央区下山手通4-16-3
(JR元町・阪神元町駅西出口から徒歩
7分、地下鉄県庁前駅東1・2出口すぐ)

会費 2000円(記念品・昼食・発表誌呈)
兼題 (各題2句)

スタイル 弓削 河原 千壽選
塩 神戸 長島 敏子選
灯 京都 筒井 祥文選
チャレンジ 竹原 小島 蘭幸選
腹 大阪 田中 新一選
役 堺 河内 天笑選
転 西宮 小松原 爽介選

特別課題 (1句)

あいまい 神戸 武田 森茂選

◎席題なし 欠席投句拝辞 締切12時

講演 「はらわたを突いてくる奴」
—私と川柳の接点— 歌人 蒔田律子氏

懇親宴 5000円(当日受付60名まで)
同館7F「鶴の間」

川柳ねやがわ
25周年記念川柳大会

日時 5月21日(日) 正午開場
会場 寝屋川市立総合センター4階

(京阪寝屋川市駅下車、京阪バス西口①から
守口市駅行、③から守口市駅行・太間公園
行・古川橋行にて総合センター前下車)

兼題 「粘る」 西田 柳宏子 選
「弾む」 久保田半蔵門選
「美人」 森中 惠美子 選
「余生」 黒川 紫香 選
「味」 磯野 いさむ 選
「方議」 橘高 薫風 選

席題 ありません

締切 午後1時 各題2句

会費 1000円(懇親会費・入選句集代含む)

投句 今回は出席者に限ります

主催 川柳ねやがわ
協賛 寝屋川市川柳協会
後援 寝屋川市文化連盟

老地樹壇

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

夫唱婦随ときどき妻の変化球
ときどきはいいと言うからした浮気
ときどきは耳のきこえぬふりをする
ときどきは切れる話もして夫婦
ばけたって足は鍛えておくべきだ
胃カメラの結果屋台へ弾む足
外反母趾をやさしく包むちびた靴
美しい足はジープ何故かくす
長生きの足は知ってる地の温み
おだてればわたしの足はまだ走る
それぞれの集金さんへ選る言葉
集金の顔して覗く家の中
ひつたりが怖い五十日の日暮とき
集金もできず雨まで降ってくる
集金人わが家の勝手知っている
金集め堕ちていく人実る人
町会に集金される赤い羽根
孫叱りあとで息子に叱られる

柳弘 弘一 アキ 宏 秋雄 ばっは 剛治 巳代一 春蘭 英一 扶美代 昌子 弥生 弘直 千里 三男 年人 たもつ のぼる

人間をはっしはっしと叱る天
まん中に生れていつも叱られる
ホロクソに叱る勇気をくれた酒
叱られて何ぼの頭のせている
お母ちゃんの言うこと聞きやと祖母の飴
円満解決ストは解除の始発ベル
わが家には一姫二太郎いて平和
円満が宿る感謝をすること
円満ではないがデュエットなら唄う
ペット啼く円満夫婦に妬いている

欣之 ますみ 柳伸 ダン吉 シマ子 とみを 太郎 一風 森子 柳宏子

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

整形をしても声まで変わらない
そのコース歩けば一万歩にはなる
くい込んだ指輪ダイエット急がねば
ブロイラーみたいに貰う機肉食
普段着のころころになれる人のそば
小石よりわたしの骨は軽いはず
キッチン窓から主婦が斬る政治
四コマの漫画みたいに生きてます
ときどきは妻が家出をほのめかす

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

梅の香千里するめの匂う観光地
梅が咲き我が家も春に包まれる
幾星霜 同期の梅は実をなせり
梅見ごろホカロンつけてバスに乗る
まだ若い証か早春の梅が好き
梅咲きてウグイスを待つ春浅く

ヒサコ 夢之助 涼子 節子 弘治 愛

雪国のロマン追ってるスキー靴
降る雪が音のすべてを消していく
シナリオになかった町の雪景色
淡雪が春のきざしを連れてくる
千両の赤い実あざやか雪の朝
しばらくは眺めていよう雪が降る
屋根の雪遠い想い出蘇る
身の内に根雪のありてわが日月
銀河鉄道吹雪の駅に止まります
目から鼻へ抜けるお人が多すぎる
目かけた女に梯子外される
神の書くドラマの中に浮き沈み
冬の陽を斜めにもらう虫めがね
名を知らぬ花がわたしをなくさめる
一円を十枚投げた願い事
立春の卵へエイツとかける魔法
冬ざれの庭に蟬殻夏残心
簾簾にもどこにも国旗ないと言う
空の鳥籠冬の空気が棲んでいる
無言電話へこちら枯野の駅ですが
少子高齢老いに深まる思いやり
身も蓋もないのに孫く視聴率
節分の豆が食べた雀の子

十四郎 久子 静 千恵 年代 千恵 恵子 芳子 正子 ヤス子 キク子 歌子 満寿蔵 義芳 和子 紫香 光穂 比ろ志 昭三 武庫坊 富美子 沙置子 昌子

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

節々に竹は想いを溜めている
森羅万象春を約束してくれる
二十世紀最後の旅は夫と行く
ままならぬ虫が時々あはれだす

玲子 瑞枝 麗 千春

一言に動いて風も春になる

昔ばなしを聞きにきたかとそぞの汁

カラオケを聞いてる者は自分だけ

馴れ合いになって了ったハウスのもの

親を仲人娘の高砂も頼まれる

気晴らしの電話が長い一時間

蠟梅が匂う句会は真つ盛り

わがままなパレット姦しい色に

ぐうちよきばあ温いお陽さん虜にし

てのひらを晴らす小さな叶いごと

節分の鬼と彼岸に行った亡父

ブルースに小雪手にはほつり芋がある

禁じられた遊びを面白く遊ぶ

裸木が騒ぎはじめる春風

南大阪川柳会

吉川

寿美報

氏神様に礼拝もする万歩計

晩鐘に祈る農婦のまるい肩

平成の皇后礼拝する参賀

きんさん逝く押すな押すなの礼拝所

千年に一度の初春を寿ぎぬ

礼拝堂白いドレスが似合います

礼拝の躰ママはおこたらず

どうしても利口になれぬかたつむり

利口者ばかりで会議進まない

利口ではないが笑顔が美しい

背伸びした利口ちよいちよいボロが出る

だまされて利口になったお人よし

コンピュータ人間よりもお利口さん

文葉

やえ

天雀

なみ

寿々子

晶子

八重子

ふみ

春枝

千代

恵子

てい子

日枝子

荒介

利口より少し間抜けが愛される

選果機から落ちて一盛りいくらす

類別が下手でいつでも捜し物

類別をされて行き場のない私

類別を楽しむ切手蒐集家

若い芽を偏差値だけで類別し

風の私語アレ男かな女かな

好感度嗅ぎ分けている猫の髭

ワープロが人間臭いレター書く

Eメールに都会の孤独癒される

慰問文盛んに書いた若い頃

お手紙がついたとたん又電話

老将の威厳通じぬもみじの手

老将が逝く勲章を供につれ

老将の采配いくさもりかえず

老将を支えて無名悔いはなし

老将がサンタのバイト出ています

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

消しゴムで消せない過去を雪が消す

雪どけの道こわこわと手にすがる

人工の雪降らす人の暖かい

雪の中吊るした柿のぼか

音も無く朽木飾った今朝の雪

職退いて行く当てのない靴磨く

暇な時地図を広げて一人旅

暇な人噂に彩を塗っている

暇人に暇の値打ちは分るまい

おひまなら来てねやなんてみずくさい

清水

文秋

幸子

正博

柳伸

遠野

章久

澄子

千里

楓楽

文枝

和歌子

重人

志華子

久峰

修

東雲

暇やなあよからぬ虫が首もたげ

この村とひとりが好きと故郷の母

北風が好きですこうし意地っぱり

別れても好きという字をなぞる指

此の世です好きでも添えぬ比翼塚

好きな酒に預ける命その値段

好き嫌いやわす芋蔓食べた過去

君の笑顔好きで自エロの役ばかり

鏡を磨くしつかり自分いるために

しつかりと蕾のままでもいる強さ

妹が兄ちゃんよりもしつかり屋

もつ一本しつかり釘を打っておく

しつかりと正面見据え生きてきた

自己主張過ぎて淋しさ胃に溜まる

歯に衣をさせぬ言葉が意表つく

佳句地十選 (3月号から)

驚見正

卵が一個これから料理考える

どんな夢見てるか犬の高軒

羽づくろい夢が脹らみかけている

愛されて愛して太くなる絆

わたくしの財布はずっと病気でず

ベットポトルといのちの話ししてみよう

生きているだけでまいにち花丸だ

余生なおまだ抱えている五欲

亀の背に父の童話が眠っている

浄土には手ぶらで来いとおっしゃった

柳宏子

てる

みつ子

鹿太

高栄

絹子

石舟

細子

哲子

いわゑ

能子

春蘭

求芽

周信

萬的

嘉代子

美代子

美穂

畔

金太

みつこ

輝子

完司

民子

隆風

隆風

時効だとOB達の裏話

手袋の片方落とし春が来る

バレンタインデーだからかチヨコレット

義理チヨコの第一号はおじいちゃん

冬大根うまい平凡ぐらしなり

はたる川柳同好会

田辺正三郎報

子より先寝ついた妻の子守歌

負け試合破れかぶれの応援歌

マイク持ち立って歌うと伸びる腰

酒酌んで歌う故郷の佐渡おけさ

たこ焼きを食べてアリアを椿姫

童謡を歌うやすらぎ喜寿の道

年一度少年になる寮歌祭

若い歌ひとつ覚えて若いふり

同期会ラストに歌う赤とんぼ

細ぼそと履歴汚さず生きている

細い指母に似てると嬉しそう

指切りの指細かった日の別れ

細長くたく短くもう遅い

たぬき寝の証拠細目をあけている

少子化の未来を背負う細い腰

鬼の子は人のお面は欲しがらぬ

鬼の面仕舞い忘れて日々静か

尾ひれつく女のうわさ笑う鬼

嫉する時には心鬼にする

鬼の面アメリカの豆撒かれてる

豆撒いても心の鬼は払えない

人生の縮図集めて眠る

比ろ志

諷云児

ルイ子

正義坊

義子

竹二

正安

博史

まみ子

正三郎

雪子

見清

直次

桂子

蛭柳

ただし

久子

セツ子

馬洗

敬子

喜美子

祥風

千里志

緑骨

よろう

集まっているから兎に角行つてみる

倉吉川柳会

松本よしえ報

ぞろぞろとフェリーの腹が車はく

安物のツアーぞろぞろついて行く

もの言えぬ母の喜び頼つたう

龍になること諦めて池の鯉

平成の竜宮城が見つからぬ

世渡りが下手で雲から落ちた龍

ぞろぞろと金魚の糞になり下がる

龍になる夢に破れた蛇でいる

この鯉が龍になるまで見ていよう

観光バス降りてぞろぞろWC

抱き合つて喜ぶ喜寿のクラス会

解散の噂流れて愛想よい

ぞろぞろと嘘が零れる朝帰り

竜の字を大きく書いた風揚げる

野地蔵も流れた石もまんまるい

ぞろぞろと老人力を売りに行く

金のない男ぞろぞろ二次会へ

ぞろぞろと僕に熟女がまといつく

龍宮城乙姫さまも白髪染め

お一人に一ヶに孫もつれて行き

喜べばボタ餅ばかり持つて来る

家を捨て老人ホームか龍宮城

昇り龍冬のトンネル抜けて来た

八十路坂喜び一つ二つ減る

龍が来て切手シートのお年玉

銭を見て喜ぶ可哀想な俺

柳童

重忠

照彦

龍枝

芳光

智子

雄々

節子

螢

玲坊

御喜美子

玲子

孝恵

ゆり子

ちよ子

和枝

康子

季芳

幸子

天雀

久子

御喜美子

次男

賀寿恵

かつみ

よしえ

石花菜

土筆手にぞろぞろ帰る一年生

欲深い人はなかなか喜ばぬ

おんなの内に龍が住む海がある

龍宮の姫がはなさぬいい男

川柳塔まつえ吟社

恒松

うっかりと素通りをした神の前

神前の決意忘れた離婚劇

神主が賽銭箱を磨いている

神様の機嫌損ねてひとり者

玉砂利の音に野心は響かない

人のいい神が三軒先に住む

マッチ売りの少女が胸を離れない

指切りで軽い約束売っている

恐いほど売れるうわさで群れを出る

目ん玉を売って払えと言う社会

甲種合格男いっぴき売りにゆく

心売る日から道幅せまくなる

割烹着雪に負けない顔の艶

白雪にレル風を喜ぶ露の臺

雪除けてぶさたを詫げる花手桶

雪が舞う外は気にせぬシクラメン

外は雪ゆつくり入るしまい風呂

羽づくろいする気で髭を剃り落とす

防犯カメラ髭をしっかりと捕らえてた

髭面の意外やさしい目に出会い

女房の髭を横目でちよつと見る

べこべこと進んで髭の塵払う

秋草

完司

和歌子

一夫

叮紅報

房枝

昌枝

登志子

多賀子

小鹿

すみこ

きみ子

茂美

螢

桂子

たけし

晃

注湖

きみえ

邦代

米子

太泡

友子

静恵

芳枝

煩惱児

叱られているのは髭のほうだった
動く事忘れてしまふ事故現場
流水に私の芯が動き出す

チューリップの芽春の陽に動き出す
貧乏性いつも何かと動いてる
雪溶けて動き始める広い空

豊かさに溺れ動きが鈍くなる

はまゆう川柳会

中後 清史報

母ちゃんの小言で僕の耳はタコ
耳寄りの話を聞いた露天風呂
あのねのね母の耳元秘密めく
聞かれたら大変あの子地獄耳
昼寝する耳いじつてるかわいい手
森林の怒りに耳を傾ける

真実の言葉心の耳で聞く

見込まれて期待が重くのしかかる
見込みには無かった老いの低金利
見込まれて嫁に来たのにいびられる
見込みない勝負に賭けることもある
提言が生きて社長に見込まれる

見込まれて嫌いだのれんの重いこと
見込み点自信の程もつけ加え

見込まれて嫁いだ苦の離婚沙汰
父を立ててこっそり母の味方する

あなただけ味方と決めて裏切られ
敵味方透視レンズを替えて見る

どこにでも味方がなくて一人だけ
くたびれた靴だが俺の味方です

与根一夫

和歌子

みえ

静江

知恵子

叮紅

華水

平和

美佐子

修也

生米子

利ぼん

さだ代

雄造

太一

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

関西弁で四角を丸くして返す
散る時はおそろく結ぶ実を信じ

ブームには乗らぬ老舗の紺のれん
おそろくの後は聞かない方がいい
おそろくに万一という穴がある

その時が来ればおそろくうろたえる
あのジョークおそろく本音だと思っ
黒幕がおそろく糸を引ている

神様がおそろく留守に違いない
お相手もおそろく調査済みだろう
天気予報おそろくという曖昧さ

関西弁九官鳥はすぐ覚え
飛ばされてきた関西で根を下ろす
作文は関西弁で賞に入る

もうかりまっか関西弁の温かさ
京やまと浪花の味と卒業のお湯
すぐ値段聞く関西の出身で

関西へ火花をあげたのは女
頑張りや通天閣の灯があかい
怒鳴るのも労れるのも河内弁

ブーム去りクラブを鉄に替える
カタコト語のブームに老いは惑わされ
ファミコンのブームへ孫がリードする

シャルウィングスブームに老いの血がたぎる
マスメディア小さなブーム煽り立て
団塊のマグム競っておしゃれする

日本の明日が不安になるブーム

紀久子

佐代子

さち子

大輪

保州

射月芳

和重

高夫

精子

寿子

優子

度

あつむ

豊太

ブームブーム猫も杓子も煽られる
正論も時にブームに流される
ブームには弱い女の虚栄心

川柳塔鹿野みか月

土橋

自己流のマラソンならば世界一
マラソンも兎と亀でおもしろい
マラソンを心の中で走り抜く

寝忘れてマラソンをする戦する
家計簿を三日坊主がまた買った
上天気犬もゆつくり散歩する

どの彩を着ても老いにはさからえぬ
唇は過ぎた季節を語らない
二〇〇〇年最初の飯は父が炊く

一握りほどの法螺です恋遊び
胸奥の小さな灯火消しはせぬ
まっかな顔でトントんと火を囲む

客間から威張ってくれる長火鉢
唇はまだ許せないラッピング
かくし味ほどの火種を抱えている

火が消えてナムアマアツ南無阿弥陀
そのうちに火になり灰になる命
ふり向くな降るなよ君は火の粉だよ

がちがちに凍ってキンキラキンに乗り
がちがちに凍った脳を溶かさねば
立春はがちがちを解くりハーサル

がちがちの面接子供はうきうき
がちがちの聖夜に熱いラブコール
目の先にあるがちがちのボクの道

克子

三男

和子

蟹報

菊乃

房子

久枝

富久江

野草

武子

幸枝

小鹿

はるお

きみ子

茂

保子

みどり

睦子

かつ乃

喜与志

和子

風人

隆風

茶子

節子

実満

孔美子

盛桜

母となるよろこび秘めた母子手帳
いい手帳買って今年も頑張るぞ
かな書きの婆ちゃん生きている手帳
情熱の証手帳へ書きつくす
マルバツが手帳に書いてある不安
欲望に埋め尽くされてゆく手帳

かわはら川柳会

上田 俊路報

子供からカード遊びが消えてゆく
リクエストカードで歌う美声音
好カード今日も満席夢を売る
カードでは買えぬハートを射止めたい
春財布カード入れのみ幅さかす
一枚でいいしあわせのカード選る
期待して播いた野菜が汗になく
今年こそ期待をかけて墨をする
宮まいり期待の孫はねてばかり
期待外れの子ほど可愛い血の絆
後継ぎをせめて孫にと期待する
期待どおり夢が叶わぬくすり指

岩美川柳会

石谷美恵子報

指の石いちずに愛を信じ切る
六等が当り震える宝くじ
愛いちず生涯かけて奪いあう
脈があるうち献体の話出る
マフラーを編む手一途な恋進む
仮りの世で命震わす茶碗酒
念ずればなぜかからだが震えだす

敦子 八重子 汲香 くに子 みさ子 蛭 静子 一薫 悦子 余史子 静子 泰良 秀子 寿子 登生 正子 ふじ子 俊路

天辺の蕾はみんな鳥のエサ
川柳にいちず大きな花咲かず
半熟の私が好きなき城の外
居場所さえあれば裏方でもいいよ
血脈の絶えたふる里雪の山
裏方の母にでっかい感謝状
裏方の汗と涙で花は咲く
脈脈と続く老舗が子に重い
真夜中の訃報震えが止まらない
リストラの仕事いちずの腰を折る
裏方の妻雑草の花で生き

川柳ささやま

酒井 靖子報

少しだけ光下さい仏さま
一日が早い安らぐ里の膳
又あした頑張りますと言う背中
地に還る母の光が満ちてる
真つすくに歩きたい靴光らせる
ルミノリエ光で夢を求めよう
明日へ咲く花の蕾と語り合っ
一杯のお茶で心が温まる
ゲームして子の光るもの見つけたり
木根っこも燻し光らず愛がある
また明日あしたと仕事ためている
あしたからタイエツするにぎり寿司
明日のためお鍋せつせと磨きます
救急車明日は私かもしれぬ
再会の明日が不眠症にする
恋をする目だ光ってる炎えている

一夫 圭一郎 和歌子 一京 睦子 公乃 一瑤 節子 裕子 美恵子 多美子 美智子 八重子 とみ子 つや子 かほ子 かず子 美紗子 美緒子 泰子 房江 君代 芳郎 富美 可住

川柳会梨花

石上

悦子報

躓いて明日へ初心の灯を点す
新聞に載れば踏み絵にされている
忠孝の踏絵仏間に敷いてある
無宗派だ踏絵を踏んで見ましようか
赤旗に菊の御紋という踏み絵
少年の視点踏み絵は恐がらぬ
人生のこれから花と思いたい
歯ブラシを唾えて行っ行っていらっしい
新世紀鎧兜を着て迎え
人を待つうなじに風があそんでる
行方不明になった若き日の大志
とりあえず三度の飯は食べさせる
点滴の一滴ずつにある命
にんげんを上手に穿いているスボン
古希夫婦だんだん絆合ってくる
だんだんとは真上に猫二匹
うなり声森がだんだん深くなる
パンに慣れゴミ出しに慣れる侍
春を待つだんだん軽くなる心
犬のやつ妻が主人と勘違い
我が家では主が誰やら解らない
主人には内緒真つ赤な靴はずむ
来年は必ずボクも主人公
付和雷同飾った言葉歩き出す
人がみな正直になる神飾り
口車飾る言葉に落とし穴
寺の子もそつとツリーを飾ってる

靖子 輪多朗 蛭 完司 節子 一京 蟹郎 忠良 克枝 求芽 幸子 真砂 洋 多哥由 行男 東雲 和歌子 芳光 重忠 一夫 主詩朗 石花菜 ただし 典子 悦美 悦子

飾るものない私は笑顔だけ
美辞麗句振れば空しい音がする
着飾って心のお洒落忘れ果て
まだチャンスありそう飾る花を選ぶ

うぶみ川柳会

上田

宣子報

間を置いて感情線の補修する

砂時計落ちる間の謀

健やかな間に詰めるスケジュール

絵に描いた餅が予算に組んである

少子化へ組はゆとりの頭数

組立てて壊し人生暇がない

追伸がいつも間延びをしよう

散りざわはせめてせかせかなどしない

老い話間仕切抜けてみんな出る

車間距離守る家族の笑い声

せかせかと追って馬穴をはいてゆく

それとなく間に入り込むねずみ

間の抜けた顔が核心ついでくる

日雇いの叩き大工も夢がある

握手した掌からこぼれるわだかまり

叩き甲斐あれば二度とは手を上げぬ

生き残る組にまわされ七難八苦

一間半孫の祝の鯉のぼり

わたくしを叩き直しにくる手紙

川柳塔唐津支部

松涛庵正剣報

念力不効てる坊主雨に濡れ

東照宮よりの金色御神鈴

高柴 枝

美恵子 睦子

黙光

美ツ千

ひろこ

帆雀

亜季

葉士人

登美枝

ユリ子

雅女

華子

静生

あづま

天人

良雄

天雀

健一

螢

くにお

宣子

あき

實

喝采などしない息子の離婚劇
雪山のあれが天山佐賀の山
金婚に互いの鈴は透き通る
傷ついた茶碗改め二〇〇〇年
夕焼けの里で呼んでる烏瓜
受験生あの子もその苦五年経つ
床擦れもさせず妻の良く仕え
住びしさを除けて琵琶湖の旅に出る
無芸だが七福神の名が言える
スタートに戻りひとりのヨードン

川柳大阪

坊農

柳弘報

蜂の家潰され絞る甘い蜜

目を閉じるこれが男のシグナルだ

年老いて我が家に女神妻がいる

冬空に青いテントが寒々と

帰る家あつても帰りがたかない日

白ワインオーケーならば赤ワイン

嬉しくて合図する手が震えてる

仲人の紹介こそばいこと並べ

触れ合った足で合図をすることたつ

目が笑う合図は承知今日の五時

あの人の視線が何故かこそばゆい

家の中時々走る火の車

この歳で愛だ何だどこそばゆい

営業のノルマ植毛考える

次世代に背負わす国債増えつづけ

この家と柱時計は同じ年

路のとう雪つきぬけて春知らず

輝夫 水笑

勝視 タミ

晴翠

幸夫

高明

虹汀

四郎

正剣

劍山

信醉

喜楽

隆司

照月

楽子

芳香

川童

美花

青道

柳昌

河南子

かよこ

比呂志

本蔭棒

希久志

一風

握ったら握り返してくる合図
昭和から平成家系図淋しなる
ああこそばいそが私の泣きどころ
死のカルテ核の恐さを書いてあり
沖繩の少女の旗を忘れまい
敗戦のひもじさ耐えてソバ植える
生きにくい世だなど思う二〇〇〇年
雨や風みんな信じて植えてやる
今年また新築してる鳩夫婦
合図待ちきれず飛び出すのも若さ
ウイंकが来たけど横の人だった
こそばゆい話で骨を抜きにくる
道楽の域は出てない植木鉢

川柳塔なら

坊農

柳弘報

車窓には波に任せるゆりかもめ

人によ任せず全部背負い込み

鬼の面付けても所詮母の顔

震災もどつとこい生きて来た家族

セクハラに辞職をさせた面構え

ふるさとも家族のことも言わぬ人

笑うこと知らずに終わる鬼の面

戯れに被った面が外れない

二千年経てど人心進歩せず

家族という真綿が首を締めつける

内障子に一人の部屋も鏡餅

鬼の面脱げば涙の跡がある

家族待つあかり恋しい伝書鳩

あと一人だけどりリーフを頼む

朝子 司

まつお 洛醉

一歩 敏

三十四

ダン吉

鉄心

柳宏子

金太

重人

柳弘

美和子

さと美

積子

たけし

春

節子

茂雄

水魚

天狗

真理子

絹子

あやめ

とし子

桜竜

宅急便故郷からの餅と柿

家族から別れ枝葉に夢が咲く

まかしとき胸を叩いた程でない

家族には見せぬ男の泣きっ面

おぎなりの家族構成きくポリス

内面は泣き虫だらう鬼の面

面倒な役をこなしした肩の凝り

黒粋の満面笑みに泣かされる

老父の樹に家族支えた傷の跡

善人の仮面が重い弥陀の前

メンツなど言わぬ男の肩の幅

血縁が雪崩と知らぬ遺産分け

窓際で家族の知らぬ顔になる

まばたきの命苦の面業の面

その時はその時面のうらおもて

洗濯機の中で絡まる家族たち

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

秋泉

章久

高栄

良一

和歌子

洋子

卓

春蘭

眞生夫

直子

道子

秋雄

アキ

欣之

美千子

孝子

せせらぎに詩を贈った春の風

あきらめと無駄が出てくる福袋

道草が花を咲かせている余生

いさぎよく春を待たずに散る椿

母のする無駄がいつしか生きてくる

爪伸びる忙しいのか暇なのか

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

紅梅も首をすくめる戻り寒

波かぶる覚悟で一步前に出る

温泉の庭下駄やっぱりネオン好き

横たわる母に頼りしてあげる

色褪せぬうち飛立とう千羽鶴

いつまでも消化不良の消費税

傷ついた心に温い里の風

スケジュール空けて待つてる梅便り

四世代君に仕えて生きる幸

病院で貰って来たか風邪の種

さわやかな笑顔の中にある秘密

コンビニが目立ち過ぎてる田舎町

ゆとりない我が家にもある温い部屋

忘れ物だんだん多くなる不安

一言と言った祝辞が欠け呼ぶ

白梅を活けて優しい無人駅

はおらずりに元気でいてと心添え

年の功丸く収めて老いの笑み

竹原川柳会

時広

一路報

手作りで勝負二十歳のバレンタイン

正治

満寿藏

澄子

十四郎

柳宏子

紫香

あきら

文仙

マツエ

輝夫

坊太郎

ひかり

勝

かおり

吟笑

放任

くに子

よしみ

まさる

八重子

貞月

治延

寿々女

いさむ

新しいカメラで二〇〇〇年を撮る

すずらんがリンリン鳴ればいいのにな

花の芽の一つ一つが持つ鈴だ

豊作だ鈴生りみかんもぎきれず

鈴の鳴る方へ背を向け背伸びする

幸運の鈴を並べてまだ独り

二〇〇〇年の鈴を鳴らして森を出る

握り締めるると答えてくれる母の鈴

頂いた命元気に生き抜かん

生温いつけあとから困る子よ

生き返る表具に腕の見せどころ

生きる欲趣味を支えにして八十路

日々好日薬袋に生かされて

明日も又生きるつもりで鉄を振る

雪解けてやっと野仏生きた顔

僕は僕妻は妻なり生きている

熊も鹿も生きんが為に里に下り

長生きのゆとりおじぎが深くなる

情熱が空気となって今を生き

活性化熱いお灸をすえている

胃が無くても熱いコーヒー恋しがる

父さんは熱いお風呂が好きだった

熱い湯豆腐頑固は溶けそつもなく

桜色に塗りがえていく私の情熱

新鮮な野菜情熱たっぷりだ

熱気球みんなで乗ろう二〇〇〇年

波稜草路郎の熱き血を惟う

アイヌン恋のお熱は冷ませない

高千枝

小亜紀

蘭幸

節生

寿枝

菁居

節夫

笑子

夏喜

年子

千年枝

栄恵

規代

勲

力

笹舟

幸子

静風

汎美

蝸牛

正宏

房子

貞子

千代美

一枝

比呂子

不朽

眞由美

父の威を過信する子でふがいない
 雨風に花の吐息が聞こえそう
 噂の波紋中心に鬼がいる
 幼顔残る僧侶が法話説く
 好きなのに口が勝手な愚痴を言う
 ダイエット新米食べてからやろう
 病む友と肩を並べて歩を合わす
 流行の先取り老いを寄せつけず
 不足する白髪も愛し頬かむり
 満月をウォーキングの道連れに
 憧れた彼女も老けて腰かがみ
 花びらを上手に受けてコップ酒
 過去未来うばすて山で考える
 袋持つ趣味もつ母を笑う娘ら
 CMのようには効かぬ咳止めよ
 木漏れ日によさし満ちて空の青
 愚図る児を散歩に連れ乳母車
 甘辛を控え目にして健康美
 スベアキーそのまたスベアがほしい年
 好きな道朝日を友に散歩する
 石仏といつも語ってくる散歩
 指切りをしたから来ないはずはない

川柳後楽吟社

従野 健一報

善人になってどうなる寺の鐘
 仮りの姿で汚れた猫が寄ってくる
 哲学も道義も枯れて冬木立

道博
 草風
 桃風

橋を走れば助かったかも知れぬ
 噴水の滴の下に沈む夢
 核心に触れると狂う風の向き
 またひとつ命を貰う初日の出
 コンビニの灯頼りに夜の道
 気がつけば困いを持たぬ僕の城
 真実を囁きたくて舌を抜く
 愚痴ばかり言つて話が後もどり
 亀よりも遅い指がキーを打つ
 ロウバイの花をこぼして冬の雨
 平静を装い握手して別れ
 昇竜の歳まで生きた血が動く
 年輪を重ね人生枯れすすき
 立ち呑みの背が哀しいコップ酒
 寒天にレモンの色の月震え
 退職をやつと人間らしくなる
 反省しない猿仲間からはずされる
 門松がロインを背負うて立っている
 豆撒きの鬼になるのはお父さん
 袴を脱いで得意の土ひねり
 二千年老人ホケズに元気です
 白いモチいじめられても血が出ない

大原川柳社

矢内寿恵子報

改めて見る初ごよみ吉と出る
 恵方海へこき出す權を改める
 三代の辰が揃つて初詣で
 元朝の風光らせて辰の春
 陽気な辰三代揃つて盛り上げる

拓治 直樹 正秀 青銅 吉則 まさお 一夫 信善 喜充 柳五郎 秋月 博友 哲郎 美智子 邦季 忠成 進 佐加恵 照明 金吾 照路 敏明

みづえ さちこ あやこ 玉恵 辰江

辰年へ開運頼む初詣で
 改まる日めぐり明日は何が待つ
 威勢いあやかり我が家の座を占める
 辰年にあやかり老年とんでみる
 二十年改めて抱く老いの夢
 辰年へ老いのパワで突走る
 二十年最初の辰で崇められ
 改めた言葉が少しこそばゆい
 辰年の孫に期待の二千年
 辰の娘へ夢がふくらむ岩田帯
 さまざまな辰の賀状で春が来た
 辰の背に平和な夢をただ願ひ
 景気よく辰の大風舞い上がる
 改まる席の顔ぶれ落ち着かず
 改まる娘の挨拶はもう他人
 続編につなぐベン先改まる
 座りなおした妻からもらう果し状
 瑞雲に乗つたか辰も天翔ける

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

どの人も初めはみんな同じ顔
 始まりは何だったかなこの喧嘩
 コーラスの中に音痴がひとり居る
 出無精の妻と連れ立つ音楽会
 なつメロを聞く補聴器が快い
 何時の間か眠りに落ちたシューベルト
 目を閉じて全身で聞くコンサート
 親と子がマリーチに乗れぬ世のひずみ
 モーツァルトが解るか胎児蹴ってくる

妻子 悦子 巴子 喜美子 こふゆ 敏子 南花 みさえ たづ子 ひでの 昭子 静子 絹子 地佳平 あすなろ はし芽 寿恵子

一壺 泰子 洞庵 敦子 吐来 たくし 庸佑 忠宏 かつみ

老母だけに許す故郷の童唄
 驚いてはからだが持ちません
 昨日飲んだあいつが今日は向う岸
 ばあちゃんを追い越す孫の背の高さ
 温暖化寒の最中にキンチョール
 朝令暮改今さら驚くことはない
 四姉妹と小さく驚く細言
 出し抜けにオウムがホクに馬鹿という
 風船が突然割れて一つの計
 驚喜した野村阪神息が切れ
 カメラマンフィルム代は惜しまない
 特光日シャッター上がるを待ちわびる
 シャッターを降ろし無口になる二人
 美人に合わせ私はいつもピンぼけで
 嫁ぐ娘のシャッター押せば涙ぐみ
 水俣で撮るとシャッターまで重い
 早く写して笑顔のままで凍りそう
 真実を残すシャッター強く押す

三幸川柳教室

三宅 保州報

扶美代 專平 章司 一知 絢子 元紀 志洋 美代子 昇 美喜 昭平 満寿蔵 りつえ 俊男 ゲン吉 みつこ 金太 伸二 健三郎 朱夏 佳世子 桂香 三千子 さち子 当代 清

役立っていると信じて田のかがし
 信じ合う家族同士の輪が温い
 名刺より信用と曰う顔がある
 信教の自由を盾に邪教群れ
 過信する癖が火傷を繰り返す
 背信の果てに画いた足落の絵
 天番が届くと信じたまを見せ
 交番のお巡りさんは信じられ
 性善説信じる無人小屋の柿
 いたずらの目が走ってる好奇心
 いたずらに時間を食って先送り
 落書きを消すには惜しいペンの沓え
 袴を脱げばいたずらしくなる
 国宝の壁落書きに泣いている
 千本の針ではとてもおさまらぬ
 二千年問題科学とは不便
 千波万波越え大根の花になる
 二千円札きつと錬金術だろう
 ミレニアム私は何をすればいい
 情念を絞り流してまだ迷う
 二〇〇〇年昭和が遠くなつていく

高槻川柳サークル卯の花 (前月分) 川島諷云児報

正一 美子 正匍 嘉平 みね 豊太郎 保州 町枝 昭治 利治 鉄治 公子 章子 光男 和代 登美代 和子 千秀 栄之進 起世子

和解を誓うお月様丸くなる
 指切りで誓った頃がなつかしい
 完走を誓いスタート線に立つ
 褒めこそすれ妻の悪口線わないぞ
 スマートな誓いに恋が崩れだす
 神さまに誓った順に山を降り
 誕生日よろこぶうちが花ざかり
 もう一年どうぞよろしく誕生日
 バック出来たらバックをしたい誕生日
 嫌だなあ秋になったら誕生日
 菊の香がとどく病床の誕生日
 誕生日首相と同じホームレス
 それっきり音沙汰なくて計報聞く
 電車賃立て替えたけどそれっきり
 見送ったテールランプがそれっきり
 鈴をつけられてそれっきり戻らない
 山茶花の宿で別れてそれっきり
 それっきり墓の中から出て来ない
 風邪の仕置きに耐えて迎えたミレニアム
 都合悪いことは忘れたことにする
 動乱の世紀に生きて幸多し
 上がりたくない日もあろう奴唄
 平凡に歩む夫婦の根深汁
 ひよっとことお多福だつて子は宝

川柳高知

川竹 松風報

美々 竹萌 てるみ 泰雄 波留吉 ルイ子 満寿蔵 節子 宵草 秀夫 典子 あやめ 吉之助 石舟 紫香 治三郎 重人 柳宏子 晴美 比ろ志 スミ子 武庫坊 義一 正坊 活恵 諷云児

年金で欲の袋を買い替える

風呂敷の話半分聞いておく

胃半分酒に取られてまだ酒豪

半分の半分でよしジャンボくじ

留守の間に酒が半分減っていた

仲間でも判は押せない保証人

飲み仲間太く短く生きて逝き

仲間にも見せぬ火種を抱いている

船宿で前祝いする釣り仲間

久しぶり会うのが恐いクラス会

会える日ときめき抱いて独り寝る

アルバムで会ってそれから五十年

義理だけで会ってそれから五十年

偶然といううれしさが里にある

会って来た余韻静かにたたむ帯

城北川柳会

神夏磯典子報

ブライドが無いのか知事の椅子が泣く

誘蛾灯青い光にたまされる

ブランドで飾り立ててる寒い顔

風も光も大好きだよと龍の風

隈取りの中に優しい眼が光る

社の鬼も家では妻の肩をもむ

青春のときめき秘めてめぐり逢う

天窓の光冬日があたたかい

味見する娘の仕草妻に似て

紙おむつ当てられてから呆けたふり

ワッハッハ笑うて逝った人がない

二〇〇〇年以後は優しくなるつもり

功

熊男

千鳥

快風

孝雄

節

幸

佳風

栄珍

和江

幸泉

朱坊

圭風

京子

松風

喝采をライトの中へ絞りこむ

結び目はあなたと私の発火点

ブライドの鼻に孤独の風よぎる

現役のブライド朝刊読んで出る

貧乏神が笑った春はもうそこに

初春の光を浴びるスニーカー

世界中笑顔が一番美しい

ときめきがときどき道を迷わせる

ブライドが回転寿司に馴染まない

老いてなおブライドがあり紅を引く

汗をしてあてにはしない七光

年甲斐もなく深爪を剪った悔い

逆光の視野で少女は脱皮する

親思う子より手こずる子がかわい

家中を春にしている娘の帰省

米びつがカラでも夫婦よく笑う

ときめきをそっと隠した京扇

一炊の夢で終わった古希の初春

サークル檸檬

小林

負け犬の先頭に立ち吠えている

愛情が纏れ三角波が立つ

三角の祈り重ねて千羽鶴

三角のおむすび竹の皮を恋う

三角でもつれる愛が動かない

逝った人螢のような灯を残し

三角も四角も吞んで丸く住む

わたしの脳いつでも消化不良気味

三角野郎などと民謡おつな味

史風

典子

潤子

一步

森子

志華子

みえ

トヨ子

千歩

白峰

朝子

ただし

千里

あい子

はじめ

颯云児

順三

公一

一夫報

房子

澄子

あずき

智恵子

遠野

雅子

靖巳

楓楽

みつ子

三角をまるにしたくて叱ってる

雑巾を縫わなくなつて久しいな

だあれも来ない日エプロンをはずす

ふりむけば幸せな日のつづきけり

岸和田川柳会

長谷川呂万報

指先の気合鍵盤乱れ打ち

親方が気合入れると土俵上

気合こめ振袖放つ矢のうなり

帯ポンと叩き女将の背すじのび

誤作動もなくさらさらと初春の川

偶然を装い好きな彼のそば

偶然にしては教祖の似たお顔

ノーマークしてた女が不意をつく

偶然が重なつただけという陳謝

ハプニング心の奥を見せしまう

偶然が友が仕組んだ見合席

偶然が続いて運がつき始め

スーパで偶然に合う嫁姑

事故多発偶然などと言わせない

縄のれんりストラ同士景気つけ

景気ええ話ないかと散髪屋

景気よく冷やで一杯初仕事

景気よく遊び気軽な自己破産

不景気はどこ吹く風の世界旅

景気付けに飲んで見えたが酔えぬ酒

不景気でもコニシ陽気なコーシヤル

恋なんか捨てると楽になりますよ

恋夢中ふたりに怖いものは無い

いわゑ

義子

希久子

一夫

野添

鹿太郎

辰郎

みつ江

仁緑

弘子

穰一

洞庵

蛙城

俣子

一齋

甚一

けい子

柳宏子

力子

洋

盛之

基

路子

富志子

萬的

すみえ

白光子

初恋の文字がにじんでいる日記
再会は次回にさせてドラマ済み
再会を誓って去った紫禁城
再会へたがいの皺を笑い合つ

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

花回廊の熱気大山まで届く
花回廊シャッター切るに忙しい
花回廊心と花が通じ合う
花回廊蝶ちよになつて小半日

和代
公美枝
智恵子
豊枝

花回廊悦ばせるほど各々で混み
賀状にも花回廊を書き添えた
花回廊大山ながめ深呼吸
花回廊お国自慢が一つふえ

久子
信敬
鈴枝
康女

花回廊へ案内すると賀状書く
花回廊大山のぞむ一等地
花回廊ゆりの持てる場所と決め
花回廊花の鼓動へ夕陽落ち

弘子
正光
康女
静江

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

限界の体力知ってる絵筆
解熱剤浮気の夫に飲ませたい
解脱する座禪の警策肩にくる
月光に研ぎすまされた我がのち

弥生
美弥子
シマ子
千里

うす暗い辻で痴漢に間違われ
四つ辻をまっすぐ渡る盲導犬
街中の名物行事辻回し
三度聴く噂本当かと思つ

たもつ
東雲
文秋
萬的

瀬戸内の夕日に風の私語を聴く

萬的

辻占いに明日の元気を貰うてる
リストラは義理人情も無い仕打ち
幼い義理に耐えてるため涙
介護するされるもつらい義理の仲

恭昌
晋吾
柳宏子
賢子

浪曲の義理人情についてほろり
底意地が悪いと鼻に書いてある
オルゴールの底名曲がしまわれる
山姥の祈りがつづく冬の底
姉ちゃんが働いているビルの底

朝子
とみ文
雅文
湖風

京都塔の会

都倉

木枯しのむせび声聞く朝の冷え
吉報を祈る心にある不安
末吉とあるから秋まで寝て待とう
末吉のみくじへ余命預けとく

柳宏子
巨詩
福子
ただし

おみくじの大吉転ばないように
大吉のおみくじだらう娘と同居
花ごよみ吉のつく日は弾みだす
吉相の実印捺すこともないままに
一步踏みこんだ作戦吉と出る

美智子
求芽
葉子
波留吉

吉報は近い茶柱立っている
ゼロからの出発でした夫婦旅
ゼロからの出発何も怖くはない
練習を重ねてゼロをふり落す
ゼロ八つぐらいはほしい退職金
ゼロからの出発でもしないルミナリエ
ずるい子は一人もいない夜学の灯
ゼロからの階段鍛える青春譜
ゼロ歳の欲は乳房を離さない

英一
庸佑
笑女
満子
芳子
正坊

友照

友照

求芽報

ゼロになる心求めて遍路する
年越しのそばをいたたく無事な顔
妻の笛に踊って今日も無事に暮れ
無事出産何より目出度いミレニアム
いつまでも無事でいたいウオーキング
無事である祖母の笑顔に救われる
一日が無事に終った仏間の灯
風小僧 木立の先でおいでする
能面の余韻 炎を持ち帰る
丁寧な言葉で釘を刺す工夫
良い話はいつも待ってる耳の底
不揃いの顔を並べててむかえる

武庫坊
とし子
吉之助
高栄
宏子
紫香
♀女
年代
春蘭
達子
水客

翠洋会

児玉

いい出会い求めるために出かけてる
童巻は風の昇天かも知れぬ
焼けばっくいの出合いになったクラス会
名画より子の絵が似合うわが家です
ぬくい風冷たい風もぐり抜け
梅桃と二月の色で咲ききそう

舞夢
さと美
伽羅
日の出
凡子
蛙

春を待つ二月の声で美味となり
出会いから負けたと思ふ肩の幅
ゆっくりに歩こう風の強い日だ
初恋の女の喪服に出会う通夜
左遷地で聞く虎落笛侘びすぎ
梅林に如月の月冴えわたり
二月危機不入りを嘆く招き猫
海の絵が好きを私は島育ち

蕉子
義
石舟
喜美子
正坊
恭昌
会美
久峰
周信

風よ雲よ私は一人旅して
風向きが変わると驟とんでくる
転職を余儀なくされる不況風
風吹いたただけで寤してくる母
待合室ゴッホを見ても齒は痛む
美人画に見とれて妻にはとつかれ
寒々と二月のベンチ空いている
花の絵の中で余生を樂しもう
年金の画布に保護色ばかり塗る
空しいな身体の中を風が吹く
いっばしの絵かきに見えるベレー帽
爪に絵を書いてうちの娘何もせず
親切な鬼と出合えるのも二月

川柳塔おとり

原 みを報

千枝子 照子 宣司 千梢 志華子 絹子 東雲 希久子 正雄 真砂 靖巳 叡子 鬼遊 舎人 紀子 雅通 雄々 登彰 彰美 以和万津 邦昭 義弘 和子 風花 ゆきの 小生 富貴子

肩叩き姑は小さく丸くなり
あの方と話をすると肩がこる
朝仕事今日一日の肩ならし
肩パッドは煮して視野を広くする
ほはほどこの辛煮る母がしたように
お袋の味へ火加減水加減
根回しも効いてはなしが煮えつまる
全頁が揃って鍋に火をつける
ぐつぐつと煮えつまるまで無の時間
結論は急がず話煮つめたい
夫婦愛煮れば煮るほど味がつく
母の煮た豆の旨みを舌で知る
正義感世相に腹がよく煮える
辛さを煮つめ人間くさくする

富柳会

池

森子報

仁子 崇 伝住 孝子 佳子 由多香 宏章 せつ子 艶子 幸次郎 黙光 道子 清子 みさを

一枚のカードをしつかりポケットに
鮮やかな絵の具であなたを落している
もどり寒男の愛を確かめる
北風が嬉しい噂持ってくる
寒がりの私に出来ぬ雪おろし
雑沓の流れに乗っている孤独
ひとり旅気楽な風と手を結び
天誅が下り知事の座明け渡し
ではちんを叩き鮮やかさに惚れる
天井の染みが独りを知りつくす
鮮やかに生きてとまどうことはない
新世紀電の落し子飼っている
母さんの天気もう観測する二歳
冬薔薇の白さへ沁みる日の暮情
ゆつくりと冬の樹になるキリンの首
人間の奥で正座をする心
新しい鱗で翔ぼうミレニアム

横浜あおは川柳会

菱田

満秋報

夕花 翠代 扶博 信博 東雲 義清 春蘭 浩二 しげお アキ 花梢 昭水 紅紫朗 夢成 欣之 森子 かず枝 鈴美 和可 良子 道子 ふみ 徳三 笑子 嘉信 政勝

罰ゲーム期待されてるタコ踊り
ほめちぎりかけて打算の見えかくれ
体罰を加え寝顔に詫びている
罰ゲームこそぞとばかり墨の跡
マスコミに乗って風化の罪と罰
ほめまくりまんざらでない顔にする
古い家今も饜饉 総檜
朝まだき座禪の腹に鐘響く
古傘をもろたつもか返らない
罰則が身内に甘い警察署
鑑定に出す骨董の自負が透け
遅刻して今日も廊下にお姉ちゃん
相続がないまま亡父の古時計
制裁はすでに受けたと法の慈悲
新しい発掘古代史を变える
体罰も思い出にある老恩師
不利とみて妻古傷に触れてくる
弟のしたことなのに叱られる

川柳塔打吹

米田 幸子報

亜希子 街湖 純子 サト子 絹子 土風 三郎 裕峰 為佐子 かつ子 広和 省子 句多留 あらた 潮華 早智 敏 満秋 定明 克枝 順子 逸子 玲泉 博丈 善江 よしえ

継ぐ者ない資産農地の悲鳴きく
レンタルのドレスきらきら光ってる
合格発表天まで昇るこの気持
きらきらと輝く星の下に住む
龍だつて天に逝くとは限らない
資産つぐ息子の顔が鬼に見え
資産など邪魔になるよと素寒貧
資産など無いがぬうくいウサギ小屋
昇進は鼻が高く近寄れぬ
赤貧に育ち資産に縁がない
きらきらと輝く水面春近し
へそくりの資産ざくざく壺の中
新人社きらきら真面目そうに見え
きらきらと輝く水面春近し
子に残す真つ正直という資産
一歩ずつ踏みしめ昇る砂の城
上昇気運に自由が欲しい奴
置き去りにされた男に陽が昇る
きらきらと足元狂い流れ星
華燭の典二人包んで陽が昇る
昇進の椅子がぎくしゃく落ちつかぬ

川柳やがわ

江口 度報

重忠 睦子 セツ子 かつみ 和歌子 一夫 しろう 一枝 松盛 佳女 信元 楨元 小生 勇喜男 芳光 和枝 雄々 瑩 玲子 節子 幸子 英壬子 かすみ シマ子 勇太郎 洋 波留吉

命かけ戦地を駆けるカメラマン
地方紙の報道ぬくい血が通う
ニュース読む庶民の勘は狂わない
順調に老化が進むどっこいしょ
老化などどこ吹く風と翔び回る
歩いて歩いて老化の時計遅らせる
めつて現象アリガトサンが多くなり
老化現象アリガトサンが多くなり
友人の名前が直ぐに出てこない
友人の風が老化へ先にくる
老化だぬ無造作に医者かたづけ
かくしやくと背筋もしゃんと薪金
老化する社会にとけるポラントピア
老化した話題に妻は妻なりに
約束の時間に来てたことがない
公約の違つ相手と手を結ぶ
約束をしたが何やら胸さわぎ
約束を果すと葱はよくのびる
楽天家の約束ちよつと心配に
約束に微調整する閨年
また酒が安請け合いをしてしま
約束の期限恐い兄ちゃん現われる
意気投合別に約束しなくとも
やりくりをした約束が待ちぼうけ

岬川柳会

八十田洞庵報

博泉 朝子 光子 たもつ ルイ子 度 亜也子 恵子 三郎 文秋 一風 とし子 小路 高栄 順三 吉之助 吉女 茜 弘一 仁清 亜成 三千子 庸佑 勇 年子 みやこ

奇跡とは言わず生命力と医者

また一人転居通知で遠くなる

落下傘知事どう手を結ぶ浪速府議

咲き誇る老樹うれしい樹医の愛

近づいた金婚式へ仲の良さ

話する口もう一つほしい歯科

医者の顔診断してる老夫婦

順調に慣れて挫折の恐さ知る

一呼吸おいて告知のレントゲン

妻という医者の養生見張り役

保育器の児も順調で笑顔見せ

人がたの雲が亡夫に見える朝

栗の皮むくがおいお茶おい煙草

気晴らしに始めた趣味に縛られる

気晴らしにつきあわされる電話口

名医にも心覗けぬ内視鏡

終章は医者の方トトにまかせよう

堺川柳会

河内 月子報

喜寿米寿次は半寿へ向く心

ジェラシーがねばって愛が歪んでる

幸せを逃がさぬように意地を捨て

さよならの視線の裏に未練あり

どんくさいもぐらで叩かれてばかり

再会へ幸せな顔見せに行く

ゴキブリを妻が叩いて僕は逃げ

逃げ道をつくって湧えてくる男

逃げ道など考えてない妻の意地

あいづちを打って一緒に逃げてやる

幸子

里子

蛙城

辰郎

信博

勝

茂平

ユミ子

みつ子

とみ

令子

悦子

野添

ヤエ

和美

俣子

洞庵

三面鏡借用証書見てしまっ

さばさばと叱られた事皆忘れ

省かずに産んでもらって六女です

片想いをねばり勝ちしたベルが鳴る

桜絵の食器に春の味覚盛る

逃げながらまだ言うたはる捨て台詞

妻の座にどかりと座り逃げられず

生き方も楷行草と省かねば

シンプルに生きる飾りをみな省く

訓練の時は上手に逃げられた

遅刻して省かれ居場所ない私

逆さまにしても徳利はみんな空

巢立たせて家事省くこと多くなり

土地勘が鈍くてポチに馬鹿にされ

年賀状省いておいて電話する

逃げ道がなくて肝っ玉が座る

このチャンスしっかりつかみ逃さない

さりげない視線でしが身が辣み

最後まで粘った点は褒めておく

酒飲んでしらけていては見苦しい

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

真相が分からぬままになる時効

真相に尾端をつけたがる他人

臆本の記載のぞいてからのウツ

真相を語る気はない姫鏡

真相へ梅は無口で咲きはこる

真相は口に出せない宮仕え

脈々と万葉かるた京に生き

冬虹

梓

五月

半銭

小雪

楓

日の出

千代

泰子

伽羅

舞夢

つづや

錦

紫

なぎさ

かりん

ちゃ子

朋月

八千代

深雪

しっかりと十指預かる父の脈

矢表に立つ心ぞうをととのえる

人脈の外で超然やせ蛙

脈々と生かされ今日を感謝する

妻が持つ紐は怖くて引けません

口裏を合わせ怖い風といる

警察が警官調べる怖い国

惚けるのが怖くて今日も走ってる

怖い人が来たなと分る帽子掛け

花何時もある路地裏の地藏さん

路地裏に落ち着きました花の種

井戸端の絆が消えた路地の裏

路地裏に尻尾を隠し棲んでいる

度の過ぎたいたわり迷惑かも知れぬ

いたわりの心が通う手の温み

いたわりをランク付けする介護法

いたわってくれてはいるが喧しい

チンブイブイ傷をいたわる上の姉

限界を知った背伸びはもう止そう

筆まめな母の便りが来ぬ不安

朝だからみんなの笑顔もいらいます

宅急便の蟹海鳴りを連れてくる

花粉症わたしは春が嫌いです

いずも川柳会

佐藤 治代報

爽やかな毒舌ラムネの味がする

毒舌が又も大きな輪を崩す

ぼんぼんと毒舌がとぶ好い仲間

毒舌が胸に刺さったまま錆びる

とし子

メ女

洋

吉之助

秀夫

節子

義一

スミ子

靖巳

ルイ子

澄子

五月

櫻

柳宏子

泰雄

石舟

しげお

紫香

高栄

庸佑

和子

おさむ

おさむ

諷云児

昌枝

房子

久子

治代

毒舌が我関せずでまくしたて

毒舌に負けなげ嫁になりました

実家近づき甘い顔になつてくる

眼のうつろい冬虫

孫帰省枕ならべた三日間

山芋とそば粉帰省を待ちわびる

帰省して元に返つたグアイエツト

無責任ハッカー世界をとび歩く

操縦桿死んで守つた人が居る

責任の意味が分らぬノック知事

責任がいつぱい落ちてゐる役所

責任の火の粉は平が消しておく

責任を追つかけて来る棒グラフ

一日の重さを流す髪洗う

髪の手入れきつちりとして敵に逢う

髪白くなつて死ぬのがいやになり

家の茶髪は明るくて飯も炊く

髪を切るもつ泣けるだけ泣いたから

養毛剤こんな生えたコマージュル

宇宙から見守る亡母がいる安堵

ロケットの失敗宇宙が笑つてる

仏さまがうようよ宇宙で遊んでいる

かさかさ乾いて宇宙人になる

宇宙の果てからきつと来る花便り

十二年亡父は宇宙のどのあたり

豊中もくせい川柳会

上流にひっそり平家村がある

まこと

一葉

信介

多賀子

忠義

おしえ

芳枝

芙佐子

蘭水

茂美

多輝子

あきら

ちえ

青湖

多喜

ひろし

ちかし

裕

寿美

草丘

篤子

満江

きみえ

章峰

文子

れいじ

紫香

Uターン心を洗う故郷の川

川一つ越せば異国という寒さ

先頭が進む方へとは蟻の列

彼女との進み具合はまだ秘密

前へ前へこれが私の処世術

パレードの切れ目を夫がかけぬける

パレードに見る各国のお国柄

妃殿下の笑顔パレードもりあがる

ケロイドの手が読みふける黒い雨

廃刊の古書に出会つた街はずれ

古書店の隅に覚えのkastori誌

過ぎ去つた青春に会う古本屋

リハビリの友に文書く春灯下

花狹ようやく春の音になる

本音しか言わず通した人強し

色褪せたとこから過去の顔が見え

のり巻きを丸かぶりして歯科通い

補聴器を替えてやつたらよく笑つ

しのび寄る春を彩る福寿草

川柳塔みちのく

小寺

花叢報

紅雨

力誠

しげる

大吾

ヒサ子

萬的

柳宏子

英女

露児

寿美子

慶子

重人

石舟

知香子

周信

正坊

きく子

求芽

吉太郎

ただし

博史

しげお

庸佑

花叢報

紅雨

力誠

しげる

大吾

ヒサ子

北歩

順風

慕情

返り咲くまでは自製の酒になる

かごめかごめ遠い昔のことばかり

ほどほどの苦楽味わい夫婦の譜

父の腕パージンロード渡る幸

馬鹿もたいまつ赤な嘘に騙される

熱帯もさめます祝辞まだ続き

地下足袋と軍手に花道を譲る

花道で作り笑いをする造花

面白い男の隠す二枚舌

戒名の子供と遊ぶ遠花花火

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

気がつけば足もとにいた青い鳥

いろいろと言うてもつまり金のこと

ドラマ見る真正面にでんと妻

親心子のせつかに泣いている

天ばかり見て足元が留守になり

冗談の通じぬで肩が凝る

菰巻きを木にマフラーと児が言いし

キツンで噂話の椅子を寄せ

仲良しながら叱る言葉も少し入れ

褒めながら叱る言葉も少し入れ

元日に集金に来る小さい手

ときどきは顔をみせてよ待ってます

父の椅子酒と煙草で語り出す

窓ぎわの椅子で夕日が身に沁みる

銀波

ふさふ

花匠

愁女

ツネ

井蛙

黙人

隆樹

一花

五楽庵

朝子

一道

ますみ

トシエ

まさと

いつふみ

春江

知佐子

美代子

民子

明

八寿子

宏

剛治

ミツ子

道子

江

過疎に来てビタミン補給して帰る
 回り椅子に慣れて無情に輪をかける
 通り過ぎた足音きつと福の神
 頼りげな釘一本の帽子掛
 ととききは首もたげます腹の虫
 叱ってる共に泣いてる母のかお
 しばらくは嬉しい妻の里帰り
 椅子の上物積み重ね掃除する
 知っておこう大きな椅子がおえら方
 大臣の椅子に光が当たらない

川柳藤井寺

高田美代子報

舶来の化粧を入れた恋の箱
 魔法の箱が欲しいと孫の無理なTELE
 女の野心いっぱい詰めた化粧箱
 リストラの箱に詰って吐息
 うたかたのバブル弾けて玉手箱
 小銭ばかり話はずむ貯金箱
 どうせなら大きい箱の方貰う
 箱いっぱい詰めてまだある親心
 紫に決めた私の終のはこ
 小さな箱へ殺到する大人たち
 やる気だなあちこち顔を出している
 やる気ない彼に話すも通じない
 りハビリのやる気へ妻が杖になる
 ぐうたらをやる気にさせる船と鞭
 多数決楽しい方へよろめいた
 若さには負けへんやる気持っている
 わたくしをふるい立たせる老母がいる

和歌子 春子 一風 幸枝 隆盛 美千子 恭一 奈良司 友甫 鬼遊
 利武 恒雄 大八 アキ かつみ よしえ 史郎 婦美枝 美代子 定男 正一 春蘭 政代 志洋 瑠美子 悦子 扶美代

地吹雪の音はやる気を起こさせる
 美しい汗だ本腰入れている
 楽しみの真ん中辺にある不安
 楽しみが何か足りない一人旅
 カレンダー会う楽しみに丸をつけ
 視姦という楽しみやはり男だな
 久し振りの鼻唄風に乗る
 輪が回るフォークダンスの中にいる
 楽しみなまだ開けてない福袋
 楽しみの予定の詰まる初暦
 楽しみを知る靴音かるくなる
 楽しさにつられ時計も早回り
 こっそりとだから楽しいこともある

ローズ川柳会

山崎 君子報

少し照れお笑い草にと豆句集
 限りある命若葉で充電し
 梅ヶ枝のつばみは雪と何話す
 早春の風が吹き消す不信感
 雑草も更地五年の冬帽子
 雑草の自分の力信じ咲く
 たんぼの小道を登る春遍路
 草に寝て空とお話はずみませ
 肩の力抜かせてくれたハブテイ
 青春を謳歌している草いきれ
 すべりひゆを見ると戦野の食思
 早春を恋う飛行機雲の尻尾
 はつきりと亡母の思い出よもぎ摘む
 旅の宿丹前しづい草木染

美人 重人 鐘造 和樹 昭子 終一 喜代子 龍一 桂子 敦子 昌子 六子
 哲子 トミエ 貴代子 澄子 いわゑ 武庫坊 年代 君子

大げさな籠で野草が照れている
 歳月の流れて早し八十路坂
 ランドセル投げて道草蛙追う
 羨子 笑子 雅子

第31回川上三太郎賞作品

雑誌 5句

■未発表作品 審査 時実 新子

■一次審査 全作品を審査、成績上位10名を一次審査通過者とする。

■二次審査 一次審査通過者10名を対象に5句1組として審査、審査員2名の総合成績により川上三太郎賞1名・準賞2名を決定する。

■表彰 川上三太郎賞(大野風柳半折作品・賞状・副賞3万円) 準賞(大野風柳半切作品・賞状・副賞1万円)を7月9日の柳都全国川柳大会上で表彰する。

■投句 4月20日着・千円(小為替)同封 956-8691

新津局私書箱15号 柳都川柳社宛

全国川柳作家年鑑募集(ふあうすと川柳社)

句稿 作品7句(所定参加用紙あり)

参加費 3000円(小為替・振替)

締切 6月末日

刊行 9月下旬予定(年鑑1冊送付)

連絡先 65046神戸市中央区港島中町3-12 千004-11-64-401 福島直球宛



奥谷弘朗先生を偲ぶ

野口節子

そして奥様の句をたくさん詠まれています。

半分の大きい方を妻にやり

おかえりと迎えてくれる妻がいる

妻という日本一の杖がある

素晴らしい夫婦愛です。

死ぬるまで男可愛や見栄を張る

純粹で童心そのものの先生は、きめ細やかで

懐の深い奥様に包まれ、川柳命を貫き通し幸

せな生涯ではなかったでしょうか。

最後に私が川柳塔850号大会の選者を仰

せ付かった時、先生は御自分のお身体の調子

もかえりみず、どうしても同伴してやると最

後のエネルギーを注ぎ込み御一緒してください

いました。先生との最後の旅であり、終生忘

れ得ぬ思い出となりました。なお、新しく出

帆しました打吹丸の行方を草葉のかけで見守

ってください。享年八十五歳。どうぞごゆっ

くりおやすみくださいませ。

弔 吟

シベリアを想いお山に建てた句碑 米丸勝見

空瓶が主の帰りを待つ書齋 米田幸子

師の姿伯耆の山に抱かれて 山本玲子

川柳塔主幹で通夜の箔がつき 野口節子

心から御霊の安らかなことをお祈りいたし

合掌

二月二十五日、奥様より「主人が亡くなり
ました」という訃報を受けました。その三日
前に肺炎になられたことを伺いましたが、以
前にも肺炎で九死に一生を乗り切られたあの
パワーで、きっと良くなれると信じ切つて
いた矢先で、言葉が出ないほど驚きました。

思い起こしますと、十五年前、先生のお人
柄に接し誘われるままに入会致しました。昭
和二十九年頃、打吹川柳会を創立され、先生
の川柳に対する情熱、会員への思いやりは並
並ならぬもので、近隣の句会には何も分から
ない私達を同伴し、御指導くださいました。
まるでお父さんのような存在でした。反面、
天真爛漫でお酒が入り宴も闊となると、知る
人ぞ知る、十八番の月形半平太の「東山三十
六峰」を口角泡を飛ばさんばかりに熱演され
ました。その御満悦のお顔がもう見られない
のが淋しくて悲しい極みです。

また、偉業とも言える数々の大会を見事こ
なされ、特に印象深いのは倉吉市制四十周年
記念農業博覧会を何とか川柳で盛り上げると
意気込まれ、堂々企画なさいました。当日は
生憎と凄しい台風で農業博は閉館を余儀なくさ
れましたが、川柳大会は全日本川柳協会会長
仲川たけし先生を迎え立派な講演の榮に浴し
百人近い参加を得て、感動のうちに終らせて
いただきました。

また一方、伯耆富士とも言われる大山に立
派な句碑を建立なさいました。

北壁の男らしさを見て飽かぬ 弘朗

先生が宮林署勤務時代の長期滞在中に北壁
の真のたたずまいに接し、心の奥底に積み重
ねた実感をこの句に託されたものと思います。
また、シベリアの句も数知れませんが、若くし
てシベリアに抑留四年間、厳しい苦勞の記憶
が生涯離れなかったものと窺われます。

柳界展覧

〈奨励賞〉

胎教はシューベルトより
母の声 石森 利昭

★やまと番傘川柳社創立50
年記念川柳大会が3月5日
榎原ロイヤルホテルで開か
れ、本社同人の秀句は左記
のとおり。

弟の左の頬にある故郷
太田扶美代

★平成11年度阪神文芸祭入
賞者が2月19日、川西市文
化会館で表彰された。本社
関係は次のとおり。

〈兵庫県芸術文化協会賞〉

転ぶなよ自信過剰の靴履
いて 川島諷云児

秀作に門谷たず子・濱田
良知・住谷石舟・軸丸勝巳
坂上高栄の五氏が入賞。

★平成14年第17回国民文化
祭鳥取大会川柳大会会場が
鹿野小学校体育館に決定。

★第11回守口市文芸展が2
月25日―27日の三日間、さ
つきホールもりぐちで開か
れ、同人二氏が受賞した。

〈市長賞〉

穏やかに論ずつもりが愚
痴になり 井上 桂作

事会に出席のため上京。

■2月26日、奥谷弘朗氏の
通夜に参列のため薫風主幹
倉吉行き。

▽同人消息△

■越智一水氏(今治市)の
句碑が今治の向い島「大島」
に昨春、建立されていた。

平成9年の大島「島四国八
十八ヶ所巡り」の金賞句の
色即是空そんなで島遍
路が、大島の人によつて、
第47番札所法南寺に建てら
れていたのが、この程、判
明したと同氏から喜びの便
りがあった。

▼訂正とお詫び▲

■2月号P16(川柳塔)
下段11行目パット↓パット
田柵馬・各題2句・欠席投
句拝辞・会費10000円・
事務局は津山市教育委員会
(0868・23・2111)

▽人事往來△

■2月10日、薫風主幹は蔵
前の龍宝寺で行われた日川
協理事会・東西合同常任幹
段12行目新雪↓実

■P114(各地柳壇)中

■P45(川柳塔)下段2行
目神等志出↓神等去出

■P109(佳句地十選)
8句目新雪↓実

▼計報▲

■大塚孝子さん(同人大塚
節子さん母堂・大阪市)は
2月13日、病氣のため死去
79歳。

■3月号P101(本社
二月句会)中段17行目寿子
↓寿美

■奥谷弘朗氏(参与・倉吉
市)は2月25日、病氣のた
め死去。85歳。告別式は倉
吉市の小山葬儀社で行われ
柳友多数がお見送りした。

■乾実千秋氏(同人乾隆風
氏子息・鳥取県)は2月14

日、病氣のため急逝。50歳。

■奥谷弘朗氏(参与・倉吉
市)は2月25日、病氣のた
め死去。85歳。告別式は倉
吉市の小山葬儀社で行われ
柳友多数がお見送りした。

■乾実千秋氏(同人乾隆風
氏子息・鳥取県)は2月14

新同人紹介

西山

— 太茂津・柳宏子・緑良推薦

幸

宮崎

— 五楽庵・協推薦

ヒサ子

井上

— 薫風・利昭推薦

桂作

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田 川柳会	15日(土)集合・南海岸和田駅前 午前10時 籤・計算・合格・冴える	吟行会場 牛滝温泉「いよやかの里」 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地裡村
城北 川柳会	15日(土)午後1時から あいまい・芽・包む・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岬川柳会	16日(日)午後1時半から こっそり・すれ違い・久しぶり	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から ひやひや・パイプ・責任 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木)正午から 勘・迷う・自転車・うっとり 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から ドレス・公園・呼ぶ・肌	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川柳 ねやがわ	23日(日)正午から 脈・玄関・選ぶ・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 ふうもん 社	23日(日)午後1時から 正念場・リハビリ・じっと	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
はびきの 市民 川柳会	23日(日)午後1時から めっきり・菓子・呆れる 「タイトル」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京都 塔の会	24日(月)午後1時から 友・アレルギー・得手	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	24日(月)午後7時半から 桜・蛙・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	26日(水)午後6時から 駆出し・記号・クレヨン・携帯	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前10時から 通う・爪・率直	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

川柳塔東大阪カルチャー教室 4月27日(木)2時から 布施駅前市民プラザ
「素敵」3句-5句・〒593-8305 堺市堀上緑町2・16・3 河内天笑宛

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
富柳会	1日(土)午後1時から 板・気晴らし・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 みちのく	1日(土)午後4時から 転ぶ・未成年・ひやひや	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 唐津支部	2日(日)午後1時半から スマイル・太い・探す	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
川柳塔 な	6日(木)午後1時から 釈迦・匙・吊る	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北徒歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉2-4-23 中原比呂志
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から 菜の花・鼻・雑詠(A・B)	サンビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 打吹	8日(土)午後1時から リズム・堪える・喉	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 怒る・貰う・約束	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 勉強・ぐいぐい・コンビニ (折り句)「ら」で始まる句	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から カバン・忘れる・浅い・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市二度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 大学・とかく・介護	豊中市立釜池公民館 阪急・モノレール釜池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼崎 尾浜 川柳会	11日(火)午後1時半から 栄える・モデル・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
八尾市民 川柳会	11日(火)午後6時から ばたばた・忍ぶ・えくぼ・焦点	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
堺川柳会	13日(木)午後1時から 迎える・魂・(折り句)あたま	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西側西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳会 梨花	15日(土)午前9時半開場 吟行会(詳細1月号P.108参照)	鳥取県民文化会館 第2会議室 (鳥取駅から徒歩10分・バス5分) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子

編集後記

★蕾のバラを五本頂いた。

活け方が下手なのか今までバラをよく枯らしていたので心配しながら、一輪挿し二つに一本ずつ、洒落た備前焼の器に三本活けた。暖かい部屋に置いた三本は二日ほど経つと、クリーム色と薔薇色が二つ、見事な花を咲かせてくれた。

★続いて、三日目にはオレンジ色の花が玄関を明るくした。あまり暖房の効いていない私の部屋の一輪挿しの花は開かない。暖かい部屋に移しても一向に咲く気がないので、傍を通る度に声をかけてみた。「咲くのを楽しみにしているからね」「待っているね」と。

★「花は音楽にも人の言葉にも反応する」という話を何となく信じてみたくなっ

たのである。一日、二日経つと心なしか綻び始めたようだ。そして、クリーム色

に朱の縁どりの優美な花がやつと開いた。私の言葉を聞いてくれたのか、遅咲きの花なのか知らないが、とに角咲いてくれた。花がなんと可愛く見えたことか。

★講談社現代新書『俳句と川柳』『笑い』と「切れ」

の考え方、たのしみ方』復本一郎著を読んだ。ところどころ、頷いたり、反発

したりしながら読んだ。川柳とは、俳句とはと考えるがら…。

★自分の句帳を見ると、以前に作った句と同じような句ばかり並んでいる。反省することしきりである。どうしたら句境を広げることが出来るか。「川柳とは何か」「私の川柳論」など皆さんの日頃考えておられる事を聞かせて頂きたい。(み)

ひとこと

フツのオバサンの一言

「ビールのラベルに川柳を載せたら」と何げなく言ったフツのオバサンの一言が、思いがけなく膨らんでしまいました。主人と共に参加した宮崎のゴルフ大会前夜祭でのことでした。

同じテーブルの時計台ビールの社長さんとの歓談で、川柳を披露し「ラベルに川柳を」と私が洩らし「一言に「それは面白いノ是非

ともやっつけてください」と話がはず

み、川柳塔をはじめ、川柳八誌への募集広告と、一万枚の公募チラシにまで進んでしまいました。

今まで、川柳を読んでいただけの方にも、自分で詠む楽しさを味わっていただけならと思います。

思わぬ川柳の絆・企画に戸惑いつつも、成功を願っています。

「任されて眉間の皺が深くなる」(播本 充子)

○日本旅行業協会が行った

一万人のアンケートによる男性の一人旅はあったが、旅行は「夫婦で」と答えた五十代以上の男性が六

二%だったのに、同世代の女性性は四七%だそう。この数字は私の予想外だった。

「夫婦で」という女性もつと少ないと思っていた。○なぜなら、これまで参加した海外観光ツアーでは、

中年以上の女性グループが圧倒的に多かった。夫婦は行く。

○「主人は」と尋ねると

「留守番」とのたまう。くだんの協会の「女性性は年をとるにつれて、旅行中は日常

生活から解放されたいという傾向が強くなるようだ」との説もうなずける。夫婦

旅行だと日常生活の延長になり、敬遠されるわけがわからぬでもない。

○春つらら、旅ごころをそそられる。さて、あなたは誰と旅行しますか。(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（6月号）

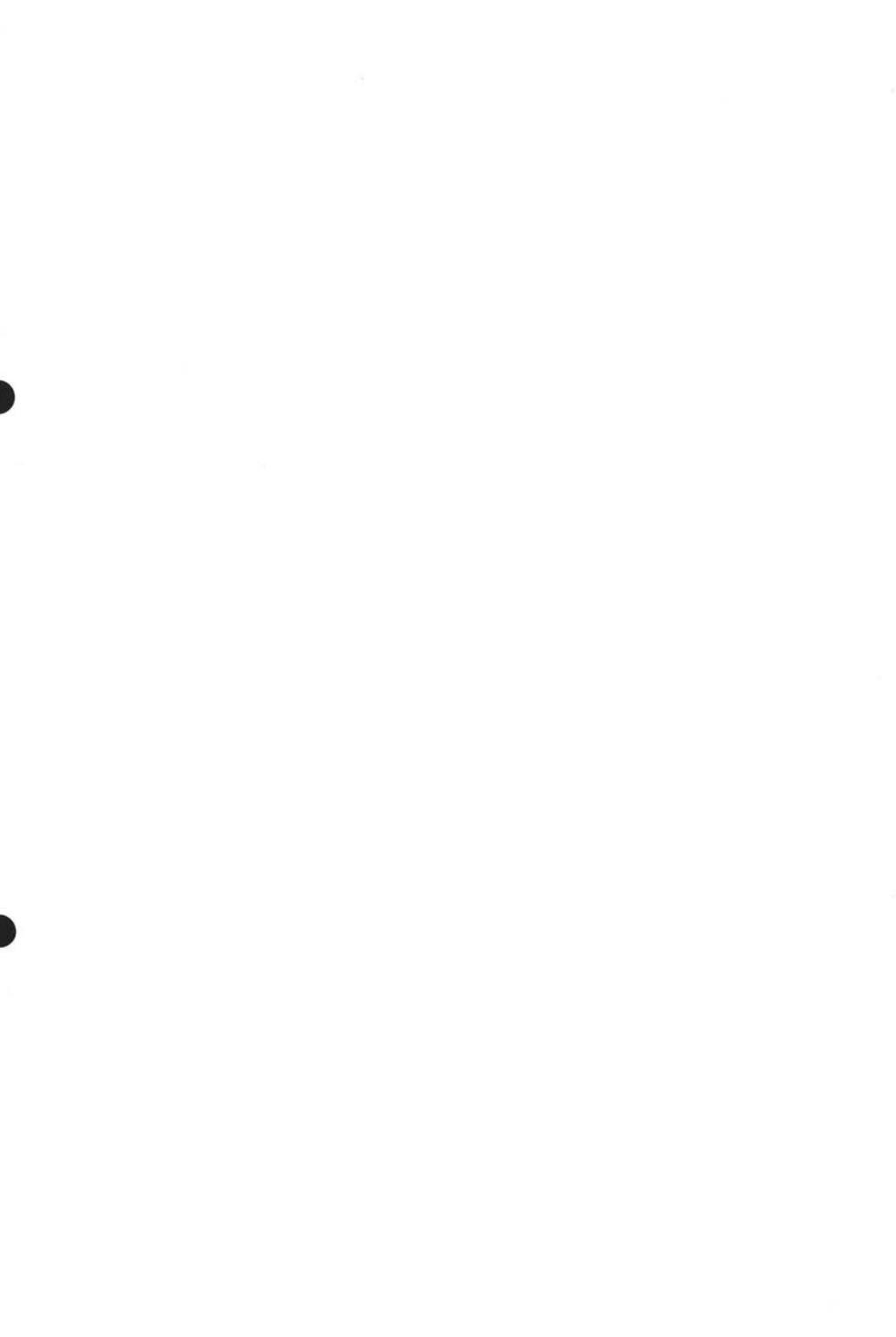
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

6月号発表(4月15日締切)

川柳塔(8句) 橋 高 薫 風 選
 水煙抄(8句) 河 内 天 笑 選
 愛染帖(3句) 波 多 野 五 楽 庵 選
 茴香の花(3句) 宮 西 弥 生 選
 「スマイル」 大石 あすなろ 選
 「太 い」 寺 川 弘 一 選
 「探 す」 岸 本 孝 子 選
 初歩教室「夫 婦」(3句) 吐 田 公 一 担 当

本社4月句会

とき 4月7日(金) 午後5時半
 ところ アウィーナ大坂 4階
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6777-1441
 地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「きらきら」 吉 川 寿 美 選
 「呼 ぶ」 吉 村 一 風 選
 「石」 高 須 賀 金 太 選
 「えくぼ」 宮 崎 シ マ 子 選
 「未 来」 橋 高 薫 風 選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
 会費 1000円 投句料 500円

7月号 課題吟 「角」「恵み」「隠す」
 初歩教室 「シーズン」

本社5月句会 8日(月) 予定
 兼題 「ネクタイ」「あわてる」「男」「味方」「挨拶」

夜市川柳募集

第11回「山」 奥山晴生選
 ハガキに3句 4月末締切
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 六百元(送料76円)
 半年分 四千元(送料共)
 一年分 七千九百元(同)

二〇〇九年(平成二十一年)四月一日発行
 編集兼 橋 高 薫
 発行人 橋 高 薫
 印刷所 美 研 ア ー ト
 〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
 電話(06)交元一六九一四番
 振替〇〇九八〇一五二三三六八番

第24回 全日本川柳二〇〇〇年東京大会

日時 平成十二年六月十一日(日) 午前十時開場
 場所 日本青年館ホール
 〒100-0033 東京都新宿区霞岳町十五番地

電話 〇三三四〇一〇一〇(代)
 〇三三四〇一〇一〇(代)

交通案内

□別紙交通案内図参照

JR信濃町駅より徒歩7分

JR千駄ヶ谷駅より徒歩7分

地下鉄銀座線・外苑前駅より徒歩5分

宿題 第一部(事前投句・五月十日締切)

「飛ぶ」 福岡 伊豆丸 竹仙選

「フアッション」 三重 木野 由紀子選

「柱」 神奈川 鈴木 柳太郎選

3.5×18cmの句箋一枚に一句宛記入。

各題二句、無記名、封筒に住所、氏名明記、

投句料一〇〇〇円(定額小為替、現金書留)

同封して郵送のこと。

投句先 〒332-0015

川口市川口一三二一四〇一 松岡葉路方

日川協東京大会事務局宛

電話・FAX 〇四八(二二二) 八〇八四

郵便振替口座 〇〇二〇〇一七七一七六九八〇

宿題 第二部(当日投句・十一時十分締切)

「東京」 東京 加茂 如水選

「起点」 兵庫 小松原 爽介選

「ゼロ」 北海道 斎藤 大雄選

「やさしい」 新潟 大野 風柳選

各題二句、各部各題とも未発表に限る。

第二次選者

仲川 たけし・吉岡 龍城

磯野 いさむ・橘高 薫風

藤沢 岳豊・大木 俊秀

竹本 瓢太郎

会費 四、〇〇〇円(昼食・記念品共)

表彰

① 文部大臣奨励賞 一名

② 参議院議長賞 一名

③ 川柳大賞 一名

④ 大会賞 十一名

大会参加のご案内

観光

平成十二年六月十日(土)

隅田川下り 浅草より日出橋

別紙観光案内参照 四、〇〇〇円

前夜祭 平成十二年六月十日(土) 午後六時

会場 日本青年館中ホール(立食パーティー)

会費 七、〇〇〇円

宿泊 平成十二年六月十日(土)

泊 日本青年館ホテル和室(相部屋)

宿泊費 八、〇〇〇円(朝食付)

部屋割り等は、事務局から御案内。その他の

お問い合わせは、事務局までご連絡下さい。

申込締切(四月末日必着厳守)

別紙申込書に内容をご記入の上、合計額を送金

して下さい。

申込先及び送金先

〒332-0015

川口市川口一三二一四〇一 松岡葉路方

日川協東京大会事務局宛

電話・FAX 〇四八(二二二) 八〇八四

郵便振替口座 〇〇二〇〇一七七一七六九八〇

(社) 全日本川柳協会 大会委員長 磯野 いさむ

全日本川柳 東京大会実行委員会

大会実行委員長 竹本 瓢太郎

〒190-0002

立川市幸町四一五二一七四〇五

電話・FAX 〇四二(五三七) 三八〇四

* 宿題第一部(事前投句)先が変更されて

おります。ご注意下さい。

麻生路郎の幻の名著復刻

川柳とは何か

—川柳の作り方と味方—

麻生アート発行・橘高薫風序・B6判・266頁
 美装上製本・頒価 2000円・(〒340円)
 お申し込みは 川柳塔社事務所へ